トルストイは、基督の最初の弟子達のやうに人は人に服從するよりも先づ神に服從しなければならない、主權者の命令も神の法即ち愛の法則に矛盾しないものに限つて之に服せよ、と唱道した。現代諸制度のうち、神の法—人類相互の愛—に矛盾する最大のものは兵役である。トルストイによつて、教會の誤つた解釋から解放された基督教の眞意義を認めた者は、いろ〳〵な時代、いろいろな國民の間に現はれた眞の基督教徒と同樣に、兵役を罪惡と見做した。從つて兵役に服することを拒絶した。

トルストイの所說に共鳴して、兵役義務を拒絶した最初の事件は、一八八四年モスクワに起つた。其の後斯種の拒絶は益々增加した。政府は兵役忌避の危險を感じて、之が根絶策に腐心した結果、遂に基督教の眞意義を他人に解明する機會を與へないことにした。そして此の種の人々をある者は流刑に處し、ある者は癲狂病院に打ち込んだ。例へば一八九一年クウルスカヤ縣で兵役を拒否した教員エウドキム・ドロツヂンはウォロネジ軍紀大隊(軍隊懲罰隊)に監禁され、其處で彼は長期の服役と拷問との結果肺病に罹つて、一八九四年遂に獄中に死んだ。ドロツヂンの友人等は彼の傳記を出版したが、其の跋文にトルストイ自ら筆を取つて斯う書いてゐる。「ドロツヂンのやうな人の行動



こそ、豫言者の豫言したやうな神の國を建設するものである。此の種の人々は、神の國に到達する唯一の確實な途を、實際の行爲を以て示してゐる。」

一八九五年に「ヅホボル」と稱せられる數千人の教徒が同時に兵役を拒否した。ヅホボル教徒が始めてロシヤに出現したのは十八世紀の後半で、其の教義は、正教會の儀式と機密禮とを悉く排斥して、精神と眞理とに於てのみ神に奉仕すると云ふのが本旨である。凡ての人は全然平等であると考へて居るところから、彼等は一切の外部的差別を認めなかつた。此の教徒の教義によれば、地上には宗教界にせよ、一般世俗にせよ一切主權と云ふものの存在すべき筈がない。何故なら人は皆平等で又誰でも迷誤と罪過とに陷るものであるから。彼等の間には相互扶助と同胞主義とが著しく發達して、共有の會計、共有の家畜、共有の倉庫、共有の孤兒院等があつた。

皇帝アレキサンドル一世の時、「ヅホボル」教徒はロシヤの中樞地方から、タウリーヂ゛スカヤ縣に移され、其の後ニコライ一世の時には裏高架索(チフリス、エリザウ゛ェトポリの兩縣及びカルスカヤ州)に移された。

ヅホボル教徒は、基督の教義に照らして、銃を執り、戰爭することを大罪と認めてゐた。政府は

彼等を裏高架索に追放して一切の兵役を免除したのであるが、其の後一八八六年に至つてヅホボル教徒も召集して兵役に服さしめると云ふ指令を發した。之に對してヅホボル教徒は、一八九五年までは從順に服從してゐたが、同年に至りヅホボル教徒の牛耳を取つてゐたピョートル・ウェリギンと云ふ、豫てトルストイの說を研究してゐた男が同教徒に對して、一切宣誓を破棄して兵役は勿論其の他官憲の暴力的行爲に參加することを拒否すべきことを勸めた。

此の時からヅホボル教徒の間に兵役忌避が逐次始まつた。現役の者ばかりでなく、既に豫備役に編入されてゐた者まで兵役を拒否して、所屬長官に關係書類を返納した。また選ばれて村長の役に就いてゐた者も、その長官に官印及び書類を返還して其の職を辭した。

一八九五年六月二十八日の夜、ヅホボル教徒は所持して居た小銃を三箇所に集め、薪を積み重ね、石油を注いで火を放ち、讃美歌を唱ひながら之を燒き拂つた。之を以て一切の暴虐行爲に關與することを斷然拒絕する意志を表明したのである。

此の事件があつて以來政府はヅホボル教徒に對して俄かに慘虐な壓迫を加へ出した。最初コザックを彼等の部落に配置し、ヅホボル教徒に對して能ふ限りの暴威を振はしめ、少しでも氣に入らな



いことがあれば容赦なく打据へさせた。其の後政府は同教徒を其の部落から引出して、チフリス縣下諸郡のアルメニヤ人部落、グルジン部落、韃靼人部落などに各々二戸乃至五戸位宛移住させて、土地は勿論少しも與へず、相互間の交通をまで嚴禁した。斯うして最初に移住した家族の數は四千人に達した。彼等の境遇は極めて困難であつた。彼等が移住した部落は何れも貧乏部落であつたから、ヅホボル教徒は其の土地では何んな仕事も求めることが出來なかつた。さうかと云つて、仕事のために出稼に他村へ行くことは嚴禁されてあつた。こんな譯で飢餓と窮屈と病氣のために、僅か二年足らずの間に四百七十人以上死歿した。

政府から騷擾の主謀者と認められたヅホボルは牢獄に投ぜられ、現役を拒否したもの(四十一名)はエカテリノダル軍紀大隊に送られて笞刑を加へられた。その中七名は笞刑の苦痛に堪え切れないで遂に復役を承認した。他の三十四名は堅く其の主張を枉げなかつたので、遂にヤクーツク州へ十八年の流刑に處せられた。此の外に豫備役の者で兵役を忌避した者及び騷擾主謀者と認められた四十名も、同じく十八年の流刑に處せられた。其の他の者はチフリス縣の移住部落に相變らず苦しい生活を續けてゐた。

彼等の生活が如何に苦しかつたかは、あの剛情なヅホボルが遂に外國移住を願ひ出るに至つた一事でも解る。政府は此の請願に對して或期間を經て許可を與へた。ヅホボル教徒の兵役忌避を以て「人類のため最も有益なる偉績」と見なしてゐたトルストイは（之に就いて五つの論文を發表した）全力を擧げて彼等の移住に援助した。數千人の國外移住には先づ何よりも莫大の資金が必要であつた。そこでトルストイは、ロシヤは勿論歐米各國の社會に檄を飛ばして、ヅホボル教徒のために義損金を募り、又は困難な移住に對して直接の指導を求めた。此の外トルストイは、よく慈善事業を以て知られて居た資産家達に手紙を發して、ヅホボル教徒の外國移住に寄附金の醵出を慫慂した。そればかりでなく、トルストイは新たに執筆した小說『復活』の最初の版權を雜誌社『ニーワ』に讓つて一萬二千留を得、之を全部ヅホボル教徒移住のために寄贈した。その結果、一八九九年七千三百七十名のヅホボル教徒が首尾よくカナダに移住した。之に就いてトルストイの奔走は並大抵ではなかつた。移住地に關して、英國に在る友人との間に書面を以て連絡を取り、關係諸官廳に對しては簡便な取扱ひ方を交渉し、其の他移住地を提供した仲介者との直接交渉、ヅホボルとの交通等一切トルストイ自ら之に當つた。



併しシベリヤに流されたヅホボル教徒に對しては國外移住は遂に許可されなかつたので、一九〇五年まで彼等は流刑の地に止まつた。しかし此の年に至つて、神を信仰するのに、政府で定めた方式によらず、自己の良心の命ずる處に從つたと云ふ理由で流刑に處せられた人達は、刑を解かれた。

## 二八　基督の教義・飢饉論

『神の國は汝等の衷にあり』の後に續いて書かれたトルストイの著書は『基督の教義』である。本書の中にトルストイは、基督教に據る人間生活の意義及び使命は何か？　人は彼を此の世に送つた神の意旨を實行せんがため如何に生活すべきか？　と云ふ問題に關して系統的に且つ詳細に論述してゐる。トルストイは此の著述に約二年を費した。

基督教によれば人間には肉體的と精神的との二つの本質がある。人は一面から見れば動物であつて、肉體を有する間は動物たることを止める譯には行かない。が、他の一面から見れば、人は精神的存在で、人間の凡ゆる動物的要求を超越したものである。即ち人間は野獸でなく、同時に天使で

もない。人間は野獸より生れる天使であり、動物より生れる精神的存在である。この出生の中に現世に於ける我々の生活全部が含まれてゐる。

人間の衷に精神的存在が生れる時、自分一個の爲のみでなく、凡ゆる存在のために福樂を祈る心が起る。此の凡ゆる存在のための幸福を願ふ心は愛である。聖書の中にも神は愛なりと教へられてある。「何人も曾て神を見たる者なし、我等若し互に相愛せば神我等の衷に存す。」(約翰第一書四章十二節)

人生の結局の目的は人間には隱されてあるけれども、人は皆自分の使命を果すやうに行動すべきであると云ふことは解る。人は相互の間に合同と一致とを實現して、始めて自分の幸福を獲得し得るのである。故に人間生活の目的は分離と不和とを排して、世界に合同と一致とを確立させることにある。而して世界に合同と一致とを確立せしめんが爲には、先づ各人が心の衷に愛を擴大しなければならぬ。

人間の眞の生活は各人心の衷に愛を擴大することである。而して人間の眞の生活、愛の生活を妨害するものは肉慾、安逸、貪慾、權勢慾、姦通、酩酊などの罪惡である。若し此の種の罪惡がなか



つたならば、貧者の窮乏も、富者の飽滿も、放蕩も、竊盜も、掠奪も、死刑も、戰爭もあるべき筈がない。是等の不幸は他人にも罪惡を齎らすが、惡行を行ふ本人をも種々の不幸に陷れるものである。卽ち柔弱、飽滿、退屈、幽悶、冷淡、心勞、恐怖、疑惑、惡念、怨恨、慘忍、嫉妬、無氣力、其の他の凡ゆる苦しい病苦に泣かしむるのである。基督教徒は上述せるが如き罪惡より自己を解放して心に愛の火を燃すことに其の生活の意義を見出してゐる。然らば基督教徒は死後の生活に於て何ものを期待してゐるか?人は死して後どうなるのかと云ふ問題に就いては、今日まで種々樣々な判斷が行はれてゐる。が、結局人は之を知り得ない。唯基督教徒に取つては、信ずべき、疑ふことの出來ない一つのことがある。それは基督が其の死に臨んで述べられた「我が靈を爾(神)の手に托す」と云ふ言葉である。人は死によつて、最初出た處へ歸るのである。若し人が自己の生存の根源である神は愛であると云ふことを信ずれば、死して神に歸ることは、正にこれ己の望む所として喜ぶのが當然である。故に彼等は死を怖れないばかりでなく、寧ろ其の前途に開けてゐる新生活へ移るのを喜ぶのである。

一八九八年ロシヤのある地方は又しても大兇作に見舞はれた。で、トルストイは其の子イリヤの

領地、トゥーラ縣チェルンスキイ郡のグリニョフカ村に移つて、一八九一年の時のやうに無料食堂の開設に著手した。彼はチェルンスイキ郡の外なほオルロフ縣のムツェンスキイ郡内にも無料食堂を開いた。然るにオルロフ、トゥーラ兩縣の知事が、彼の事業を甚く妨害したので、餘儀なくトルストイは救濟事業を中止した。

トルストイがグリニョフカを引揚げると直ぐに、食堂へ警官が來て百姓に立入ることを禁じた。此の禁止を確實に履行させるために、警官は食堂内の食卓を破壞して了つた。そして飢えてゐる人達に對しては、トルストイが書いてゐる通り、不平を云はずに服從することだけを要求した外には、取りあげたパンの代品すら與へなかつた。トルストイは斯う云つてゐる。「こんな手段に出ることを必要と認めて、事實どんなことが行はれてゐるかを詳細に調べもせずに、飢民や病人や老人や子供達の口から、惠まれたパンを取上げる人達の心意は、我々の到底理解出來ない事である。」

これはトルストイが一八九八年の飢饉に就いて書いた『飢饉か飢饉でないか』と云ふ論文中に載つてゐる。此の論文中にトルストイは官吏が民衆に與へる害毒を悉く摘發して、官吏は民衆のために働くと稱して實は民衆から剝奪し、民衆を痲痺せしむるものであると述べてゐる。民衆が不幸な



境遇に泣いてゐる最大の原因は、トルストイの見るところによると、「爲政者が民衆の人間的資格を認めず、農民を普通の人間と見做さず、或下等な無智な存在として、外部から絶えず保護し監督してやる必要があるとの考へから、民衆のために考慮するやうに見せかけて、實は其の自由を極度に壓迫し、其の人格を全然無視する」からである。

農民は官吏の保護から完全に解放されるだけ、それだけ幸福であり、またそれだけ不幸も貧困もなくなるのである。トルストイは斯う書いて居る。

「私がさう考へるのには次のやうな理由がある。第一、私から見ると、官吏よりも農民の方が、人間に必要な理性や智識に於て遙かに富んでゐる。故に農民に取つて何が最も必要であるか、と云ふ問題に就いても農民自身の方がより早くより良く考へてゐる。第二、幸福とは何ぞや、と云ふ問題に就いても農民は、俸給のことのみ氣にしてゐる官吏よりも遙かによく承知してゐる。第三、實際生活が證明してゐる通り、中央地方に見る如く農民が官吏の厄介になることが多ければ多いだけ其の生活は困難である。之に反してシベリヤ、サマラ、オレンブルグ、ウィヤツカ、ヲログダ、オロネツなどの諸縣のやうに、官吏を遠く離れてゐる農民程、例外なしに富んでゐる。」

## 二九　國家と愛國心

一八九四年から一九〇〇年に至るまでトルストイは、國家的權力が國民に及ぼす惡影響に關して幾篇かの著明な論文を書いた。例へば『基督教と愛國主義』（露佛同盟に就いて）、『恥辱』（農民笞刑について）、『自由主義者に與ふる書』（アレキサンドル三世時代のロシヤ政府の犯罪について）、『末世論』（戰爭の悲慘と無智とを人々が明瞭に理解する時期の到來について）、『二つの戰爭』（西班牙・亞米利加戰爭及びヅホボル教徒について）、『カルタゴは破壞されなければならぬ』（兵役と基督教との矛盾について）、『曹長に贈る書』（同前）、『ヘーグ平和會議に就いて』、『殺す勿れ』、『愛國心と政府』などである。

此等の論文に於てトルストイは、國民を瞞著せんとする政府の詭計を暴露し、爲政者の命令によつて自分の兄弟たる自他の國民を脅迫したり殺害したりすることを止めさせようとしてゐる。例へば『カルタゴは破壞されなければならない』と云ふ論文に於て彼は斯う人々に呼びかけて居る。「兄弟よ、堅く自ら信じて、世の惡人を排除せよ。彼等は惡魔の如く、善と眞理とに反する愛國心を幼



少時代から諸君に感染させようとしてゐる。愛國心なるものは、諸君と諸君の財產を奪ひ、諸君の自由と諸君の人間的資格を奪ひ去らんがためにこそ必要なれ、それ以外には斷じて役に立つものではない。また諸君は神の名、基督教の名を以て戰爭を宣傳してゐる老獪な僞瞞者に耳を貸してはならない。彼等の基督教は彼等によつて曲解された僞の基督教で、慘忍な復讐的な教義である。更に科學と文化の美名に隱れて、何處までも現存制度を繼續しようとする此等の新らしい似而非學者に注意を怠つてはならない。彼等は會合に集り、書籍を著はし、講演を行つて、人々に幸福な平和な生活を漫然と約束するだけである。決して彼等に信賴してはならぬ。諸君の信用すべきものは唯一つ、卽ち諸君自身の心だけである。心は諸君に向つて、諸君は動物ではない、奴隸ではない、立派な自由の人間であることを敎へる。と同時に、諸君は自分の行爲に對して責任がある。從つて諸君は自分の意旨によると、命令者の意旨によるとに論なく、殺人者たることは出來ない、と云ふことを心は力强く敎へる。玆に諸君に殘された唯一の途は、諸君が過去に於て爲して來たこと、また現在爲しつつあることが如何に怖るべきことであり、また如何に無智なことであるかを看破することである。既に之を看破したならば、諸君を滅亡の淵に導く惡業を斷乎として排除しなければならな

い。諸君が自ら憎んでゐる惡を放棄すれば、現在支配者の位地にある僞瞞者も梟が晝の光明を避くるが如く、諸君の手を煩はさずして自然に消え失せる。さうして其處に新らしい、人間味のある、同胞的な社會が自然に現出する。此の社會こそ苦難に疲れ、僞瞞に惱まされ、許すべからざる矛盾の中に蹠き拔いた基督教的人類の渴望してゐるものである。」

どの國の政府もその國民のうちに愛國心を鼓吹する。即ち特に自國民のみに限定された愛、語を換へて言へば自國民をして他の凡ての國民の上に權力を握らせようと云ふ野心を奬勵する。併し此の愛國心なるものは頗る偏頗な、そして有害なものである。偏頗であると云ふのは、基督教から見れば凡ての人、凡ての國民は悉くこれ兄弟である。故に甲が乙に對して優つてゐるとか劣つてゐるとか云ふことはあるべき筈がないからである。また有害といふのは、各國民が他國民の上に立ち、强くなり、榮譽を得、富を作らうとするところから、戰爭が起るからである。どの政府でも皆爲にするところがあつて、民間に愛國心を奬勵するのである。即ち結局は國民を他國民に向はしむべく間接に使嗾するのである。國民と國民との間の敵愾心なるものは政府あるがために起るもので、政府がなければ各國民共平和に生活して何の騷ぎも生じない筈である。戰爭は政府と資本家が他國



民を掠奪することによつて自己の富を增大せんがためにのみ必要なのである。

トルストイは民衆の前に彼等の眼を昏ましさうとする政府の欺瞞を撥いて、神の法即ち凡ての人に對する差別のない愛の法を破るところの政府の要求を遂行することを止めさしてゐる。

『愛國心と政府』の中にトルストイは斯う書いてゐる。「人々は自分一人の肉體的及び精神的幸福のためにも、またその兄弟姉妹の同じ幸福のためにも、各自のなしつゝある行動に就いて深く考慮するところがなくてはならない。」

「諸君の敵はボア人でも英國人でも、フランス人でもドイツ人でもチェックでも、フィンランド人でもロシヤ人でもない。諸君自身である。諸君の敵は、諸君を虐げ、諸君に不幸を作る政府を、愛國心によつて支持してゐる諸君自身である。」

「ことの起りは諸君を危險より防禦することであつた。然るにこの僞りの防禦は主客を顚倒して、今日では諸君全部が悉く兵卒となり奴隷となつて、一切が破產され又現に破產されつゝあるといふ程までに達した。丁度一杯に引きしぼつた絃のやうな狀態で、何時切れるかも知れない、また實際切れるものと豫期しなければならない。さうして絃の切れた時は諸君と諸君の子供達の恐ろしい絞

殺が始まるのである。」

「人は決して或一國一政府の子ではなく、神の子である。故に他人の奴隷でもなければ敵でもない、と云ふことを凡ての人が一日も早く理解して欲しい。その曉には無智な、何の役にも立たない、昔から政府と名づけられてゐる××機關は自然に消滅する。と同時に政府が持ち來たした苦惱、屈辱、暴虐、犯罪も亦自然消滅するのである。」

トルストイの說敎は徒爾ではなかつた。政府が嚴罰を以て臨んだにも拘らず、兵役を神の法と良心の法とに背戾するものとして、之を拒否する者が漸次增加して行つた。

## 三〇 『復活』

一八九九年に傑作『復活』が出版された。此の小說には、若い地主が彼の伯母の家に働いてゐた女中を如何に誘惑したかと云ふこと、そして其の後この靑年貴族の良心が如何に眼醒めたかといふことが深刻に物語られてゐる。卽ち一個の人間が深く其の犯した罪を悔い、自分故に墮落のどん底に沈んで居た娼婦を救ひ出して、彼女と結婚することを決心したといふ、人間精神の更生の歷史



である。それと同時にトルストイは此の小說に於て、當時のロシヤ社會の主なる缺陷を攻擊した。例へば農民から土地を沒收したこと、貧者の間に於ける富者の馬鹿々々しい豪奢、兵役、信仰に對する迫害、現存社會制度、殊に裁判の不公平などである。

トルストイは『クロイツェル・ソナタ』を書いてから、宗敎道德問題に沒頭して、『主人と下男』の外は久しく小說の筆を絕つてゐたので、彼の手から再び『復活』の如き大作が出ようとは何人も豫期してゐなかつたのである。それだけにこの作が一旦公けにされるや、國の內外に非常な反響を喚起したが、同時にこの一篇によつて、トルストイの創作力が從來に比して少しも衰へないばかりか、老來益〻圓熟し充實して來たことを實證した。

七十翁のトルストイは『復活』に於いて、自ら經驗した嵐の如き自己の生活、境遇、過去の過失、自己の信仰、道德、神聖なる憤怒、悲痛等、自己の廣い經驗を靜かに觀察して、高所より批判すると同時に、廣く現存の社會、政治、經濟、法律、裁判、監獄、敎育、宗敎、革命、土地等に關する各種の問題に接觸して、峻嚴なる批評と深刻なる解剖とを加へてゐる。是等は勿論ロシヤを舞臺としてはゐるが、世界各國に共通した問題であるから、その點から云つても、この一篇こそは正に現

代文明の一大批評であり、現代社會の虚僞と僞善とに對する一大戰鬪であり、人間生活の罪惡に對する恐るべき死の宣告である。而して小說の大半が罪人の歷史であるから、社會のどん底に潛んでゐる恐るべき罪惡の種々相を赤裸々に摘抉して、その原因を不完全なる社會組織と不合理なる裁判制度とに歸し、權力者にのみ必要なる法律、富豪にのみ有利なる經濟組織、生命なき宗敎、藻脫けの殼同樣の道德觀が如何に健全なる人の子を蠹毒しつゝあるかを明確に暴露してゐる。而もそれが一國一社會に限らず、萬人に一樣に訴ふるところがあり、何處に於いても同じ効果を齎らすべき普遍性と永遠性とを持つてゐる。その中でも特に本篇の基調とも云ふべき最も主要なる問題、「人は人を裁き且つ罰する權利を持つてゐるか？　裁判所及び監獄制度を保留することは合理的であるか？」—來るべき世紀が解決しなければならないこの恐ろしい問題が、力强く讀者に印象される。で、少くとも吾々は今日の監獄制度乃至刑罰制度に對して深刻な疑問を抱かずには、この作を讀むことが出來ない。「この書は世紀の良心の重荷となるであらう。」と言つたフランスの批評家の言葉は誠に適切である。

『復活』は極めて複雜な性格を藝術的に解剖したもので、作者はこの場合、單に道德家乃至禁慾



主義者としてばかりでなく、偉大なる諷刺家として立つてゐる。作の大半が諷刺的で、所々パンフレットの形さへ呈してゐる。而もトルストイの道德的敎義はこの作に於いて益々廣汎に、益々彈力性を增し、益々人道的になつてゐる。主人公ネフリュードフの進んでゐる道が必ずしも吾々の道ではないが、彼には吾々の共鳴するところが多い。彼の精神的苦惱乃至探求が如何にも人間的で、魅惑的ですらあるが爲、吾々は彼の見解や判斷の凡てを受け入れないまでも、彼を以て道德を創成する使命を帶びた眞の人類の友であると認めるに躊躇しない。トルストイは自分の複雜な本性の最も好い方面を彼に附與し、自己の思想が擴大し深化しつゝ、時代救濟力の一つとなつた時期に於て、その宣傳を彼に一任してゐる。

トルストイがその作品の中で自分の思想感情を、少くともその一面を代表せしめようとする人物に、好んでネフリュードフの名を用ゐてゐることは、誰にも知られてゐる事實である。吾々は既に、初期の作品『地主の朝』及び『靑年時代』に於いて、ドミートリイ・ネフリュードフなる人物を見る。これは既に作者自身の主觀的自叙傳的人物の一人であつて、トルストイの精神生活の或一時期を代表してゐる。今またトルストイはその活動の晩年に『復活』といふ偉大なる藝術的經驗を統整する

にあたつて、再びドミートリイ・ネフリュードフの名前を思ひ出して、これを新らしい主人公の名にし、一八九〇年代に於ける自己の思想傾向を代表させてゐる。

彼は既にその幸福なる青年時代に、大學の卒業論文に『土地私有論』を書いて、それを實證するために父から相續した土地を百姓に分配した時も、亦無邪氣な男としてカチューシヤを愛し、その愛が彼にとつても彼女にとつても墮落からの唯一の救ひであつた時代にも、彼は依然として今日と同じく高尚な精神の持主であつた。この高尚な純潔な精神が「利己主義の發作」とトルストイが名づけた衝動によつて壓倒されたのはほんの一時的であつた。で、ネフリュードフがこの動物的自我の支配を脱する爲には、單に彼を目覺まさしめる最初の強い印象だけで十分であつた。

この精神的自我の動物的自我に對する勝利、換言すれば彼の更生—即ち「復活」が、目覺めたる良心の影響の下に、如何に迅速に力強く行はれたかは驚くばかりである。その轉機を詳密に描いてゐるのが第一篇の二十八章である。同時にこれ迄ネフリュードフの過して來た生活は、彼にとつて忽ち嫌惡すべきものとなり、青年時代の魅惑的な追憶がその心に蘇つて來た。彼は生に滿ちた爽かさ、若々しさに包まれた。そして痛々しい程悲しくなつた。そこでトルストイは以前の純潔なアイデア



リスティックなネフリュードフと今の墮落したネフリュードフとを比較してゐる。

舊生活とのコントラストの強い意識は、マースロワに對する有罪の判決後、良心の强い叫びと相俟つて、ネフリュードフに道德的更生への途を示した。それは彼の精神的能力が一丸となつて働いたものではあつたが、特に吾々の注意を惹くのは、ネフリュードフが慈悲と同情との感情を殆んど最高の德義と見るに至つたことである。これまでとても幾度か彼はこの感情を體驗した。また、體驗しない時には、その缺如してゐることを悲しんで、努めて之を喚起しようとした。そしてこの精神の働きこそは最高の道德的根源であつて、人間の精神世界に於いても、人と人との關係に於いても正に最高位を占むべきものと見て居つた。想ふにそれは又、トルストイ自身の道德的教義の發達に於いても新らしい一歩であつて、この「一歩」こそは、彼の教義と時代の先驅的思想や運動とを結合したものであつた。この「一歩」以前のトルストイの道德は狹隘で、冷酷で、禁慾的な、謂はゞ「無慈悲な」ものであつた。それは人類愛を宣傳はしたが、あまりに要求高く峻嚴であつた爲、本當に人間に對する慈悲と憐憫の情に徹してゐなかつた。が、今やこの新らしい時期は展開して、彼の道德は貧しき弱き罪深き迷へる人間に對する生きた同情に貫かれ、最早『闇の力』の悽慘や、『イワン・

イリイチ』の陰慘な死の苦痛や、『クロイツェル・ソナタ』の恐るべき幻想を以て人々を責めるやうなことはしなかつた。この見地から考へて見ると、『復活』は『イワン・イリイチの死』、殊に『クロイツェル・ソナタ』に對する反駁の如き觀がある。

『復活』には主人公の外、あらゆる階級の典型的な人物が無數に取扱はれてゐる。身分低き獄吏から政治界の巨頭、各種官吏のタイプ、裁判官、軍人、宗教家、貴族の代表者を、そのあらゆる微細に亙つて、くつきりと浮彫のやうに鮮かに描き分けた手腕は驚歎の外ない。そこには『クロイツェル・ソナタ』に見るやうな、精一杯に描かれた同じ强さの肖像畫があり、自然主義的精彩に充ちた野獸性の描寫がある。性格の理解、心理の解剖は、例によつて靈活を極めてゐると共に、一方作者の觀照は益々透明になり、健全になり、峻嚴になり、赤裸々な人間の肉を描寫して、驚くべき寫實主義の極致を示してゐる。而もそれ等の人物は、宗務大臣トボロフの名を以て描かれてゐる當時政界の大立物であつた獨裁政治の擁護者ポベドノスツェフを初め、何れも皆現實社會から取つた人人であるから、それ等の人々を通して、我々の前には帝政ロシヤの全姿態が、社會組織の缺陷に對する作者の勁烈な批評と共に、戰慄すべき形を取つて展開される。恐らく數千卷の書を繙くよりも、



舊ロシヤの姿は『復活』一篇に盡きてゐると云つても誣言でないと信ずる。

それからカチューシヤを中心としての囚人の生活、シモンソン初め幾多の男女革命家の世界は、本篇の重要な部分を占めてゐるだけに、特に驚歎すべき精彩な描寫に充ちてゐる。それは何といふ豐富なタイプ、何といふ公平な觀察、何といふ博大な理解であらう。トルストイは元來囚人や革命家には親しみと同情とを持ち得なかつた。寧ろ革命家を忌み嫌つてさへゐた。然し一旦彼等の世界に近づいて、彼等がかうならなければならなかつた原因に想到して行くと、今更のやうに彼等の境遇に同情せずにはゐられなかつた。そこに平靜なる理智と共に、人間の內性に對する深い同感、慈悲と憐憫の情が働いてゐる。監獄內に於ける女囚徒の荒みきつた生活と哀み合ひとは恐ろしいほどであるが、トルストイは彼等各々の心に、「屈辱の下に隱れてゐる苦惱を見、厚顏の假面の下なる涙に曇る顏を見た」。マースロワの惡に染んだ心にだん〳〵と溶け入つて、遂に犧牲の焰となつて彼女を輝かした純潔な愛の微光は、眞晝の太陽の光線のやうに周圍の者を溫めずには措かなかつた。此處には殘忍な獄吏に對しても、刑の執行者に對してすらも殘酷な氣分がない。自然のやうに廣い溫かい同情を以て、あらゆる物に接してゐる。トルストイの藝術の底を流るゝ溫かい生命の力は、

特にこの篇に於いて叙述の集中と對話の緊張味と共に、惻々として我々に迫つて來る。自分の獄吏生活にも娘のピアノにも飽いてゐる一典獄の上にも、職務と良心の矛盾の惱みを僅かに酒に紛らしてゐるシベリヤの一總督の上にも、監獄の精細を極めた描寫の上にも、ロマン・ローランが言つてゐるやうに、この作の凡てのページを通して「トルストイの輝ける灰青色の鋭い眼、人の心を直ちに見ぬき、あらゆる人の心に神を見る眼を認めることが出來る。」トルストイは『復活』を書くに當つて、幾度か監獄の視察を願つたけれど許されなかつたので、そのうちに監獄關係の官吏と知り合ひになり、彼を時々自宅に呼んでは食事を共にしながら、約一年間に亙つて精しい監獄の内部に關する話を聞いたと傳へられてゐるが、凡そ監獄を描いてこれ程眞に迫つた作品は他に類がなからう。

『復活』の中にトルストイは、裁判及び監獄、懲役等の刑罰は何等人を矯正する力を持たないばかりでなく、却つて人を墮落せしめるものであると云ふ思想を最も力強く表明した。監獄や懲役から出た人で以前よりも善くなつて歸る者は殆んどなく、多くは一層惡くなつて來る。犯罪者を取扱ふには徒らに之を虐待したり監禁したりするよりは、政府自ら範を示して基督敎的に彼等を赦免する



のが良策である。惡に報ゆるに惡を以てしては、遂に惡を根絶せしめることは出來ない。ロシヤの社會的及び政治的組織のどん底にまで泌み込んでゐる惡と不正とを見て、トルストイは斯う云つてゐる。「ロシヤでは正直な人間に最も適した唯一の場所は牢獄である。」

『復活』——それは人間苦惱の凄慘な描寫である。然しその中にも心を惹くやうな若々しい詩的な描寫が無いではない。本篇の初めに出て來る春の自然の鬱勃たる發育力を描いた一節、昇天祭の日の野遊びに若い男女がライラックの叢の蔭で、無心の接吻を交はすあたり、初戀の思ひ出など、それは燃ゆるやうな青春の美と力とに溢れた美はしい詩の一つである。殊に若きネフリュードフが、處女カチューシヤを强要する夜の描寫などには、七十翁の筆に成つたとは思へぬみづ〳〵しさがある。單に藝術品として見ても、正に爛熟の限りに達したものであつて、トルストイ作中の最高位に在ることは素より言ふを待たない。

## 三一　破門とトルストイの辯明

ロシヤ本國で出版された『復活』には大削除が行はれ、當時ロシヤに現存した制度の惡と不正と

を攻撃した部分は悉く檢閲局から禁止された。然しこの作は外國版で完全に出版された。監獄内の會堂に於ける禮拜式を描いた二章(舊ロシヤ版には全然削除されてある)も入つてゐる。トルストイはこの禮拜式を描くに當つて、正教の欺瞞や迷信を離れて、全く自由な立場に自分を置いて、正教の禮拜式が如何に基督教を曲解してゐるかを示した。これだけでもトルストイを冒瀆者として罰するには充分であつた。そこで所謂「神聖宗務院」では彼を懲戒することに決定したのである。

最初、一九〇〇年には、トルストイも既に高齡に達してゐることでもあるから、或は其の終焉も間近いかも知れないといふ豫想の下に、宗務院は單に各地の教會本部に宛て、トルストイが死歿しても彼の法事や追善供養を營んではならないといふ命令を發したに過ぎなかつた。其の後一年を越えて一九〇一年の二月、「ロシヤのギリシヤ正教會信徒に與ふる教書と共に、トルストイに關する神聖宗務院の決議」が公布された。それは次の通りである。

「神の恩寵によりて、全ロシヤ神聖宗務院は玆にギリシヤ正教會信徒のため神を讃美讃揚す。

兄弟よ、汝等に求む、汝等が學びたる教に背きて、紛爭と誘惑とを爲す者に注意して、之を避けよ。(羅馬書十六章十七節)



基督の教會はその始めから多くの異端者や僞教師等の非難攻撃を絶えず受けて來た。彼等は教會を其の根底から覆へして、活ける神の子基督を信ずる信仰の上に築かれた教會の基礎を動搖させようとしたのである。けれども神の約束された通り、地獄の凡ゆる力も神聖なる教會に打勝つことは出來なかつた。教會は決して永久に何ものにも倒さるゝものではない。然るに今日神の御旨により、新たに僞教師が現はれた。それは伯爵レフ・トルストイである。トルストイは世界に有名な作家で、ロシヤに生れ、正教の洗禮と教育とを受けた者であるが、其の傲慢な智力に誘惑されて、大膽にも神に反抗し、基督に反抗し、神に屬する一切の神聖なるものに反抗し、公然衆人の前に於て、彼を育て彼を教養した母たる正教會を拒否した。そして自己の文學的活動と、神より與へられたる才能とを、基督と其の教會に反する教義を民間に普及する爲に費し、人々の智慧と心の中から祖國の宗教たる正教を根絶するために費してゐる。併し正教は世界を安定させる宗教で、吾人の祖先も之によつて生活し且つ幸福を得、我がロシヤも之に據つて今日あるを得たのである。然るにトルストイと其の門弟は全世界に、殊に我が祖國内に多くの出版物を散布し、熱狂家の熱を以て正教會の教條を覆へし、基督教的信仰の本質を蹂躙するやうな教義を傳へてゐる。即ち生ける神の人格とし

ての三位一體を否定し、世界の創造者であり攝理者である神を排斥し、主イエス・クリストの神人であること、我等人類のため及び我等の救贖のために苦難を受けて死より復活した贖罪主であり、救世主であることを否定し、聖母マリヤが種子なくして基督を孕んだこと、基督を產む前も產んだ後も童貞を守つたことを否定し、死後の生命と死後の應報とを認めず、教會の機密禮と其の機密禮に於ける聖靈の天惠的働きを排斥し、正教徒の信仰の神聖なる對象を罵倒し、機密禮中最も重要な聖體と聖血を輕侮してゐる。以上のやうな所信をトルストイは絕えず、或は言葉を以て或は印刷物を以て宣傳して、全正教社會を誘惑又は戰慄せしめ、自分自らは公然衆人の前に於て意識的に計畫的に正教會との一切の關係を絕つに至つた。之に對して教會は彼をして前非を悔悟せしむべく凡ゆる手段を講じたが、全く徒勞に歸した。それ故に教會は彼が改悛せず、教會との關係を復舊する意志がない以上、教會は彼を會員と認めない。また認むることも出來ない。玆に我々は正教徒の確立の爲、迷へる者の得心のため、殊にトルストイ自身の改悛のため、全教會の前にこれを證明する。

我々は以上トルストイが教會より離反した顚末を報ずると同時に、神が彼に『改悔の念を與へて、眞實を識らしめ給はん』(提摩太後書二章二十五節)ことを祈る。願はくは慈憐深き神よ、罪人が其



のまゝ死するを許さず、彼を再び爾の神聖なる教會に歸らしめ給はんことを。アーメン。」

(宗務院委員七名署名)

此の教書を公布した目的は、之によつてトルストイを無神論者とし、之によつて民衆中の單純な思慮の淺い者をして彼に反對させようとしたのである。宗務院が一番恐れた點は、トルストイの著書が益々民間に行き渡る傾向のあつたこと、行渡るに伴れて正教會の虛僞を知る者が益々增加するといふことであつた。故に宗務院は之を防がうとして周章てて教書を發したのである。

宗務院の教書が發せられた後、トルストイの手許には、各地から此の問題について手紙が山程積まれた。大多數の者、殊に質朴な勞働者は同情を寄せて來た。例へばブリャンスキイ・マリツェフスキイ工場の勞働者は、綠色硝子の綺麗な置物の上に次のやうな文句を彫り附けて、彼に送つた。

「深く敬愛するレフ・ニコラーエヴィチよ、貴下は當代の先頭に立つ多數のロシヤ人と運命を分たれた。それ等の人達は以前火刑に處せられ、牢獄に投ぜられ、流刑に處せられた。そして今は又貴下も破門を宣告された。併し似而非學者、似而非僧侶の爲す所を介意するには及ばない。貴下は我我のためには依然として懷しい貴い慕はしい師である。」

また中にはトルストイを罵倒した手紙もあつた。「汝も遂に破門された。死後は必ず永久の苦難を受けて、犬と同じ往生を遂げるのだ。老ひぼれ惡魔よ、呪はれて居れ！」

トルストイは最初のうちは宗務院の決議に對しては全然沈默して居る積りであつたが、其の後此の問題について同情やら誹謗やらの手紙が餘り澤山來たので、遂に意を決して宗務院の決議に對し、また諸方からの手紙に對して辯明を書くことにした。宗務院の決議に對しては其の決議の正當な點と不當な點とを一々明瞭に指摘した。

「私が正教會と自稱する教會から破門されたのは當然である。が、私が教會から破門されたのは神に反抗したからではなく、反對に全精神を擧げて神に奉仕しようとした爲である……教會の教條は……憎むべき有害な欺瞞である……最も愚かな迷信と魔法との寄せ集めで、基督の教義の眞意義を隱してゐる、と私はつくづく悟つた。」

「私が教會と緣を絕つたのは事實だ。私は教會の儀式は疾うから守らない。近しい人達に宛てた遺言の中に、私が死んでも教會の教役者を近づけて呉れるな、私の屍體は祈禱も何もなしに、丁度邪魔になる不用品を片附けて了ふやうに、一刻も早く片附けて呉れと書いて置いた。」



「私が不可解な三位一體や、現代に何の意味もない原人陷罪の寓話や、處女から生れて人類の罪を贖ふと云ふ神に就いての冒瀆的物語を否定したと云ふのは事實である。併し精神の神、愛の神、唯一の神、萬物の根原である神は決して否定しない。寧ろ此の神の外には實在するものは何もないと認めてゐる。此の神の意旨を遂行することに人生の全意義が含まれてゐる。さうして神の意旨は眞の基督の教義に述べられてゐる……」

「私が教會の機密禮を認めないと云ふことも實際である。教會の機密禮は神の觀念及基督の教義其のものに相當しない低級な野蠻な魔法であり、聖書の教義を破壞するものである。嬰兒の洗禮は、意識的に基督教を受入れてゐる大人の洗禮の有する意義を甚しく曲解したものである。」

「以前故意に結婚した者に對して結婚機密禮を行ふこと、離婚を許すこと、離婚された者の結婚を認容することなどは、何れも明らかに聖書の意味及び言葉に違反するものと謂はねばならない。」

「教會の懺悔式に於て週期的に罪過が赦免されると云ふことは、實に有害な欺瞞であると謂はねばならない。これは唯不道德を奬勵し、罪惡を懼るゝ念をなくさしむる外何の役にも立たない。」

「人の臨終に際して教會が行ふ膏油塗傅式は、其の他の場合の膏油塗傅式と同樣野蠻極まる魔法

で、聖像や不朽體の尊崇、其の他祈禱書中に載つてゐる樣々な祈禱と同樣に何の意味もない。」

「聖餐式も結局肉の崇拜であつて、明らかに基督の教義に背くものである。」

「牧師職なるものは全く欺瞞への準備に外ならない。『汝等は教師、長者、導師と稱へられてはならぬ』（馬太傳二十三章八—十節）と云ふ基督の言葉を無視したものである。」

又トルストイは斯う書いてゐる。「人々が基督の人格を如何やうに解釋しようが、彼の教義は世界の惡を絶滅し、非常に簡單に容易に疑ひもなく人々に幸福を與へる。たゞ彼の教義を曲解せずに其のまゝ認容することが肝腎である。然るに此の教義の眞意義は教會では全く隱されて、洗禮、膏油塗傳、聖餐、祈禱、聖パン等の野蠻な妖術に造り變へられてゐる。故にその教義からは何にも殘らなかつた。誰か若し、教會の樣々な禮拜式、感謝禱、蠟燭、聖像などと、基督の教義とは何の關係もない、基督の教は、人々が互に愛すること、惡を以て惡に報いないこと、他人を誹謗しないこと、人を殺さないことの中にあると云ふ人があつたら、その人は必ず是等の欺瞞を有利とする人達から非常な憤怒を受ける。」

これは實際トルストイが經驗した事實である。牧師階級はトルストイが彼等の欺瞞を責めたこと



に對して恐ろしく憤り、更に此の憤懣を純朴なロシヤの勤勞民の間に煽り立てることに全力を注いだ。

## 三二　各階級への勸告・上書

一九〇一年の春トルストイは熱病で長い間苦しんだ。彼の衰弱は募る一方なので、家族の者は彼に轉地療養をさせるためにクリミヤに伴れ出した。其處で彼は一九〇二年の初め肺炎に罹り、續いてチブスを患つた。彼は自分の死期即ち新生活への轉換期が近づいたと感じたので、神に對する自分の義務であると認めて居た事を、特に眞面目に、注意深く實行しようと努めた。彼は兵卒、將校、牧師、國王、勤勞民衆など、種々樣々な職業の者に向つて幾多の勸告を書いた。その中で彼等の一時的でない、永遠の義務、神と自分の良心とに對する義務は何か、と云ふ問題について、自己の所信を披瀝した。

兵卒に對しては、「兵卒と云ふ身分は」上官の命令によつて、「自國や他國の同胞、時には武裝しない兄弟を殺害しなければならない」極めて「屈辱的な背神的な身分」であるから、宜しく斯んな

身分を放棄して了へ、さうして之がために上官が假令如何なる危害を加へようとも、恐れないやうにと說いた。

將校に對して述べた要旨は斯うである。將校の職は兵卒に殺人の最良方法を敎へ、その上官に對する盲目的絕對服從に訓練するのであるが、斯う云ふ職務は正に重大な罪惡であることを認めねばならない。之を認めたならば、速かに其の犯罪的な職を放棄すべきである。思慮あり良心を有する現代將校の「取るべき最後の、そして公明な方途は、自分に屬してゐる部隊を集めて、先づ自分が部下の兵卒に加へたところの惡行を彼等の前に謝し、然る後今後此の職を辭退することである。若し斯う云ふ公明な行動を取ることの出來ないものは、軍職を辭するのが當然である。」

敎會の牧師階級（平牧師から大僧上、法王に至るまで）に對しては、彼等が傳道してゐる敎義は純粹の基督敎ではなく、恐ろしく基督の敎義を曲解したものであり、且つ現代に何の意味も持たない。さうして傳道者自身ですら信ずることの出來ないやうな古い猶太敎を混入してゐることを指摘して斯う云つてゐる。「胸に手を置いて、汝が說くところを汝自身信じてゐるかどうかを自分自身に問へ。人前でなく、神の前に於て、死の瞬間を想ひ浮べながら此の事を自分自身に問ふて見るが



いゝ。恐らく何人と雖も、信じては居ないと答へない譯には行くまい。卿等が聖書と稱するものゝ全部が、神の特別な指示を受けて書かれたものだなどと云ふことは、卿等自身も恐らく信じては居まい。舊約のお伽噺のやうな恐ろしい話や奇蹟、地獄のこと、基督が種子なくして胚まれたこと、復活したこと、昇天したこと、死者の甦ること、神の三位のこと、斯うした卿等の信條の一條たりとも卿等は恐らく信じては居まい。」

敎會敎條の不合理の外に、牧師達の當然認めねばならないことは、敎會の背德的なことである。敎會は我々の生活の基礎となつてゐる惡と暴虐の全部、卽ち富者の無智な奢侈を、貧窮民の力不相應の勞働と等しく祝福し、其の他裁判も、死刑も、戰爭も祝福してゐる。愛を說き、一切の暴虐を禁じた基督の名を以て祝福してゐる。正敎會を始めとして各敎會の牧師等が傳へる神は、聖書の中に述べられてゐる慈悲深い父ではなく、人々を怒り、罰し、苦しめる不公平な神である。

トルストイは皇帝ニコライ二世に對して前後五回に亙り書を奉呈した。最初の二回は、一八九七年サマラ縣の警察が、牧師の要求によつて、異宗派の子供達を奪つて、正敎の修道院に幽閉した事件に就いて書いたものである。

第三回は一九〇〇年十二月カナダのヅホボル教徒の妻女が、シベリヤ流刑に處せられた夫の許に歸ることを請願した事件に就いて書いた上書である。トルストイは皇帝に向つて、宗教のために人を苦しめ、正教を離れた者を迫害することを今後絶對に廢止すること、裁判所に於て無理に宣誓を要求しないこと、良心が宣誓とか兵役義務を認めない者には、兵役を強要しないことを、皇帝に進言したのである。

第四回は一九〇一年三月に書いたもので、當時ロシヤの社會が要求して居た最も重要な改革の實行を促したものである。第一、農民の一切の權利を他の公民と同等にすること。第二、特別治安警察法の撤廢。第三、教育上の障壁を撤去して、民族と宗教の如何を問はず凡ての學校に入學を許すこと。在學兒童の使用してゐる國語を以て教授すること、希望の者に對しては各種の學校の開設及び經營を許可すること。第四、信教の自由を與へて、正教會より他の何れの宗教にも改宗し得る途を開き、また各宗派に對して其の祈禱所の開設並びに集會の自由を與へること。

最後は一九〇二年一月病床から皇帝に奉呈したものである。トルストイは、民衆が皇帝を愛してゐると思ふのは、とんでもない間違ひであることを少しも憚らず卒直に述べた。「陛下をして、獨裁



政治と其の代表者たる皇帝に對する民衆の愛情を誤解せしむるものは、モスクワ始め其の他の都市に於て陛下を奉迎する際、民衆が「ウラー」を叫びながら陛下の後からかけて行くことである。これは決して民衆の陛下に對する忠順の表示であると御考へになつてはならない。これは物好きな民衆の常習で、變つたことさへあれば何でも同じやうに走せ集るのである。また陛下に對して心服の現れとして、陛下が御認めになつた人達も、其の實往々警官によつて召集され、陛下に對する心服を表明するやう前以て用意された者に外ならない。曾て御祖父陛下がハリコフに行幸された際、ハリコフの教會は群集で立錐の餘地もなかつたが、これは皆變裝した警官であつた。」

トルストイは當時ロシヤ全土に皇帝の名を以て實行されてゐた慘虐、脅迫、壓迫、勞農民銃殺等を摘發し、法外な重稅を賦課する結果農民一般が恐ろしい窮乏狀態にあること、何の階級の人も政府に不滿であり、深い怨恨を懷いてゐることを指摘した後、更に書いてゐる。政府がロシヤ國民の進歩向上を阻止しようとして如何程努力しても、政府はそれを實行することは出來ない。政府、皇帝、その顧問官達の考によれば、ロシヤ國民には以前獨裁制が適してゐたやうに、現在に於ても否將來もこの制度が最も適當であるといふのである。これは勿論正しいとは云へない。以前ロシヤ國民

は、實際皇帝が罪惡を知らない地上の神であると信じてゐた。が、現代のロシヤ民衆は、「名君は極めて偶然な場合の外望まれない。多くの國王は、イオアン四世やパヴェル皇帝の如く、惡人であり、無智である。」と漸次考へるやうになつて來た。

近頃は「凡ての階級に於て、政府の指令ばかりでなく、皇帝自身をまで非難して憚らない。甚しきは皇帝を罵倒し嘲笑さへしてゐる。」

「獨裁制は最早時代遲れの政體で、今日に於ては我がロシヤ國民には不適當である。ロシヤの民衆も益々世界の文明に啓發せられてゐるから、專制政體とそれにつきものの正教とを持續するのには現在行はれつゝある如く、凡ゆる橫暴壓制によつて、取締りを嚴にし、行政上の流刑、死刑、宗教上の壓制、新聞書籍の禁止、教育の制限、其の他凡ゆる殘忍な方法による外途はない。」

「事實陛下の今日までの政治は遺憾ながら上述の如きものであつた。試みに一、二の例を擧れば、ロシヤ社會の各方面に異常な怨嗟の聲を喚起した事件として有名な、ツヴェル縣の代表委員に與へた回答の如きはそれである。民衆の要求は極めて正當であるに拘らず、「無意味な空想」であると陛下は斷定された(此の事件は一八九五年に發生)。其の外芬蘭に關し、支那侵略に關する陛下の命令、



軍備擴張を意味するヘーグ會議への陛下の提案、自治制への壓迫、行政上の專橫、宗教に對する迫害、酒類專賣を承認して政府をして民衆を害する毒素を發賣せしめたこと、最後に體刑に就いては、ロシヤ國民を侮辱する無益な手段であるから廢止するのが當然であると云ふ意見が各方面から提出されたにも拘らず、陛下御自身之が存續を固執されてゐること等である。」

トルストイは皇帝に對して、その爲すこと、行ふことが一切無意味であり殘忍であると斷じた後、此の儘にして放任せば滅亡は免れ得ないが、之を免れんがためには斷乎として左記事項を實行せねばならないと進言した。第一、自由への壓迫を廢止すること。第二、民衆に對して其の希望要求を表明する途を開くこと。

「自己の幸福のため何を希望してゐるかを云はしめないやうに、口を塞いで置きながら、人に善を爲すことは不可能である。陛下も國民若しくは其の大部分のものの希望と要求とを知られて、始めて之に適する政治を執り、國民に幸福を與へることが出來る。」

「一億萬のロシヤ農民の最大の希望は、土地使用の自由、卽ち土地私有制の廢止である。土地私有制度の廢止こそは我がロシヤ政府の最大眼目でなければならぬ。政府は速かに土地の共有を公布

すべきである。之が我がロシヤ民衆の心底からの望みで、ロシヤ民衆は絶えず今日まで之を其の政府に望んでゐる。土地私有制度を廢止して始めて、ロシヤ民衆に最大の自由と幸福と滿足とが與へらるゝのである。」

トルストイは以上の通り皇帝に上申したのであるが、皇帝ニコライ二世は餘りに臆病で、優柔不斷であつた爲、トルストイの進言した事を實現することが出來なかつた。トルストイは此の上書をニコライ・ミハイロウィチ大公を經て皇帝に奉呈したのであるが、皇帝はトルストイの書を通讀したといふこと、其の內容は誰にも知らさないといふこと(これが爲にトルストイが何人からも迷惑を蒙ることのないやうにとの注意から出たことである。が、トルストイ自身はさう云ふ迷惑を少しも怖れなかつた。)をトルストイに傳へるやう大公に依頼した。併しトルストイの進言したことは一つも實行しようとはされないで、其の治世の終りまで依然として民衆を暗黑と奴隷のうちに制縛すべく凡ゆる手段を講じた。その結果としてニコライ二世の終末は、トルストイの豫期して居た通りになつた。

## 三三　勞働階級と其の解放策



人類が牧者を失つた羊の如く疲れ彷徨つてゐるのを、基督が非常に同情したと聖書に書いてある。恰度之と同じやうにトルストイは、現代の人類が其の生活の意義を意識せずに生活し、其の兄弟と融和せず、却つて相互の爭鬪に精力を空費し、其の求むる生活の喜悅は之を得ず、求めざる苦難のために常に懊惱する理由を解せずに死んで行く事實に對して、非常に悲しんだのである。

トルストイは勞働民衆が力以上の勞苦を忍び、凡ゆる種類の缺乏に堪え、權力階級や有產階級から絕えず屈辱を受けてゐることに對して、特に深い同情を寄せて居た。勞働者の窮乏に對して社會主義者は罪を資本家と政府とに歸してゐるが、トルストイは先づ第一に勞働階級自身に罪があると指摘してゐる。

トルストイは其の論文『唯一の手段』の中に斯う述べてゐる。「勞働者が苦しめられ、壓迫せられ、酷使されるのは、勞働者自身が僅かな利益のために、其の生涯と同胞とを犧牲にして了ふからである。」勞働者には土地がない、然るに一方には自分では耕作しないことを承知しながら何萬デシャチーナと云ふ廣大な土地を抱へ込んでゐる者がある。それは勞働者自身が僅少な利益に惑はされて、地主の許に勞働を求めに行き、或は番人、或は駕者、或は作男となるから惡いのである。

「政府は勞働者から稅を取り立てて、之を軍備や、監獄や、民衆のために何の役にも立たない官吏の俸給に使用する。これは勞働者が僅かの給料に釣られて、自ら進んで村長となり、世話人となり、收稅吏となり、巡査となり、稅關吏となり、國境番人となるからである。」

「勞働者は工場主が賃銀を減らし、勞働時間を增すと云つて、不平を訴へる。が、之にしても勞働者自身が互に仲間の給料を減らし合ふからである。そればかりではなく、勞働者は爭つて監督や、監視人や、職工長に雇つて貰ひ、そして工場主のために仲間の失策を探し、罰金を課し、壓迫をしたりするからである。」

「また勞働者は土地を所有しようとしたり、稅を納めなかつたり、同盟罷工を企てたりすると、直ぐに軍隊を向けられると云つて、苦情を云ふ。けれども軍隊は兵卒であり、兵卒は勞働者自身ではないか。つまり勞働者が或は利益のために、或は臆病のために、進んで兵役に服して、上官の命令に從つて同胞を殺すと云ふ、自己の良心に反し神の誡に反する宣誓をするからではないか。」

「斯くの如く勞働者の窮狀は勞働者自ら之を招くのである。故に勞働者が資本家と政府とに奉仕するのを停止すれば、その窮狀は自然無くなるのである。」



「勞働者は自ら身を清潔にして、政府と資本家をして自分達の生命を喰物にさせないやうにしなければならない。不淨は不潔な身體にのみ着き、不潔の除かれるまでは之に附着して不潔を好んで棲息する。故に勞働者が其の窮狀から脫出する途は唯一つ、卽ち自己を清潔にすることで、之を外にして救濟の途はない。」

「併し一口に勞働者と云ふても、其の中には文化的勞働者と愚直な教育のない勞働者とある。何れにしても現存制度に對しては不滿を抱いてゐる。文化的勞働者は神を信ぜず、神の敎も信じない。が、マルクスやラサールを知つて居り、ベーベルとかジョレスの議會に於ける行動に注意し、土地や勞働用具の領有、遺產相續、其の他不公平な制度に就いて雄辯を揮つてゐる。又一方學問のない勞働者達は、理論は解しないが、三位一體を信じ、贖罪主を信じてゐる。でも矢張り地主や資本家に對して不滿を抱き、現存社會制度の不合理を認めてゐる。併し一旦是等の勞働者に（學問の有無に拘らず）、資本家の許で高い給料を得る職を與へ、若しくは土地を購入させて、自分で自由に雇傭勞働を經營させて見るがいゝ。恐らく千人中の九百九十九人までは必ず資本家や地主より以上に、自己の土地所有權や雇主の權利を擁護するであらう……」

「勞働者は自分達の立場から、地主、資本家、壓制者の貪慾と殘忍とを非難してゐる。併し勞働者も亦全部、少くとも大部分は神と其の敎（自分の欲しないことは他人にも之を爲すな）を信じない以上、資本家と同類だと云へる。唯小さな成功し切らない地主であり、資本家であり、壓制者である。」

「勞働者は自ら働いてゐるから、働かない政府や富者程に、貧者や弱者の力を利用しないと云ふならば、それは彼等がその事を惡いと認めたからではなく、政府や富者のやうにそれを爲すことが出來ないからである。」

以上の如くしてトルストイは、勞働者が政府や資本家に對して無益な怨恨を抱いたり、鬪爭に精力を消費したりするよりは、寧ろ政府や資本家に奉仕することに、自分達の窮狀の素因が胚胎してゐることを悟らねばならぬと說いたのである。トルストイは皇帝、政府、資本家に對して其の眞實を語ることを怖れなかつた如く、勞働民衆に對しても一切の眞實を憚らず卒直に表明した。凡ゆる黨派の民主主義者は勞働者に對して、大抵彼等の虐げられた境遇のみを語るばかりで、勞働者の窮狀の原因が勞働者自身にあることを一言も說かない。此の結果として勞働者はデモクラット及び革



命家の煽動によつて、自分達の奴隷狀態や貧窮や其の他自分達の經驗してゐる一切の不幸の原因を悉く政府と資本家とに歸するやうになつた。そしてトルストイが說いたやうに、彼等自身も資本家や壓制家と全く同樣で、唯其の小なるものであることを知らない。故に資本家や政府を怨む前に先づ自ら改心して、凡ての人に對して（先づ第一に自分達の仲間に對して）博愛主義を以て接しなければならない。斯うして始めて奴隷の如き慘めな狀態も一切の屈辱も消滅するのである。斯う云ふ道理を勞働者に說いた者はトルストイの外に誰もない。如何なる階級の人たるを問はず、自分の缺點や弱點や失策を知つて之を改めることは、何よりも先づ自分自身の幸福のために緊要である。眞の友は常に其の友人の缺點を指摘してその救濟に努める。トルストイは勞働民衆の斯の如き眞の友として、勞働階級解放の確實な方策を說いた。此の方策は勿論道德的努力を要するが、その代り自分自身で自由に出來ることである。

故に若し自分と同胞との境遇を改善したいと望む者は、トルストイの說によれば「第一、出來得ることなら資本家につかへる事を避けなければならぬ。第二、設定された賃銀よりも低廉な賃銀では勞働を請負はないこと。第三、自ら資本家側に移り、若しくは彼等に奉仕することによつて、自

分達の境遇改善をはからないこと。第四、最も重要なことは、政府の暴力的機關—警察事務や稅關事務や兵役などに一切關係することを避けねばならない。」

トルストイは『眞の自由』若しくは『勞働民衆は如何にして解放せらるべきや』と云ふ論文に於て、若し勞働民衆が自分一個のための利益をのみ考慮しないで、同胞に不利益を來すやうな行爲を避けるやうにしたならば、勞働者の生活が何う變化するか、また現在彼等が苦しんで居るやうな奴隷狀態がどう改善されるか、と云ふ問題に就いて詳細に述べてゐる。

何が勞働者を奴隷狀態に支へてゐるか？「稅金、耕地の不足、兵役、教會の負擔、貧窮、工場、物價の騰貴、賃銀の低廉」等である。然し若し勞働者全部が聖書の教に則つて、自己の欲せざる所を他人にも爲さなかつたならば、必ず以上のやうなことはないであらう。

「稅金？　だが、誰がそれを納めるか？」

「若し私の金錢と勞力とが何か善事のために必要とあれば—と基督教的生活をしてゐる全ての人は云ふであらう—私は自ら之を提供しよう。併し私の金錢を私の家族から奪つて、牢獄に、刑機に、小銃に、大砲に、將軍達の俸給に使ふことは、神の命に反することであるから應じ難い。」



「間接稅に關して云ふならば、神の御旨に從つて生活する者は誰でも其の集金に携はらないであらう。何故ならば間接稅や直接稅の集金に携はることは、富者のために貧者より掠奪することを意味するものであるから。」

「耕地の不足？　だが地主の土地を見張つて、君達にそれを耕作させないのは何人か？　地主のために土地を耕作するのは何人か？　それは勞働者自身ではないか？　若し神の御旨に從つて生活する人であれば、隣人を掠奪する掠奪者を援助しないであらう。假令どんなに苦しからうとも、『神の教に背いて惡人の後援をして、自分のために土地を抱へるやうな行爲は出來ない。假令餓死することがあらうとも、神の教に反する仕事に携はることは出來ない。』と云ふに相違ない。」

「神を信ずる人は兵役とその宣誓に就いても同樣に云ふに相違ない。殺すなら殺せ、それはあなた方の御隨意だ—とそのやうな人は云ふであらう—私は遲かれ早かれ一度は死なければならないから。併し神の教に背いた事は出來ない。皇帝にだらうが、何人にだらうが宣誓は出來ない。兵役にも行かない。」

「基督教を信ずる者は、戰時勤務に就かしむるか、或は兵役に服さしめるかすれば同じ樣に、『私

に敵はない、神の意旨に背いたことは出來ない』と云ふに定まつて居る。」

「若し神の敎に從つて生活する人であれば、貧乏人から無價値同樣の値で家畜や家屋や土地を買收するやうなことは爲ないであらう。仲間の値段を壞すこともしないであらう。富者にもつかへないであらう。又貧乏のために貧しい友の生命を奪ふやうな行爲に手出しはしないであらう。」

「若し人々が全部斯う云ふ生活をするならば、富者も、地主も、官吏も、大僧上も、牧師も一切なくなるであらう。又あつたにしても彼等自ら生活の途を講ずるから、斯う云ふ人達から勞働者に與へる苦痛はなくなるに相違ない。」

「故に眞の幸福のためには、鄕等自ら先づ其の生活を改めて、神の誡に從ひ、博愛的生活を營み、他人から自分に行つて欲しいことを先づ自ら他人に行はなければならぬ。然らば欲する所の幸福が得られると共に、奴隷狀態は自然に消滅して了ふ。『眞理を知らば、眞理は爾等を自由の者となさん。』(約翰傳八章三十二節)。」

## 三四　社會主義者とトルストイ



トルストイは勞働者に以上のやうな解放の道を敎へた。要するに全ての力は勞働者自身にある。政府や資本家が彼等の上に權力を握るとしても、それは結局勞働者自身が彼等に援助して、自分を虐げさせ、掠奪させるからに外ならない。かう云ふ思想に、トルストイは勞働者を眼覺めさせようとした。故に勞働者の奴隷狀態を無くするためには政府や資本家と戰ふことも、彼等を襲擊することも、況して彼等を殺害する必要もない。唯彼等に援助しないこと、彼等の搾取壓迫に手傳はないことが肝腎である。さうすれば壓迫も奴隷狀態も自然に消失する。勞働者は勞働者の勞力によつて生活してゐる寄生虫よりも、數に於て何十倍を占めてゐるではないか。勞働者自ら彼等に助力さへしなければ、彼等は勞働者に對して何事も爲し得るものではない。

トルストイの敎義によれば、勞働者解放の手段は政府や資本家との鬪爭にあるのではなく、勞働者自ら彼等に仕へるのを止めて、自分達を壓迫させないやうにすることが第一である。これが社會主義者の見解と異る第一の點である。

第二の相違點は、社會主義者が、自然から遠く離れた都會工場の塵芥と煤煙と蒸氣との中に過される勞働者の生活を以て、自然な正當な現象だと見做して居る點にある。隨つて彼等の要求する所

は常に、工場の勞働時間の短縮と勞銀の値上げとである。しかも勞働者は現在營まれてゐるやうな非衞生的な、生命を縮めるやうな事情の下にある厭ふべき無味單調な工場勞働を絶滅しようとはしない。之に反してトルストイは、息苦しい、病毒の多い都會にでなく、田舍の野原や草原や森林の間に生活し勞働するのが全ての人に適してゐると考へた。故に工場を農村に建設して、工場勞働を健全な、變化に富んだ、愉快な農業勞働と交代させればよいと認めた。

第三の相違點は第二の相異點から自然生ずる。即ち社會主義者は勞働者に向つて、何よりも先づ全ての工場を勞働者の掌中に納めるために、奮鬪することを勸めてゐる。が、トルストイは勞働者に向つて、其の貧苦と奴隷狀態よりまぬかれんが爲には、土地を私有制度から解放することが必要であると說いた。土地が自由に解放されれば、誰も好んで非衞生的な苦しい工場勞働に就いて居る者はなく、皆健全な農業に移ることが出來る。

之に對して一部の人々は、工場勞働者が全部工場を去つて農業に就いたら土地が足りない、と云ふかも知れない。が、それは誤りである。若し土地を十分に開拓して、今日の技術の發達程度で到達し得らるる最高程度にまで至らしめるか、或は數千年前の支那が達してゐた、あの程度まで土地の



開拓が出來れば、全勞働者を養ふに決して不足はしない。トルストイは其の著『勞働民衆へ』の中に斯う書いてゐる。「此の問題に興味を有する者は、宜しくクロポトキンの著『パンの征服』、『田園と工場と職場』、それから『ボスレードニク』社出版のボボフ著『パンの園』などを讀むがいい。是等の著書は、立派に耕作さへすれば生產力は數倍に增加し得ること、又現在養ひつゝある人口の何倍を同一面積の地所で養ひ得ることを明瞭にしてゐる。」

土地は水や空氣や日光と同樣、人間各自の生存に必要缺く可からざるものである。故に假令一片の土地と雖も之を自分一人の所有と考へる權利は誰にもない。土地は之に附屬してゐる一切の富源、水、森林、其の他のものと共に全人類の共有である。

土地解放の爲の偉大なる鬪士で、特にトルストイが私淑してゐた米國思想家ヘンリイ・ジョーヂは斯う云ふてゐる。「人間とは何であるか？　人間とは先づ第一に地上の動物で土地なしには生存が出來ない。人の作り出す一切のものは皆土地より採集したもので、生產勞働とは、つまり土地の耕作と土地より得たる材料を、人間の必要と希望を滿足させるために適した形式に改造することに他ならない。人間の肉體も地から採られたもので、我々は卽ち地の子である。地より出た我々は又當然

地に歸らねばならない。人間から地に屬するものを取り去つて了へば、殘るものは肉體を有たない精神の外に何もないではないか？　故に人間生存の場所であり根源である土地を支配する者は、人間の主人となり、人間はその奴隷となる。私の生存の場所である土地を所有する人は、恰も私の肉體が彼の所有である樣に、私の生と死とを自由に左右することが出來る。」

## 三五　土地問題と其の解決案

然らば土地私有制度を廢して、民衆全體の所有たらしめんがためには如何にすべきか？　一見これは何でもない事のやうである。ただ非勞働者からその土地を回收して、之を勞働者に與へさへすればよい。が、併し「農民が村共有地を各自の間に分配したやうに、全部の土地を耕作者に平等に配當することが果して出來ることか。一農村の共有地をその村落の農民に均等に分配することでさへさう簡單には出來ない。各自の土地の境界が交錯しないやうに、また耕作上に不便を感じさせないやうに、均衡を保つと云ふことは事實非常な難事である。如何にすれば全國の土地を全勞働者に均等に分配し得るか？　面積の廣くなるに從つて、地質の相違も、一農村に於けるよりは甚しくな



る。一デシャチーナ（凡そ我一町强）につき十五留乃至二十留價格の砂地もあり、三百留乃至四百留價格の黑土もある（此の價格は一九〇八年制定のもので、後年よりもずつと低廉な時代のものである）。灌漑地で千留又はそれ以上の價格のもあり、礦物、石油、石炭などを含む土地もある。これ等は一デシャチーナが何萬留もする。又都會に於ては一サアヂェン（凡そ我が七尺平方）につき千留又はそれ以上もする。北米紐育の市街には金貨を敷詰めた方が買收するよりも安い地所がある。そればかりではない。土地は要らないと云ふ人がある。彼等は都會居住者で、或者は職人、鍛冶工、錠前匠、裁縫師、指物師であり、或者は事業經營者であり、或者は工場勞働者であり、或者は教師であり、或者は書記である。斯ふ云ふ人達には勿論耕作用の土地は要らない。併し此等の人達も亦他の者と等しく、土地から生ずる一切の物を利用したいのである。」

「だが何うしたらよいか？　何うしたら凡ての者が平等に土地から生ずる富を利用出來るか？」

「何うすれば、自ら耕作せずして土地を占有する者を出さず、一名の屈辱者もなく、又土地のために紛爭を惹起しないやうに、土地を配當することが出來るか？」

「此の問題に就いては既に久しい前からいろいろに調査研究され、解決策も講ぜられてゐた。故

に勞働者に最も正しく土地を分配する方法としては、數種の案が立てられてある。」それらの案の中でトルストイが「最も公平で、恩惠的で、實施上都合がよい」と認めたのは、米國人ヘンリー・ジョーヂの提唱に係る「單稅案」である。此の案の要綱は次の通りである。

「土地を現在の所有主から奪回することも要らなければ、又之を全ての人に分配する必要もない。」「凡て現在土地を所有する者に、其のまゝ所有させて置けばよい。菜園を作る者もあらう、果樹園を經營する者もあらう、家畜を飼養する者もあらう、穀類を播種する者もあらう。礦山を有つ者には、金なり石油なり石炭なりどしゞ〳〵採掘させるがいゝ。兎に角土地は全部現在の所有主に其のまゝ占有させ、其の代り土地所有者は一般社會のために、所有地に對し一年間の借地料を見積つて支拂ふべきである。例へばある人の所有する土地は耕地であるから、之が一年間の借地料は三留、五留、十留とする。灌漑地であれば五十留、八十留、百留となる。或は鑛物を含んだ土地又は都會の土地で一年千留の借地料としたら、此の額を毎年一般社會のために納める。又建物もなく、別段改良も施さずに一年間貸し與へて、何百留何千留の取得ある土地を有する者は、それだけの金額を社會のために納める。が、五、六留の價しかない土地を所有する者であれば、社會のために納める



額は五、六留でよい。要するに凡ての人が其の所有土地に對して、所有した一年間に得ただけを借地料として納めるのである。故に例へば甲がその所有地に對して今年十留とか十五留とかを納めたとすれば、翌年は此の地所に對して二十留とか三十留とかを納めようと云ふ者が現はれるかも知れない。其の場合若し甲が引續き之を所有しようとすれば、甲は他の者が納めようと云ふ丈の金額を納めなければならない。」

「若し以上のやうに制定すれば土地は必ず全ての人々に足りて、不足することはない。何故かと云へば、現在土地を所有しながら自身之を耕作しない者は、自ら收入もなく、隨つて地代を納めることも出來ないから、進んで其の所有地を還附するであらう。即ち自然に土地は耕作する者に與へられることになるのである。」

「以上のやうにして土地から生ずる金錢は、即ち社會全體の所得でなければならない。此の金額は非常に莫大なもので、他の一切の稅金を合したものに匹敵する。ロシヤであれば他の諸稅の二倍若しくは三倍である。モスクワだけで二千萬留は集まる。」

「以上のやうな制度が實施されると、獨り勞働者が十分に土地を與へられて、而かも稅は要らな

いと云つて喜ぶだけではなく、都會の住民も、職人も、工場主も都合がよい。第一農村に人が散れるから工場に働く者も現在のやうに過剰を來さない。從つて勞銀を互に競走して低廉ならしめるやうなことがなくなつて、勢ひ勞銀は主人でなく勞働者自身が設定するやうになる。」其の外尙食糧品もずつと低廉になる。それは商品に稅金が課せられなくなり、又茶、砂糖、燐寸、石油等の生活必需品に現在課せられてゐるやうな間接稅がなくなるからである。」

「單稅は地租ではなく、地價稅である。であるから土地全體に課せられるのではなく、價値ある土地にだけ課せられ、それも使用量によるのでなく、土地から生ずる所得によるのである。この所得と云ふのも土地に加へられた勞力に關係なく、全く土地そのものから自然に生ずるものを指すのである。故に稅は土地に加へられた改良に對しては課さない。全く土地の素質にだけ課するのである。」

「以上の如く單稅制を實施するに於ては、勞力によつて生ずる一切の價値は免稅されて、稅は全く天然自然の土地に對して、狀況により素質に應じて課するのである。」「故に土地を耕作する農民の納むる稅金の額は、同じ狀況の土地を耕作せずに所有してゐる人と全く同一である。又都會地で



豪奢な邸宅を建築した者でも、同じ土地の所有者で邸宅を建てない人以上に多く稅金を納めることはない。」

斯の如くトルストイの共鳴した米人ヘンリイ・ジョージが提唱した「單稅案」は要するに次の二つの眞理に基くものである。第一、何人も絕對に土地占有權を有しない。何となれば土地は空氣や水や日光と同樣に凡ての人に缺くべからざるものであるから、從つてまた凡ての人は土地に對して平等の權利を有するからである、第二、人は凡て自己の勞働の生產品に對して特別の權利を有し、何者と雖も此の權利を奪ふことは出來ない。故に勞働と勞働の生產品に對して課せられる一切の稅は、直接間接の如何を問はず、不當であつて、撤廢すべきものであり、土地の價格に對する單稅によつて代へらるべきものである。

ジョージもトルストイも（社會主義者が唱道したやうに）土地を分配せよとは說かなかつた。それは不可能なことであつて、はてしない鬪爭と不公平に導く外何の利益もないからである。併し土地を利用する者に土地が與へる不勞所得は之を社會全體の必要に充てること（卽ち本質に於て各人に分配すること）を勸めてゐる。此の稅法を實施すれば、土地は速に地主の手を離れて、自分の勞働

を以て耕作する者の手に移り、土地問題は最も平和に、最も公平に、最も堅實に解決され、而も此の問題は獨り農民ばかりの利益ではなく、勤勞民全體の利益である。そして土地を利用する者は、最大收穫を得るやう耕作し得る人のみとなるのである。トルストイは「單稅制」の實施を、現在の樣な暴虐を基礎とする政府の下にあつても、亦協調を基礎とする理想的共同生活に於ても可能であると認めてゐる。ただ之を實施するには漸進的でなければならない。即ち、最初の一年は稅金の一部分（全體の一割五分とか二割とか三割）を實施し、翌年又同じ位の部分を新たに課し、漸次推し進めて全體に及ぼすことにするのがよいと、トルストイは述べてゐる。

トルストイは土地私有制の撤廢されない間は國民生活の改善は出來ないと認めてゐた。が、それと同時に又、最も公平に土地を分配すると云ふ事の困難さをも能く承知してゐた。そこで彼は勞働者に對して、勞働民衆が土地を監理する時代が到來した際、思慮なき監理をしないやう、又折角新制度となつても各個人や各團體が土地のために鬪爭して、以前よりも惡い狀態を呈するやうなことのないやう、勞働者に深く誡めてゐる。土地問題の解決と云ふことは正に人類史上の一大事件である。トルストイの見る所によれば、此の重大事件はロシヤ國民の目前に振り懸つて來てゐる。ロ



シヤ國民は其の心理狀態から見ても、亦その經濟組織から考へても、實に此の偉大なる世界的事件の解決に豫定されてゐるのである。

## 三六　日露戰爭とトルストイ

一九〇四年一月二十七日、日露戰爭が始まつた。此の戰爭は勿論日露兩國の極東に對する侵略的欲求によつて起つたものである。其の當時ロシヤ皇帝自身各都市を歷訪して國軍を鼓舞し、「國敎と皇帝と祖國とのため」其の身命を捧げよと說いた。敎會の牧師達は從來自ら基督敎と稱へつゝ、實は眞の基督敎と全然異つた宗敎を國民に說いてゐたのであるが、果せる哉戰爭となるや、全國の敎會に於て露軍戰捷の祈を獻げた。政府の御用を勤めてゐる各新聞記者は戰爭を贊護すると同時に、日本人に對する敵愾心を煽つた。何萬と云ふ人々—血氣盛んな青年から、分別盛りの百姓に至るまで—が「祈禱、說敎、檄文、示威運動、戰爭繪、新聞などに痲醉されて、貴き親を捨て、妻を捨て、子女を捨てて、心の底には云ひ知れぬ煩悶を抱きながら、ウォーツカの力をかりて出征した。そして極東の戰場で彼等は生命を的に世にも恐しい仕事、今迄逢つたこともない又何の惡い事も爲

ない人々を殺さねばならなかつた。」(トルストイの『反省せよ』から拔萃)。斯くして人々は陶醉し、野獸化して、恐しい殺人の大罪を犯しながら、それを罪惡とは認めず、却つて勳功として賞揚した。之を見てトルストイは堪へられない苦痛を感じたのである。當時米國の一大新聞社から、トルストイはロシヤに味方するか日本に味方するかと云ふ問合せの電報を受けた時、彼は斯う返事した。「私はロシヤにも日本にも味方しない。兩國の勞働民衆の味方である。彼等は政府に欺かれ、强いられて自分の良心に背き、宗教に背き、生活の安定を捨てて戰爭に出てゐる。」

トルストイは戰爭によつて呼び起された戰慄と憤怒の感情を『汝等反省せよ』及び『單一の要求』の二著に於て痛烈に表明してゐる。二千年の昔パレスチナの原頭にヨハネと基督とが相前後して現はれ、人に對つて「悔ひ改めよ、蓋し天國は近づけり。悔ひ改めざる者は永遠に滅ぶ」と叫んだ。トルストイも之と全く同樣に民衆に呼び掛けたのである。

「汝等反省せよ。卽ち人は全て今取掛つた仕事を中止して、自分自身に問ふて見るがいゝ。お前は何者か? 何處から來て何を目的としてゐるか? と。そして是等の問に答へつゝ、現在自分の爲しつゝあることは、果して自分の目的に適合してゐるかどうかを考へることが大切である。」



人々が反省せず、その活動を中止しない間は、人間の生活は現在と同樣破滅と不幸を免れないであらう。此の戰爭が終息すれば又新たに戰爭が起る。そして人々は、眞の意味に於ける基督教、卽ち人間の使命を鬪爭の中にでなく、全ての生けるものに對する愛の中に見てゐるところの基督教を受け容れないうちは、相互の殺戮を止めないであらう。「假令無智な此の戰爭が終つても、明らかに又主權者の弱い頭腦の中には、其の周圍の惡黨共の助けによつて新らしく別の空想が動き出すことが出來る。そして其の主權者をして新たに、對アフリカ策、對アメリカ策、對印度策と云ふ計畫を樹てさせ、再びロシヤ人の最後の力を搾り出して、彼等を遠く異鄕に驅り立て、殺人行爲に就かしめる。」

現代の人々が最大の努力を拂つたのは、人力を以て自然界を征服することであつた。事實此の方面に於ては科學の助けにより非常な威力を發揮した。然るに惜い哉人類同胞の宗教的意識が缺けて居たために、技術の進步は悉く同胞殺害の最良法の研究に向けられてゐる。各國民も亦それ〴〵自國政府の命令によつて互に憎惡し、時々刻々戰爭の氣運を濃厚にし、何時にても野獸の如く相討つ用意をしてゐる。

トルストイか豫知して居た恐しい大戰爭は彼が是等の豫言的論文を書いてから十年後に起つた。

併しトルストイがその驚くべき烱眼で見拔いて居たことは全く他のことである。それは何う云ふことか？　それは外でもない、他人から自分に實行して欲しいと思ふことは先づ自分から他人に實行しなければならぬと云ふ神の敎卽ち全ての宗敎の法則を只口先だけでなく事實に於て信仰してゐる人々が、ロシヤにばかりでなく全世界に益々增加して來たことである。此の人達は人を殺しに行くことを辭退し、また神の誡に背くことを殉敎よりも否死よりも怖れて居る。

「吾々が現代の大戰爭と云ふのは、今日日露兩國間に起つてゐる戰爭のことではない。地雷や爆彈や砲彈によつて行はれる戰爭ではない。之は今日までも絕へず續けられ、現在も人類の眼覺めた意識と昔から人類を抑壓して居た暗愚との間に行はれて居る精神的戰爭を云ふのである。基督は未だこの地上に在つた當時切なる期待を以て云ふた。『我は火を地に投ぜんために來れり、我其の火の已に燃えんことを願ふこと幾何ぞ。』（路加傳十二章四十九節）」

「基督の期待したことは旣に應じて火は正に燃え始めた。我々は之に逆はず寧ろ之に奉仕しなければならぬ」。トルストイは暴虐や殺戮を基礎とした生活でなく、人類同胞の認識を基礎とする新生活の道程を示しつゝ、現代の何人にもまして基督の投じた火を人々の心に益々盛んに燃やさうと努



めた。

## 三七　革命運動とトルストイ

日露戰爭に敗北した結果、ロシヤには一九〇四年から五年にかけて、自由主義者の運動と革命運動とが益々熾烈となつて來て、一方には自由主義の人達が屢々諸方に集會を催して、ロシヤに憲法政治實施の必要を公然と主張した。他の一方には革命黨が勞働者の同盟罷工、示威運動、農民一揆、大官暗殺などを益々頻繁に實行した。

一九〇五年の秋陸海軍內に騷擾が起り、勞働者、勤務員、學生などの間では全國的な大同盟罷工が始まつた。全國の外面生活は恰も停頓したかのやうであつた。政府は前代未聞の大罷業に驚いて一九〇五年十月十七日に政治的自由の實施に關する勅令を發布して、人格の不可侵權、良心の自由、言論、集會及結社の自由を認めることにした。併し此の勅令は革命運動を少しも鎭靜させ得なかつたばかりでなく、反對に革命黨は言論及出版の自由を利用しつゝ公然と武裝的反抗を叫んだ。然るに是等の武裝的反抗の試みは、バルチツク地方でも、高架索地方でも、モスクワでも何れも政府

のために鎭壓されて了つた。之によつて政府は、革命黨に讓歩したのは彼等の勢力を買ひ被つた處置であることを悟つたので、折角發布した勅令を無視して玆に再び其の態度を改め、嚴酷な彈壓策を以て革命黨に臨んだ。卽ち彼等を牢獄に投じ、西伯利其の他の北方諸縣へ流刑に處し、懲役に服さしめ、銃殺其の他の死刑に處した。斯う云ふ苛酷な壓迫を受けたに拘らず、一九〇五年から六年にかけて革命運動は更に沈靜の模樣がないのみか、反對に益々增大の徵を示して、政府要路の大官の暗殺、陸海軍の騷動、地主邸の燒打等が頻々と行はれた。

トルストイは勞働者に對する壓迫や彼等の苦しい境遇に對しては衷心より同情を寄せ、如何にもして彼等を政府や資本家の壓迫から救濟してやらうと努めたのである。併し革命家の運動に對しては絕對に同情を持たなかつた。トルストイは革命家の標榜した目的にも、亦此の目的を貫徹するために試みた手段にも同情しなかつた。

革命家が其の目的を達するがために採つた手段は、政府が常に用ひたものと全然變りはない。此の手段は凡ゆる種類の暴力で、その中には殺害も含まれてゐる。トルストイは革命黨撲滅に狂奔してゐる政府に對して斯う云つてゐる。「彼等は全く政府の生徒である。彼等は政府の撒き散らしたものを後から拾ひ集めて行つたのである。彼等は政府の弟子であるばかりではない。實に政府が生み出したもの、卽ち政府の兒である。政府がなければ、彼等も亦生れなかつたであらう。」

トルストイは政府の壓制を有害と認めて非難したが、革命黨の暴虐に對しても之を害毒として極力攻擊した。惡を以つて人々に幸福を與へたり、人間生活を改善したりすることは出來ないと彼は云つた。革命家は政府の要路者を頻りに殺害するが、之は政府をして革命黨に對する壓迫を益々强烈苛酷ならしむるだけである。

革命黨の脅迫行爲は政府當局者を激怒させるばかりではない。一般民衆の腦裡に復讐、怨恨、憎惡の感情を喚び起し、同時にまた貪慾、虛榮心、權勢慾などを養成する。殺人や掠奪など、凡ゆる種類の犯罪が啻に許されてゐるばかりでなく、之が政敵に對して行はれる場合却つて賞讃すべき行爲と見做されてゐる。斯くては人間の生命は一切の價値を失ふのである。故に革命的宣傳と行動とによつて、人々の間には愛情が冷却し、人々は以前よりも惡くこそなれ、善くはならない。一旦人類の間に愛情が冷却して人々が惡化すれば、當然其の生活も亦惡化する。人々が互に相憎み相恨んで生活する場合、其の社會に幸福のあらふ筈はない。

トルストイは革命家が其の目的を達する爲に實行した暴力手段を惡として攻擊したが、彼は更に革命黨の標榜して居た目的そのものも之を誤まつてゐると云つて排斥した。當時の自由主義者や革命黨がその活動の主なる目的としてゐたのは、西歐諸國に於て行はれてゐるやうな代議政體（議會政治）をロシヤにも實施しようと云ふことであつた。然しトルストイは之を反駁して、西歐の議會政治は疾うから行はれてゐる。が、それがために國民生活が著しく向上改善されたと云ふ國は一つもないと云つた。

「どの立憲國（共和國も同樣に）でも我がロシヤと同樣、絕えず無意味な軍備に熱中し、またロシヤと同樣に、政權を握つてゐる或少數者の考へだけで、國民を戰場に送つて同胞殺害を行はせる。西歐諸國の政府も、國民の蜂起その他の示威運動が、政府から見て法の侵害と思はれた場合には、容赦なく軍隊の力を以て之を彈壓する。」

西歐各國に於てもロシヤと同樣に死刑や投獄や追放が行はれ、稅金と稱して國民の勞力を搾取して、之を國民にとつて何の必要もない、寧ろ有害な仕事のために消費してゐる。ロシヤと同樣に勞働者は矢張り自分の生れた土地の使用權を有たず、獨り資本家が權力を振り廻して奴隸を酷使して



ゐる。國民生活の貧しさは、專制國に於ても立憲國に於ても共和國に於ても何處でも全く同樣である。只主權の形式が變つてゐるだけで、或治者の代りに他の治者が現はれ、國王の代りに大統領や議員を立てたと云ふに過ぎない。然し肝腎な國民生活には少しも變りはなく、自由、平等、博愛の大理想は少しも實現に近寄つては居ない。

代議政體の實施は國民生活を改善しないばかりでなく、外面的に社會組織を如何に改革しても、よしんば社會主義を實現したとしても、人類が現在のまゝである間は、國民生活の改善は少しも望まれない。假りに悉くの工場、悉くの地所が民衆の手に移るとしても、必ず何人か此の工場や土地を管理する者がなければならぬ（皆が皆管理することは不可能である）。然るに人が現在のまゝの生活をして、各自自分のため許り慮つて、他人のことを考へないとすれば、新らしい制度に於て主權の地位に就いた場合、自分一個の利益を少しも考へないで、社會全體の幸福のためにのみ慮るやうなさう云ふ高潔な獻身的の人物が何處から現れようか？　若しさう云ふ獻身的人物が居らず、現在のやうな人物が主權の地位に立つとすれば、制度が變つて社會主義的組織になつても、主權を掌握する人々は必ず暗愚な溫順な民衆を虐待し搾取する手段を考へ出すであらう。そして彼等の生產品の

大部分を奪つて、彼等には僅かに其の生命を支へるに足りるだけしか與へないであらう。

人々の生活を改善するには人々自身を改善する必要がある。人々を改善するには各個人がそれぞれ自分自身を改善しなければならない。人は他人に對しては何の權能もないが、自己に對しては十分權力を振へるから、惡を抑へることも亦自分の心や生活の上に善を積んで行くことも全く自由である。

斯くの如く我々は社會生活の改善に資すべき最も有効な一つの方法を持つてゐる。それは各自が自分を改造することである。然るに革命黨は自分々々の道德的完成などと云ふことは問題にしてゐない。大部分の者は常に自己の生命と自由とを賭して活動するので、道德など考へては居られない、と云ふ考へから、自然非道德的な遊蕩的生活を送つてゐる。それに道德的完成と政治上の活動とは決して兩立するものではない。政治的活動には、術策、鬪爭、怨恨、殺害が附物である。故に政治的活動は決して人間の眞の幸福を增進するものではない。

我々人類の間に公平な社會制度の出現する時期は、大多數の人間、少くとも指導者級の者が、誰の主人とならうともせず、また僕とならうともせず、全くさう云ふ考へから超越して居られるやう



になり、又恐怖、愚弄、利慾、虛榮、高慢と云ふやうな人の陷り易い誘惑に打勝つやうになつた時である。トルストイは眞に自分の生命を他人のために捧げようとする人に對して斯う云つてゐる。

「自分の生活の意義と自分の使命とに就いて眞面目に考慮し、理解し、決意せよ—之を敎ゆるものは宗敎である—さうして苟も人間としての自分の使命と認めた事には、生命を打込んで之が實現に邁進せよ。自分が意識し非難してゐる邪道には絕對に關與せず、注意して脅迫されるやうな生活をしてはならぬ。これが卽ち脅迫壓制は罪惡であり不法であると云ふ思想を普及させる最も有効なる方法であり、また眞の社會革命家が標榜してゐる人間解放の目的を達する最も確實な途である。」

「併し斯樣に外部的活動を避けることは、小心や臆病や利己主義の誹りを受けないだらうか？又斯樣に鬪爭を避けることは、惡を增長させる結果とはならないか？」

「斯う云ふ考へは現に行はれて居り、また革命指導家によつて頻りに宣傳されてゐる。然し斯う云ふ考へは決して正當でないばかりか、むしろ恥づべき考へ方である。兎に角人間全體の幸福のために奉仕しようとする人をして、試みに如何なる場合に於ても、壓制のために自分の人格もしくは所有を絕對に制肘されない樣な生活をさせて見るがいゝ。そして宗敎的及び國家的妄信は如何程强

要されても斷乎として排斥させ、又裁判所や官廳や其の他國家的壓制と見らるべき職務には如何なる場合と雖も參加せず、民衆から强制的に取立てられた金錢は絶對に利用を禁じ、凡ての暴力の根源である兵役を斷然拒否させて見るがいい。そしたら必ず此の人は斯かる行動のため眞の勇氣と眞の自己犠牲とが如何程必要であるかを、實際的に體得するであらう。」

## 三八　死刑論

革命黨とニコライ二世の政府との戰ひは漸次政府に有利となつた。一九〇六年八月、革命黨員のために首相ストルイピンが暗殺されてから、ロシヤ全國に軍事野戰裁判と云ふのが設立されて、革命黨員は容赦なく處罰された。政府は「眼に眼を以て、齒に齒を以て報ゆる」と云ふ古いモーゼの律法を無視して、殺された者は政府の役人一名であるのに、共犯者と見做された者全部を死刑に處した。そればかりではない、政府は公金や個人の財産を强奪し、邸宅を燒き拂つた者を、又はその疑ひある者を悉く處罰し、更に又殺人强盜に誘はれただけで事實未だ犯行しない者をまで處刑した。僅かの時日の間に、軍事裁判の判決によつて死刑に處せられた者は合計二十名以上に達した。



トルストイは、人間は神の性を稟けてゐるから、殺人は人間の行ふ罪惡の中で最も重罪であると認めてゐたし、自らが先天的に他人の苦痛に對して同情深い敏感な人であつたから、政府の野獸のやうな振舞のために非常に苦しんだ。政府がその克服した敵に對して行つた暴虐は、既に晩年のトルストイに取つて慥かに非常な苦痛であつたと云へる。

「何んと云ふ怖ろしい世の中になつたのだ！」—ある時彼は友人と死刑の話をした後で云つた—「君はこれ程までに痛切には感じないだらうが、私は此の世の中から全く逃げて（死んで）了ひたい位だ。逃がして呉れれば有難いが。」

トルストイは政府の行つた刑罰に就いて數種の論文を書いて、自分の驚愕と憤激とを表明した。その中で最も痛烈なのは一九〇八年五月三十一日に書き上げた『默する能はず』と云ふ論文である。今でも此の書を讀む者は誰でも心に强い刺戟を受けずには居られない。一言一句皆眼の前に展開される恐ろしい光景に悶え苦しむ心の絶叫である。

此の論文の動機は一九〇八年五月九日の新聞に掲載された次の記事である。「本日ヘルソン射的場に於て、先般エリサヴェタグラド郡の地主の邸宅を襲つた農民二十名に對して死刑が執行された。」

（數日後の新聞に刑場の露と消へたのは二十名ではなく、十二名であると云ふ訂正が出た。）此の報道はトルストイの心を強く刺戟して、政府の野獸の如き行動のために、彼が如何なる苦痛を感じたかを書かしむる動機となつた。

論文は死刑執行の狀況から書き起してあるが、トルストイはそれに續いて恁う書いてゐる。「政府が行つた慘虐行爲は直接には犯人と其の家族をして非人間的暴虐と殺戮とに泣かしめるのであるが、其の他の德義上精神上無形上の惡虐に至つてはどれ程怖るべきものがあるか知れない。政府の暴虐と殺人行爲は民衆各層の頽廢を來たすものである。即ち民衆が政府の殺人行爲を見聞するか若しくは自ら直接に殺人行爲に關係するとしたら、彼等は直ぐに殺人と云ふことが必要であり、好都合であり、缺くべからざるものであると考へる樣になる。要するに自己の目的を達する爲には殺人も亦已むを得ないと云ふ政府の遺り口のために、掠奪、窃盜、詐僞、脅迫、殺人と云ふやうな一切の犯行を、人間の自然な行爲であるかの樣に考へる不幸な人々が出現する。」

續いてトルストイは、政府が如何に革命黨に對して暴威を振つても、決してそれで革命を撲滅し得るものではない、と說いた後で、政府と革命黨とを比較して次のやうに書いてゐる。「革命黨の



所行とその動機は全然政府のそれと同一である。革命黨も政府と同樣な（私は結果があれ程恐ろしいものでなかつたならば滑稽なと云ひ度い）迷誤に陷つてゐる。それは或一部の人々が、自分達の希望しまた正當と認むる社會制度を立案して、他の人々の生活をも此の案に順應させる權力と可能性とを有すると考へてゐる點である。動機も同じであり、また目的を達する手段も同じである。此の手段と云ふのは凡ゆる種類の暴力で、時に殺害に達することもある。行はれた惡事の辯明も同一で、多數の幸福のためにする惡事は不道德ではない、故に道德を破壞しない限り、多數の者の幸福を實現するためには、詐僞も、强奪も、殺人も許さなければならない。」といふのである。

次の章に於てトルストイは本文を書くに至つた動機に就いて述べてゐる。

「あの恐ろしい犯行の首謀者の社會的地位が高ければ高い丈多く、私の心に起しまた起しつゝある感じを私は今まで押へて來た。が、これ以上押へることは不可能でもありまた押へるのも嫌である。」

「私が押へられない、また押へたくない第一の理由は、此の人達は自分の罪惡を認めないのであるから、それを先づ糾彈しなければならない。此の糾彈は此の人達自身に必要であるが、更に此の

人達に煽てられて此の人達の怖ろしい行爲を是認し、此の人達を手本として專ら之に倣はうとする群衆に對しても必要である。第二の理由は、此の糾彈のために私を周圍の社會から何かの方法で追ひ出して呉れることを望んでゐるからである。私は現にこの社會の周圍に行はれてゐる犯行の連累者と自分を感ぜずにはゐられないからである。」

「斯う云ふ風に生きてはならない。少くとも私にはさう云ふ生活は出來ない。また將來もしないであらう。」

「私が本書を書き、さうしてそれをロシヤ國内ばかりでなく諸外國にまでも全力を盡して擴めようとするのは、こんな非人間的慘虐が終息するか、或は自分が此等の惡行との關係を斷つて牢獄に投ぜらるるかの二つの中の一つを望む心からである。獄舍に投ぜらるれば、この怖ろしい事件は私に關係なく行はれるのだと云ふ意識が、私の心にはつきりするであらう。でなければ二十人だか十二人だかの農民のやうに（そんな結構なことは想像も出來ないが）私も眼匿しをされ、腰掛臺から突き落されて、自分の重さで此の老ひぼれた咽を絞めるやうにして死んだ方が良いかも知れない。」

「兎に角以上の二つの目的の一つを達するため、斯ふ云ふ大罪惡の關係者全部と、全ての人々と



に私は訴へたい。婦人にも子供にも平氣で眼匿しを被せる監獄の看守から、卿等のやうな大罪の主なる指揮者や許可者に至る全部の人々に訴へたい。」

斯う云つてトルストイは政府當局の罪惡を痛烈に摘發してゐる。

斯樣に一九〇八年トルストイはロシヤ政府に書き送つた。當時政府の首領はニコライ二世であり、内閣の代表者はストルイピンであつた。其の後三年を經てストルイピンはキエフに於て爆彈に斃れ、それより更に六年を越えてニコライ二世自身も、既にトルストイが一九〇五年に彼と其の政府とに豫言した通り、「免れ難い、恥づべき破滅」を遂げた。併しトルストイが當時の壓制者、殺人者に與へた、あの苦しい心の叫び、心臓を突刺すやうな叫びは、決してあの人達にばかり與へたのではなく、凡ゆる時代、凡ゆる國民の壓制者と殺人者にも向けられてゐる。世界に主權者から加へられる壓制と殺人行爲とが存在する間は、トルストイの火の樣な言は、假令爲政者が奸策を以て國民に對する自己の犯行を掩はんとしても、全ての權力ある殺人者壓制者の良心を燒き盡さずには置かないであらう。

## 三九　トルストイ教徒に對する迫害

トルストイはロシヤ政府の對革命黨政策の暴虐を非難した其の諸論文に於て、如何程暴虐を極めても革命を絶滅することは不可能であると論じた。

『暴力の法則と愛の法則』と云ふ著書の中にトルストイは斯う書いてゐる。「政府當路の人々よ、卿等は想ふに從來の西歐の革命彈壓に倣つて、此の上尙五千、一萬、三萬と絞殺又は銃殺するであらう。またその計畫を準備してゐることであらう。勝手に行るがよい。併し絞首繩、絞殺臺、密偵、小銃、監獄などの外に、それよりもはるかに强い精神的力の有ることを知らねばならぬ。卿等のために絞殺され銃殺された者にも父があり、兄弟があり、妻があり、姉妹があり、朋友があり、同心の者がある。故に假令卿等は卿等が殺した人々の手から刑罰によつて逃れ得たにしても、此の刑罰は卿等の殺した者の親近者及び其他の人々の中に、卿等が殺して地中に埋めた者よりも二倍三倍の兇惡な敵を必ず產み出すであらう。そして卿等が殺す犧牲者の數が增せば增すだけ、卿等の敵卽ち卿等に對する民衆の怨恨を逃れる途はなくなる。此の怨恨を助長する者も卿等自身であり、此



の怨恨を危險化する者も亦卿等自身である。」

此のトルストイの苦言は計らずも豫言となつた。一九〇五年から六年にかけての革命は鎭壓されて、政府は凱歌を上げ、閣員の一人內務大臣マカロフの名を以て一九一二年に勞働者銃殺の顚末を發表して、「過古に於けるが如く將來も亦然らん」と述べた。然るに民衆の政府に對する怨恨は漸次其の根を深めて、一九一七年三月遂に發して新たなる革命となり、專政政治を壔し、其の臣下を放逐するに至つた。

革命黨に對する政府の追跡が嚴しくなるに連れて、トルストイズムの共鳴者で、當時嚴禁されてゐた彼の反國家的反敎會的著書の普反に盡力してゐた人達に對しても、政府の糾彈が嚴しくなつて來た。併しトルストイ自身に對しては從來の通り更に手出しをしなかつた。つまり彼自身が當然苦しむべきところを他の人が苦しんで居た形で、トルストイに取つては一層の苦痛であつた。

まだ一八九六年、トゥーラ市に於て一女醫が家宅搜索の際、當時禁斷されてゐたトルストイの著書を發見されて拘引されたことがあつた。此の時トルストイは時の內相ゴレムイキン及び法相ムラ

ウィヨフに書狀を送つて、如何なる手段を用ひても壓制では政府が危險視してゐる思想を制止することは出來ないと書いた。

「政府が如何なる手段に訴へようとも眞理の普及を制止し得るものではない。」「故に政府のために面白くない思想の出現に對して、政府の執るべき最良策は全然對策を講じないことである。」

「若しも政府が積極的に出て、その惡いと認めたものを罰し、恐喝し、絶滅しようとするならば、同じ不條理、同じ不公平にしても比較的罪の輕い方を選ぶがよい。それは凡ての刑罰、威嚇、撲滅策を、政府が萬惡の根源と認めた者、即ち私に向けて集中することである。それに私は、たとへ政府で邪惡と認めても、私自身が神に對する神聖な義務と認めたことは、此の後と雖も、否死ぬまで止めずに發表するからである。」

此書面は直接トルストイに取つては何等の結果も齎らさなかつた。噂によれば此の書面を受けた或大臣は、トルストイから斯う云ふ決定的聲明を突き附けられた以上、此の儘彼を自由に放任して置く譯には行かない、と云ふ意見を述べた。併し他の大臣は、トルストイ自身に手を附けるのは工合が惡いから、彼の友人や同主義者に對する迫害を嚴重にしたがよい。之が彼に取つて最も苦しい



罰法である、と云ふ意見を提出したとのことであつたが、政府は後者の意見を採用したのか、その通り實行した。

一九〇八年ノウゴロド市に於て、當時嚴禁されてゐたトルストイの著書を隱匿し、且つ之が普及に努めたと云ふ廉を以て、トルストイの同主義者モロチニコフが一年の監禁に處せられた。之についてトルストイは新聞紙上に早速意見を發表して、政府に對し、彼の友人や同主義者に手を觸れず、彼自身に手を下すやうに再び歎願した。併し之も勿論何の効果もなかつた。政府はトルストイの著書の普及に從事する者を益〻嚴しく追窮して、トルストイ自身は依然として其の儘放任して置いた。此の原因は、トルストイが既に高齢に達してゐたと云ふことも確かにその一であるが、最も主なることは、彼の名聲が獨りロシヤ國内ばかりでなく諸外國にまで響いてゐたからである。トルストイを拘禁することは、やがてロシヤ政府の蠻風を諸外國に暴露することになるので、それが最も政府に取つて不利益なことであつた。之がために已むを得ず、政府はトルストイが生存する間はそのまゝ默認するより仕方がなかつた。併しトルストイの所論の普及を謀る者に對しては容赦なく之を流刑に處し又は監禁した。トルストイの教義は、現存の制度に取つては革命的思想よりも恐る

べきものがあつたからである。

トルストイの遠い親戚で伯爵デ、トルストイと云ふ人が内務大臣在職中(一八八二年から一八八九年まで)、皇帝アレキサンドル三世に對し、トルストイは國家と教會に反對する著書を出したのであるから、當時宗教的犯罪者の收容所であつたソロヴェーツキイ修道院に送る必要がある、と上申したと云ふことが傳へられてゐる。然るに皇帝アレキサンドル三世は、その上申を拒絶して、「トルストイに手を觸れてはならぬ。予は彼の希望を遂行する意旨は毛頭有たない。また彼を殉難者にしようとも考へてはゐない。」と答へた。

革命鎭定後農民と勞働者の狀態は以前よりもずつと慘めなものとなつた。一寸でも不平がましい事を口にしたら、政府は直ぐに監獄に入れたり、流刑に處したりした。

土地の奴隷卽ち農民の地主に對する隷屬關係は以前よりもずつと甚しくなつた。トルストイは勞働民衆が土地を有たないといふことを、現代の大なる不合理であるとして、憂ひもし又苦しみもした。彼は或地主の所有地を見て斯う云つた。



「私は今日まで農奴の不合理については、現在土地私有制度の不合理に就いて感じてゐる程明瞭には感じなかつた。一方には此の花、此の草原——一方には農民の家畜が草一本殘さず喰ひ盡された休耕地に佇んでゐる樣子、何と云ふ對照であらう？　また此の宏大な邸宅は何うだ、百姓は物置の突張り棒にも困つてゐるのに……斯う考へて見ると、何だか恐ろしい感じが込み上げて來る。」

一九〇六年十一月九日、新法律が制定されて、農民は自由に村團(ミール)(土地共有制度)から脫退することが出來、各自その割前の土地を完全に自己の所有とすることが出來ることになつた。旣に自己の所有である以上、農民は土地に對して何んなことでも出來た。贈與することも出來、賣却も自由であり、又は之を飲んで了つて子孫に何一つ殘さないことも出來た。以前は、割當てられた土地は賣却することは出來なかつた。土地は一個人の所有でなく、村團の共有として代々傳へられたからである。トルストイは此の村團の撤廢に對して非常に憤激した。

「之は惡むべき政府の犯行で、正しく村團制度の破壞である。だが、此の犯行の首魁は果して何人か？　輕卒な、皮相な、腦中一つの眞面目な識見も有たない人物に相違ない。之は輕擧を超へ、無分別を通り越した愚策であるが、あの餓鬼(トルストイは首相ストルイピンを斯う名附けた)は幾

世紀かの間に確立された民衆の規約を勝手に變へることを敢てしたのである。」

（次の事實は興味に價する。既にトルストイの死後、一九一〇年の末に、地方自治團長からヤスナヤ・ポリャーナの農民に對して、村團から脱退するやう勸告して來た。農民は直ちに集會を開いて、此の勸告を審議したのであるが、結局トルストイが豫て村團廢止に反對であつたことを考慮して、自治團長の提議を斥けることに一決した。）

## 四〇　人類の教師として

トルストイの宗教道德的著述が擴められるやうになつてから、或は書面をもつて、或は直接訪ねて來て、助言を求めたり、精神的援助を願つたりする者が出て來た。

斯う云ふ人々の數は時と共に增加して行つた。或は宗教的疑惑の解決を願ひ、或は己れ自身との內的鬪爭や人生の意義の探究に對する援助を願ひ、或は自分の外面的生活を神の意旨に適ふやうに建設することに就いて、或は社會的政治的問題（國家とか革命黨とかの）に就いて、トルストイの意見や助言を求めた。其の外樣々の問題、例へばどんな本を讀んだらよいか、婦人はその精神的本



質に於て男子と同等であるか、どうして飲酒の風が起つたか、また之を防ぐのにはどうすればよいか、遊金をどう使つたらよいか、どうすれば煩悶に打勝てるか、絕對の貞操を守るべき必要があるか、無政府主義者の說とトルストイの說との相違點は何かといふ樣々な問題を提出して來た。

トルストイに向つて、いろ〳〵な人が、いろ〳〵な場合に提出した問題を悉く數へ上げることは到底不可能である。問題は書面を以て或は直接來訪によつて提出されるのであるが、中には態々數百露里も隔たつた所からヤスナヤ・ポリャーナまで訪ねて來た者もある。トルストイは、問題が單に好奇心や虛榮心からでなく、眞面目に提出されたと見た者に對しては、詳細に回答した。彼は人と應接する際、自分で定めたモットーを堅く守つてゐた。それは「どんな人と遇つても、その人を利用しようと思つてはならない。自分が其の人のために助力することを考へねばならない」と云ふことであつた。

トルトスイに取つて最も嬉しかつたことは、民衆の中から眞の生活に目覺めた人の書面を見たり來訪を受けたりすることであつた。此の人達の理智の覺醒は、先づ教會の要求に對する批評から始まるのが普通で、トルストイに對つて必ず次のやうに質問した。基督は神であるか？　聖書の言は

悉く神より出たものか？　奇蹟は信ずべきものか？　洗禮及聖餐は領けねばならないのか？　此の種の問題はトルストイ自身に取つては、とうに解決がついてゐるのであるから、時間も勞力も惜しまず解答を與へてやつた。

トルストイが特に喜んだことは、神の法卽ち愛の法を完全に遵奉せんがために、己れの自由を、否時として生命をも犧牲にした人達との交際であつた。此の種の人達は必ず先づ兵役を拒否した。此の種の拒否は年と共に多くなつた。一八九〇年代の半ばから一九〇〇年代の初めにかけて、政府は兵役拒否者を十八年の流刑に處して、西伯利のヤクウツク州へ送り、一九〇六年には新法律を制定して、兵役を拒否する者は、懲罰隊に送るか若しくは四年乃至六年の懲役に服させることにした。

兵役を拒否する者は大抵たゞの百姓か勞働者で、勿論深い教育を受けた人ではなく、僅かにいろはが解る程度の者か全然それさへ解らない者もあつた。が、トルストイは彼等を眞に啓蒙された者と見做した。それは此の人達が、人間各自の第一に知らねばならないことを知つてゐて、彼等を此の世に送つた者の意旨を實行するのにはどう生活すべきであるかを辨へてゐるからである。



トルストイが兵役拒否者との交際を如何に喜んでゐたか、彼は此の人達をどれ程愛してゐたか、此の人達が體驗した苦役を如何に高く價したか、と云ふことは、彼が一九〇八年五月二十七日イコンニコフと云ふ兵役拒否者に書き送つた手紙の中によく表はれてゐる。

「我が最も親愛なる兄弟イコンニコフよ、君の手紙を本日、五月二十七日に受取り、感激と深い懷しみとを以て讀んだ。就いては早速返事を書く。君のことを想ふ度に經驗する君の柔和な而かも堅實な性格に對する驚歎、君に對する責任、同情、殊に愛慕などのごつちやになつた感情は、到底此處に傳へることが出來ない。神は必ず君を助けて下さるであらう。神は君の心に宿つて居り、君がよく知つて居り、それによつて君が生活してゐるところのものである。君が現在爲しつゝある仕事は、假令どんなに六ケ敷からうとも必ず成就されねばならない。また事實成就するであらう。只若し君でなければ他の者によつて。また此の仕事を爲しつゝある者に取つて、假令どんなに辛からうとも、其の運命は幸福である。君の生活は世の大多數の者の生活のやうに無意味には終らない。世の多數の者の生活は啻に無意味であるばかりではない、兄弟のため卽ち人々のため寧ろ有害である。今や多數民衆の間に、現在君が生活のモツトーとして居り、また君をして現在の生活を營まし

めてゐる同じ意識が益々目覺め出したと云ふ報道に接して、私は苦しみもすれば喜んでもゐる。先日ブルガリヤ及ハンガリイに於ける兵役拒否と投獄の宣告の報を受け、またロシヤに於ても斯種の事件が漸次增加しつゝある報道を受けた。

君はどうやら裁判所に於て自分の執つた態度に就いて不滿を抱いて居る樣子である。が、あれ以上身を持することがどうして出來よう？　その內には救はれるであらうことを考へて、不平を訴へず、心を安んじて四年の監禁宣告を受けよ。あまり神經を興奮させては自由意志を失ふものである。

汝を愛する兄弟レフ・トルストイより」

トルストイの受けた手紙は勿論彼に同情を寄せたものばかりではなく、中には「誹謗的」なのもあつた。卽ち單に非難だけでなく、彼の信仰を罵詈したものもあつた。斯ういふ手紙の差出人は大抵僧侶が說敎や印刷物によつてトルストイを誹謗した讒言を、其のまゝ盲目的に信じ込んでゐる人達である。併し此の種の手紙はさう多くはない。



トルストイから精神的援助を、書き物なり或は直接の面接なりによつて受けてゐた人々が、彼に對して懷いてゐた愛慕と尊敬とは、一九〇八年八月二十八日彼が八十回の誕辰を迎へた時に表はれた。

彼の誕生日の五、六ケ月前ペテルブルグに於て特別委員會が開かれた。其の目的は彼の八十回誕生日を期して全國的に祝賀會を開かうと云ふのであつた。此の委員會には有名な作家や社會的名士が多數參加した。然るにトルストイは謙遜して此の委員會發起者に、八十回誕辰の祝賀會を是非中止して呉れと願つた。そこで委員會は彼の意旨を尊重して遂にその活動を中止した。從つて誕生祝賀會は實現するに至らなかつた。

併しトルストイは誕生日までに澤山の祝辭と祝電とを受取つた。これはロシヤ全土の何千と云ふ未知の人から、トルストイに對して感謝と敬慕を表明したものであつた。トルストイに寄せられた祝辭は社會の凡ゆる方面を網羅してゐた。大學、市會、自治廳、諸學校、會社、會合、團體、倶樂部、商會、新聞社、雜誌社、政黨からの祝辭、監禁又は苦役中にある囚人、靑年、處女、少年、農民、勞働者からの祝辭、殊に敎會牧師の中にさへも祝辭を送つた者がある。

トルストイに寄せられた愛と感謝と尊敬とを表した是等の祝辭や祝電の中には、感激すべきものがあり、また極めて風變りなものもあつた。例へば或る百姓で、姓名はないが、郵便葉書に次のやうに書いて寄越したのがあつた。

「神よりの靈感を受けた老翁よ、默するな、長壽を保たれよ。」

また次のやうなのもあつた。

「一生涯貴下と同じ途を靜かに歩んだ一老人の心からの敬意を受けられよ。」

「貴下の生活によつて、私までが此の世に生きることを暖かく感じる。神は貴下に健康を與へ給ふであらう。」

「心の偉大なる者は幸ひなり。人間の苦惱を醫すを得ればなり。」

「慈愛深き主はその忠實なる僕に長壽を賜ふであらう。」

又トルストイが基督の教義の眞髓と眞の基督教の意義とを闡明したことに對して、深甚の感謝を表明した手紙も多かつた。

「今日に至るまで貴下の外に、偉大なる基督の教義の眞髓を解明した者はなかつた。此の世界的



大問題に關しては、貴下の著述によつて始めて各人が、基督の偉大さを解し得るのである。」

ペテルブルグの或商人の息子から次のやうに書いて來たのがある。

「貴著『我が懺悔』と『我が宗教』とは私の大切な座右の銘である。『我が宗教』は私の信ずるところでは、その叙述の平易な、而かも意味深長な點に於て、恐らく世界に於ける第一の福音書である。」

「貴下の福音書と他の著述によつて、私の心に喚び起された研究心と教條に對する批評的態度との爲に貴下に感謝す」と、元教員であつた者から書いて來た。

曾て神學生であつたものから次のやうな感謝が來た。

「聖書の眞理に對して新らしい見解を確立されたことを感謝する。全人類は此の眞理に接して始めて社會的幸福に近づくことが出來る。」

或農民から次のやうに書き送つたのがある。「レフ・ニコラーエウィチよ健在なれ。然し藝術家又は小說家としてゞはなく、聖書の永久的眞理を僧侶社會の塵芥から救ひ出した人として、また人々を助けて基督を理解し愛慕せしむる勞働者としてである。」

トルストイが何ものをも怖れずに、猖獗を逞うしてゐる邪惡と勞働者虐待とを糺彈したことに對して、彼に敬意を表したものも澤山ある。それ等の中には政黨的色彩を帶びたものもあつた。中にはトルストイ自身の見解と全く一致して、その出所の如何を問はず一切の暴力を非難したのもあつた。例へばニジェゴロドの男女勞働者の如きは、百三十二名の連名を以て、彼に祝辭を送り、その中にトルストイを「善行の傳道者として、邪惡、詐僞、僞瞞、蠻人的暴虐を容赦なく譴責した」ものとして、彼を祝福し、尙次のやうに續けてゐる。「我々の仲間は殆んど全部貴下の著書を讀んで、道德的淨化の必要を感じてゐる。貴下の著書は讀者の心に高雅な感情を起させ、社會的幸福のためには自己を犧牲にすることを敎へてゐる。また、虛僞、不善、慘酷に對しては極力反抗させる。」

或人々はトルストイの著書の感化によつて、道德的に更新したことを感謝してゐる。例へば「寒い西伯利の一老人」はトルストイの神聖な愛の言葉によつて、兇惡な復讐の軛を脫し得たことに對して、熱烈な謝意を表してゐる。

以上のやうな多數の祝意、謝辭、挨拶を受けても、トルストイは決して慢心を起さなかつた。然



し人々が、彼の述べたことは純眞な基督の敎義に外ならない、と云ふことを悟るに至つたのを見て、流石に彼も喜びと感動とを禁じ得なかつたのである。

## 四一　晩年の生活と著作

晩年に於けるトルストイの外面的生活は可なり單調に續けられ、殆んどヤスナヤ・ポリャーナの外には何處へも出なかつた。一九〇七年の夏から又々ヤスナヤ・ポリャーナの農民兒童の敎育を初めて、その著『讀書の輪』の難解な思想を解り易い言葉で說明し、又此の當時書いてゐた『兒童のための基督敎』と云ふ簡易で、通俗的で、誰にも解るやうに福音書を作り變へたものを讀んで聞かせた。此の外に地理や天文に就いて讀んだり話したりし、天上のいろ〳〵な星に就いても敎へた。斯うして兒童の對手を一九〇八年の春まで續けた。

トルストイは一九〇四・五・六年に亙るロシヤの自由主義革命運動の眞最中にも永久的問題に關する思索や著述を止めなかつた。その結果として現れたのが、前記の『讀書の輪』である。此の書はあらゆる時代あらゆる國民の賢人達の金言（その中にはトルストイ自身の多くの金言もある）を輯

錄し、それを一年中の各日に配當したもので、その內容は諸種の重要問題に觸れてゐる。卽ち人生問題を始め、宗敎、精神、神、生死の意義、靈魂不滅、敎育、自己完成、愛、自由、結婚、勞働、謙遜、傲慢、權力と富の罪惡及び現存社會制度と國家組織の無意義、戰爭、刑罰とあらゆる暴力の不法、僞の科學と眞の智識、節制、菜食主義、自制、理性、瞞著、精神的努力、思想の力、祈禱、人生の喜び、人間の眞の幸福、苦痛と病氣の意義等人生萬般の問題に觸れてゐる。

一九〇七年から八年にかけてトルストイは新たに『讀者の輪』を改訂した。その際多くの新らしい金言（主として彼自身のもの）を取り入れ、多少古いものや比較的力の弱いものは取り除け、全體の叙述を著しく簡單にして、全くの眞面目な、然し文語に通じない讀者のために解り易くしようと努めた。以上の外に最も重要な點は、トルストイ自身の人生觀が系統的に窺はれるやうに、全ての金言を按配したことである。改訂された『讀者の輪』には、一ケ月中每日の內容が凡て前日のから出發するやうにし、さうして一ケ月每にトルストイの全世界觀を系統的に述べるやうにしてある。改訂した『讀書の輪』は『その日〳〵』と云ふ表題を附けられた。

此の『讀書の輪』と『その日〳〵』とは共にトルストイ自身に取つても最も大切な書であつたが、他の人々に取つても彼の著書の中で一番有益であらうと、彼自身が認めてゐる。その死に至るまで每日彼自身之を讀んで、精神的强味と喜悅を感じ、他人に對しても每日之を讀むことを勸めた。

「人々が何うして『讀書の輪』を讀む氣にならないのか、私には解らない。每日々々世界の賢人達に接することほど貴重なことがあるだらうか？　私に取つては『讀書の輪』を每日讀むことは、祈禱するのと同じである。」

この頃のトルストイは、內面的精神的生活に全力を傾倒してゐた。つまり自分を世に遺はした者の意旨を出來るだけ熱心に、出來るだけ完全に遂行しようとして居た。彼の考へるところでは、人を世に遺はした者が人に要求するのは唯一つ、卽ち凡ての生ける物を愛することである。此の愛によつて彼の心は一杯になつて居たから、健康とか財產とか名譽とか云ふやうな一切の世俗的幸福には全然何の興味も意義も認めなかつた。彼はその努力を悉く愛の充實に向け、彼の生活を圍る悉くの人に愛を以て接することに努力した。

トルストイの助手の一人の話によると、此の助手が或晩用事があつて（一九〇七年の秋であつた）彼の書齋に入つて行つた。此の時トルストイは肘掛椅子に倚り掛つて、別に何も爲てゐないやうであつた。助手が彼の依頼を受けて書いた手紙を机の上に置いた時に、助手に向つて恁う云つた。

「私は今世界中で最も眞面目な仕事に沒頭してゐる。お前にもこれから勸めようと思ふのだ。それは自分が悪い感じを抱いて居る人々を頭の中で調べて、愛を以つて其の人達のことを考へ、其の人達の心の中に深く立入ることである。例へばクロンシタットのイオアン神父の如き、どうして彼が玆に至つたかを考へることである……」

こんな風にトルストイの全存在は他人に對する愛で深く貫かれてゐた。だから、筆を取つても矢張り此の問題で、晩年の彼は愛のことばかり書いてゐた。傳説によれば基督の愛した使徒ヨハネが高齢に達してからは、自分の弟子達に對つて、始終同じ樣に「子供達よ、互に愛せよ」といふたといふことであるが、トルストイもその晩年の作物に於てはどれを見ても同じ事を繰返してゐる。

『互に相愛せよ』と題する教書（これはトルストイの著作の中で最も簡單に最も明瞭に最も平易に自分の教義を述べたものである）の中に斯う云つてゐる。「これ程平易な、これ程愉快なことは



ないではないか。唯各人互に相愛せよ。啻に自分が愛してゐる人だけでなく、何人をも、殊に基督が教へたやうに自分が憎んでゐる人達を愛せよ。さうすれば人生は絶え間なき喜びである。」

「愛の教義がどれ丈實際に應用出來るかと云ふことを確實に知るのには、實地に愛して見ることが一番よい。これがためには或一定の期限を定めて、其の間愛の一切の要求を實行して見るがよい。卽ち盜賊でも、醉漢でも、亂暴な長官やその手下の者でも、誰に接しても愛を忘れないやうにする。云ひ換へれば斯う云ふ人達に接する場合、第一に考へねばならないことは、對手の者に必要なことは何であるかと云ふことで、自分のことではない。斯うして豫定の期間を過したら、振り返つて見て、苦しかつたか？　自分の生活は傷められたか？　それとも改善されたか？　を考へてみる。さうすれば愛を實行することが人生に幸福を齎らすものであることが實際であるか、或は單に言葉の上だけに止まるかと云ふことを、自分の實際の經驗に基いて判斷が出來る。故に先づ之を實行して見ることが第一である。悪に報ゆるに悪を以てしたり、人の眼の塵を兎や角云ふたりしないで、悪に對しては善を以て答へ、他人の非行をかれこれ云はず、畜類に對してでも亂暴がましいことは避けて、親切と愛想とを以て取り扱ふやうに心がけるがいゝ。斯うして一日を過し、二日を過

し、三日を過し(經驗のために)てから、その間の精神狀態を以前のそれと比較して考へるがいゝ。必ず陰鬱な怒りつぽい重苦しい性質であつたのが、晴々した快活な喜ばしい人間となつたことを發見するであらう。斯うして一週間經ち二週間經つうちに、其の精神の喜悅はずんぐ〳〵增進し、仕事は順調にどしぐ〳〵進捗するに相違ない。」

「愛すべき兄弟よ、只これを實行して見るがいゝ。然らば愛の教義は決して言葉だけではなく、實際の行爲であること、最も手近かな、誰にでも解り易い、また必要な行爲であることを氣附くであらう。」

トルストイはまた論文『唯一の誡律』の中に斯う書いてゐる。「愛は唯一の誡律である。教會の人達は此の誡律に更に別な色々の誡律を結び付けて、それを矢張り神の教であるから必ず實行せねばならぬと說いてゐる。例へば聖像に祈禱を獻げること、懺悔すること、聖餐を領けること、或期間或食物を食べないことなどである。けれども斯う云ふやうな、教會が勝手に加へた誡律は眞の愛の誡律を人々より全く掩ひ隱してゐる。然し眞の基督教は勿論、其の他波羅門教、佛教、道教(老子の教)などに於ても、人々に說く教は唯一つ愛の誡律だけである。實際また愛の誡律は凡ての宗



派の經典に載つてゐるばかりでなく、凡ての人の心に堅く書き附けられてゐる。」

基督教でも他の偉大なる宗教のやうに、神は我々の心に宿つて居り、愛によつて我々の中に表はれてゐる、と教へる。どの偉大なる宗教でも信者に要求するところは唯一つで、己れの裏にある神に對する愛と、他の凡ての人の裏にある神に對する愛とである。自分の裏にある神を愛すると云ふのは、愛の最高理想に精進すること、己れの裏に神の現存を忘れぬこと、常に己れを正しくすることと、人間精神に於ける神の現存と相容れない一切のことを根絶することである。また他人の裏にある神を愛すると云ふことは、他人にも自分の裏に在る神と同一の神が存在することを認めることである。從つて他人に對して行ふべきことは、自分の欲することでなく、凡ての人の裏にある神の欲することでなければならぬ。卽ちどんな人であらうと、決して他人に害を與へてはならない、侮辱してはならない、輕蔑してはならない。たとへどんな人であらうと、世の中の最も神聖なものとして之を尊敬せねばならない。

トルストイが晩年に書いた論文の中でもう一つ『學問に就いて』と云ふ驚歎すべき論文を記憶しなければならぬ。此の中に彼は、我々が學問と稱してゐるものを學問と見做さなかつた理由に就い

て說いてゐる。

「眞の科學は、各人が神なり運命なり自然法なりによつて定められた此の世の短い生存期間を、最も有意義に生活するのには何を爲すべきであるかと云ふことを知ることである。併し此の世の生活を最も有意義に送るのには、先づ第一に、何時でも何處でも誰にでも確かに善いことは何であるか？　又何時でも何處でも誰にでも確かに惡いことは何であるかを知らねばならない。卽ち爲すべきことゝ爲すべからざることゝを知ることが肝腎である。眞の學問と云ふのはこれであつたし、また之でなければならない。」

「古來人類の最も偉大なる宗教的道德的教師達は何れも此の眞の學問を人々に教へた。印度のクリシナと佛陀、支那の孔子と老子、ギリシャ及びローマのソクラテス、エピクテタス、マルク・アウレリウス、パレスチナの基督、アラビヤのマホメット、其の他中世紀及び近世紀に於ける偉人等何れもさうである。」

「人が此の意味の學問を學ぶのは、決して卒業證を貰つて此の世の生活の安定を保證して貰ふ爲ではない。眞理を理解するが爲である。然るに現代の科學なるものは決してさうではない。只此の



世の中に都合の好い事象の研究に過ぎない。」「太陽の重量は幾何か、太陽とこれ〳〵の星と衝突することはないか、どんな虫が何處に棲息し、どう蕃殖するか、それからどんなものを作り得るか、どうして地球は今日のやうなものになつたか、草がどうして之に生へるようになつたか、地上にはどんな植物、鳥類、魚類があるか、昔はどんな生物が在つたか、何の國王が何の國王と戰つたか、誰と結婚したか、誰が何時詩や歌や童話を書いたか、どう云ふ法律が必要であるか、何故監獄や絞首臺が必要なのか、また之に代るべき方法器具はないか、各々の石や金屬はどう云ふ成分か、蒸氣とはどんなものか、又どんな風に冷却するか、電氣動力、飛行機、潛水艦などはどんな風に造るか、等々である。」

是等の知識は、一面には苦しい勞働に携はらない閑人の好奇心を滿足させ、他の一面には富者の生活の滿足と便利とを增進し、現存惡事の辨解に役立つてゐる。併し是等の智識は際限なく、又際限のある筈もないが、決して人間とは何か、人間がその使命を果すためにはどう生活したら好いかと云ふやうな問題を解決することは出來ない。之を解決する知識のみが眞の科學である。

トルストイの最後の大作は、彼の最後の年（一九一〇年）に書いた『生活の途』である。これは

トルストイ自身の言葉とその外例の『讀書の輪』に入つてゐる賢人達の格言を輯錄したもので、その一部は新らしい格言から成立つてゐる。此の中にトルストイは、人とは何ぞ、人は如何に生活すべきやと云ふ問題に對して、極めて豐富に又系統的に其の信念と見解とを述べてゐる。トルストイの教義を根本的に研究しようとする人に取つては、此の最後の驚歎すべき著述『生活の途』を讀むことが第一に必要である。

## 四二　家出の念願

一九一〇年十月二十八日朝六時頃、トルストイはヤスナヤ・ポリャーナから家出して、遂に再び歸らなかつた。

最初の家出は、二十六年前の一八八四年六月十七日に試みられた。其の時、トルストイは家出を思ひ立つて、トゥーラに向つて徒歩で出かけたが、途中から引返した。此の後も度々家出の考を起したのであるが、一八九七年の夏又々家出を決心して、妻のソフィヤ宛に一八九七年七月八日と云ふ日附の書置を遺した。が、其の後思ひ直して、遺書は封筒に入れて、其の上に「此の手紙に就い



て私から特別な指圖がない限り、此の手紙を私の死後ソフィヤに渡して貰ひ度い。」（其の通り實行された）と書いて置いた。その內容は斯うである。

「愛すべきソーニャよ。長い間私は私の生活と私の信仰との間にある矛盾のために苦しんで居た。私は、お前の生活と私がお前に仕附けた習慣とを變へさせようと仕向けたが、今日までとうゝ出來なかつた。が、またお前を捨てゝ行くことも出來なかつた。それは私が家出をすれば、子供達はみんなまだ年が行かないのに、たとへ僅かであるとは云へ、私から彼等に何の感化も與へずに、お前一人に迷惑をかけると考へたからである。けれども此の儘心の爭鬪を續けてお前を苛々させたり、或は私の慣れてゐる、さうして私を取卷いてゐる誘惑に脆くも屈服したりして、過去十六年のやうな生活を繰返すことは最早到底出來ない。で、疾うから考へてゐた家出を愈々今度は實行しようと決心した。第一、年を取るに伴れて現在の生活は愈々心苦しくなり、益〻獨居が爲度くなるからである。第二に子供達ももう大分生育したから、私の感化は最早家庭には必要がなくなり、それにお前達は遙かに活々した興味をもつてゐるから、私が居なくても格別なことはないと思ふからである……」（ソーニャはソフィヤの愛稱）

「殊に重要なことは、丁度印度人が六十歳近くなると森の中へ去るやうに、又どんな老人でも宗教的な考をもつ人はその生涯の晩年を、冗談や滑稽や無駄噺やテニスなどに費やさず、專ら神に献げようと心がけるやうに、私も最早七十歳に達したのであるから、精神の全力を盡して斯う云ふ平和を得たい。それはたとへ完全な調和でないまでも、私の信仰や私の良心と私の生活との間に横はる此の叫んで止まない不調和ではない。」

「若しも私が之を公然實行するとすれば、恐らく懇願と非難と論爭と怨言とが沸き起つて、爲に私も思ひ止まつて自分の決心を遂げないで了ふかも知れない。併し此の決心はどうしても果さなければならないのだ。だからどうか、私の行爲がお前に取つてどんなに辛からうと、それは許して貰ひ度い。殊にお前ソーニャよ、どうか好意を以つて私を行かして呉れ、私を探すな、愚痴をこぼして呉れるな、私を非難して呉れるな。」

「私がお前を置いて去るからと云ふて、それを以て直ぐ私がお前に不滿を抱いてゐる證據だとは云へない。私は、お前が私と同じに物事を考へたり感じたりすることが、文字通り出來なかつたし、また今も出來ないといふことを知つてゐる。だからお前は自分の生活を變へることも、亦自分で意



識しないことに犧牲を拂ふことも出來なかつたし、今も出來ないのだ。だから私は少しもお前を責めはしない。寧ろ私は三十五年の長い間の二人の生活、殊にその前半、お前が母としての天禀の自己犧牲を發揮して、自分の天職と信ずるところを力强く確實に遂行して呉れた事を、愛と感謝とを以て回顧する。お前は私と世界とに、お前が與へ得る凡てを與へた。お前は母としての多くの愛と犧牲を與へた。之がためにお前を尊重せずにはゐられない。併し二人の生活の後半、殊に終りの十五年間我々は離れ〴〵であつた。私は私が間違つてゐるとは思はない。何故なら、私が變つたのは、私自身のためでもなければ、人々の爲でもなく、たゞさうするより外に爲ようがなかつたといふことを知つてゐるからである。」

「私はお前が私について來なかつたからと云つて、決してお前を責めはしない。却つてお前が私に與へて呉れたことに對して、深い感謝と愛とを以て追想してゐるし、また將來も追想するであらう。愛するソーニャよ、さよなら！　お前を愛してゐるレフ・トルストイより。」

トルストイは自分の家出については、此の希望を實施する餘程前から、近しい人には時々洩らしてゐた。例へば一九〇九年八月四日、當時禁じられてゐたトルストイの書物を郵便小包で發送した

爲に内務大臣の命令で二年間ペルム縣に流刑に處せられてゐた彼の助手に恁う云つてゐる。

「私は……私は君には未だ話さなかつたが……私は此處を逃げ出さうと思ふのだ。」

「貴方は何處へお逃げなさる考へですか、レフ・ニコラーエヴィチ？」

「それは分らない、たゞ逃げ出さうと思ふのだ。」

晩年に近づくに從つてトルストイの心には、彼に取つて親しみのない苦しい貴族生活を逃げ出したいと云ふ考へが、だん〳〵募つて行つた。一九一〇年二月彼はキエフ市の或未知の大學生から書面を受取つた。此の書面に於て大學生は、トルストイがヤスナヤ・ポリャーナを去つて、その財産を分配し、一文無しとなつて、町から町を乞食の樣に彷徨ひ歩くやうに奬めてあつた。此の書面に對してトルストイは次のやうな返事を出した。

「君の手紙は私を深く感動させた。君が勸告して呉れたことは實に私の宿命的念願である。が、今日まで私は之を決行することが出來なかつた。それについては種々の原因がある。（併し私が自分をいたはるためでないことだけは斷言して置く）……私は漸次さう云ふ境涯に近づきつゝある。一日々々それに接近しつゝある。」



「君が私に向つて、社會的地位を捨て、資産を擲つて、之を私の死後當然相續權を有する者に分配せよ、と勸告して呉れたことは、既に二十五年も前に實行されてゐる。併し私が周圍の貧困狀態を見ながら、家庭に於て妻や娘と一緒に恐ろしい恥づべき奢侈の生活を續けてゐると云ふ一事は、絶えず、否益々私を苦しめてゐるので、君の勸告の實行に就いて考へない日は一日もない。」

斯くて終にトルストイが長い間の希望を敢然實行すべき時期が到來した。

## 四三　家出の原因と遺書

トルストイをして家出せしむるに到つた原因は何であつたか？　何故にもつと前に家出せず、一九一〇年八十三歳と云ふ高齢に達して始めて家出を斷行したか。

之に對する解答は次の通りである。

一面から云へばヤスナヤ・ポリャーナの貴族生活は年を經るに從ひ、彼に取つて益々苦しくなつて來た。一九〇八年七月三日の日記に恁う書いてゐる。「此のヤスナヤ・ポリャーナの生活は全く汚はしいものである。何處へ行つても恥と苦痛である。」六日を越えて一九〇八年七月九日の日記には

恁う書いてゐる。「一つのことが益々苦しくなつて來た。それは不當な貧窮に苦しんでゐる者があるのに、私の周圍には無分別な奢侈が續けられてゐるといふ不合理である。凡ての事が益々惡くなり、苦しくなるばかりである。それを忘れることも出來なければ、見ないでゐることも出來ない。」

トルストイに取つてその周圍の事情が憎惡すべきものであつたにも拘らず、一九一〇年までヤスナヤ・ポリャーナを去らなかつたのは、さうすることが道德上決して正當とは思へなかつたからである。彼の教義は、共に生活を分つてゐた全ての人に對して極力愛を實現することにあつた。だから妻の如き近い關係の者に對しては猶更のことである。全くトルストイは、その妻が彼を理解せず、彼の後に從はなかつたばかりでなく、却つて彼の教義を公然全ての人の前で非難し、罵倒したのにも拘らず、この愛のために妻を捨てることが出來なかつた。しかも彼は絶えず妻と愛の戰ひを續けた。それは、結局彼の愛が勝利を得て、妻も必ず彼に取つて明瞭な、そして生命よりも貴い眞理を理解するやうになると信じてゐたからである。

然るに一九一〇年の夏以降は此の望みがトルストイの心にだん〳〵と薄らいで行つた。彼の妻は



精神的に少しも彼に近づいてゐなかつたのである。最後の五ケ月は、トルストイに取つて其の生涯中最も苦しい時期で、彼の苦悶は名狀し難いものがあつた。ヤスナヤ・ポリャーナに於ける當時の模樣については、一九一〇年七月十四日妻宛の手紙の中に幾分表はれてゐる。其の手紙の內容は恁うである。

「お前に對する私の心持を云ふと、若い時分からお前を愛してゐた通り、其の後も、いろ〳〵冷める原因があつたにも拘らず、變りなく愛してゐた。現在も愛してゐる。實際愛の冷める原因は色色あつた、——夫婦關係の中止に就いて云つてゐるのではない、そのやうな中止は寧ろ眞の愛の虛僞的表現を排除するものである。その原因の第一は、私が世俗的生活の興味からだん〳〵と遠ざかり、之を嫌ふ心が私の裏に益々高まつて來たことである。然るにお前は世俗的生活を離れることは望みもせず、また出來もしなかつた。それはお前の心に、私を今日の信念に導いた根本觀念がなかつたからである。併しそれは極めて當然なことで、私は決してそれについてお前を責めはしない。」

「第二、(若し私の云ふことがお前の氣に觸つたら宥して呉れ。併し現在私とお前との間に起つてゐることは非常に重大な事柄であるから、忌憚なく言つたり聽いたりしなければならない)。お

前の性質は近頃著しく激し易くなり、暴君的となり、節制を缺いて來た。斯うした性格の現れは、感情そのものをではないが、感情の表現を冷却させずには置かない。之が第二の原因である。」

「第三、最も主なる原因は宿命的なもので、それに對してはお前も私も責任はない。それは私達二人が人生の意義と目的とに就いて全く相反した考へを抱いてゐることである。事實人生に對してお前と私の解釋は萬事が正反對であつた。生活の型態も、人に接する態度も、生活の方法も。例へば財産に就いて、私は罪惡と見做してゐるのに、お前は生活上缺くことの出來ない要件だと考へてゐる。私はお前と離れまいとして、自分に取つては苦痛である生活要件に服してゐた。然るにお前は之を以つて、私がお前の說に讓步したと見做した。斯うしてお前と私との間の誤解は益々昂進するばかりであつた……」

「若しお前が私の以上のやうな生活要件を受け入れないならば、私はお前と別れないと云ふ約束を撤去して、私は出て行く……屹度出て行く。何故なら、今迄のやうな生活をこれ以上續けて行くことは斷じて出來ないから。」

トルストイが此の手紙の終りに述べた言葉で見ると、彼はその妻を眞の愛—宗教的信念をもつ人



が、人を愛する愛—を以つて深く愛してゐる。

「私が若しお前の苦痛を平氣に耐え忍ぶことが出來るならば、或は此のまゝの生活を續けられるかも知れないが、私にはそれが出來ない。昨夜お前は大分興奮して、大變苦しみながら出て行つた。私は寢ようとして横になつた。さうしてお前を想ふどころではない、官能を以つて感じようとした。私は眠られないで、夢にお前の聲を聽き、殆んど夢の中でお前を見た。」

「お前、氣を落ち附けて考へるがいゝ。さうして自分の心の命ずる所に從つて、一切のことに正當な判斷を持つがいゝ。私自身のことに就いて云へば、私としてはあゝ決するより外には仕樣がなかつた。愛する者よ、他人でなく、自分を苦しめるのを止めるがいい。お前は一倍苦悶する性質だから。」

一九一〇年七月二十二日、トルストイの生涯に於て頗る重要な事件が起つた。これがために彼の家庭生活は益々苦しくなつた。此の日彼は遺書を書いて、自分が死んだ場合の指圖を與へた。

「全ての私の文學上の作品、今日までに書いたもの、またこれから死ぬまでに書くもの、既に出版されたもの、未だ出版されないもの、小說、演劇及び其の他の形式のもの、飜譯もの、改作した

もの、日記、個人的書簡、スケッチ、隨筆や覺書、一言にして云へば私の死ぬまでに私の書いた一切の作品、それが何地に在らうと誰の所に保管されてゐやうと、或は原稿たると印刷されたものたるとを問はない。是等一切の私の作品の著作權も原稿も、私の死後に殘される書類も、例外なしに凡て私の娘アレキサンドラ・リウォウナ・トルスタヤの所有として遺すものである。」

トルストイが此の遺書を書いた目的は、彼の死後、彼の作品の所有權はその後嗣者の誰にも屬せず、何人でも希望の者が誰の許可も受けずに其の版權を得らるゝやうにする爲であつた。然し當時のロシヤの法律では、直接社會全體に一切の自分の作品を讓與することは出來ないことになつてゐた。それ故にトルストイは末の娘宛に遺書を書いたのである。此の娘は彼の家族の中で、彼の著述を誰の所有にもしてはならぬ、と云ふ父の意旨を確實に遂行し得る者であつたし、もう一つには彼の生存中出版出來なかつた作品は、彼の死後チョルトコフの編輯の下に初版を出版することにしてあつたからでもある。(トルストイは此のチョルトコフに、其の原稿の整理と出版準備を遺言した)。此の第一版が出た後は、其の著作權を捨てゝ、彼の著述を誰にでも希望の者に、自由に出版する權利を與へるやう、娘に遺言した。斯樣にしてトルストイの後嗣者はその作品の專有權を失つたので



ある。

## 四四　家出の顚末

前述の如く、トルストイにはその家庭生活が非常に苦痛であつた。殊に其の晩年は一層甚しかつたが、自分が家庭を捨てゝかまわないと云ふ考へのつくまでは、家庭に留まつてゐた。然し愈〻彼がその家庭に必要がなくなり、却つて害があると考へられる時機が來た。その時始めて彼は、もうこれ以上ヤスヤナ・ポリャーナに留まる必要がないと思つたので、家出を決心した。

一九一〇年十月二十一日トルストイの舊友で同主義者のトゥーラ縣下の農夫ノウィコフが彼を訪問した。此の時の狀況についてノウィコフの話によると、話の最中突然トルストイから斯う訊かれた。

「私は君の村へは一度も行かなかつたらうか?」

「貴方はお出で下さると度々お約束なさつたけれども、忘れてお終ひになつた。」

と私が答へると、トルストイはニコ〳〵しながら恁う云つた。

「それではよろしい。此の頃は閑暇だから、何時でも約束を果せるよ。」

が、私は之を冗談だと思つたから恁う云つた。

「ですが二年前に私が差上げた案内狀に『私は行き度いと思つてゐても、どうしても行かれさうもない』と、返事して下さつたことを御存知ですか？　あれ以來私には、どうしてお出でにならないのか、今日まで不可解のまゝになつてゐます。」と答へた。

「あの時は」と冗談交りにトルストイは遮つた。「やかましい時分だつた。が、近頃は憲法政治だ。私は家族の者と分離したよ。或は……君達の方では之を何と云ふかね？――と突然彼は私に訊いた――やつぱり家庭を離れたと云ふだらう。近頃私は此處では餘計者なんだ。丁度君達の所の年寄りが私の年頃に達すると、矢張り餘計者になるやうにさ。だがその代り此の頃は全く閑暇なのだ。」

私が、冗談だと思つて、話をいゝ加減に聞いてゐるのが解つたと見えて、急に彼は話の調子を變へて、眞面目になつて云ひ出した。

「さうだよ、本當にさうだ。私は君には打開けた話をするが、私は此の家では死なないよ。私は、誰も私を知つてゐる人の居ない未知の所へ家出をしようと決めたんだ。都合によつたら、いきなり



君の家へ行つて、死なうかとも思つてる……」

其の後トルストイはノウィコフに向つて恁う云つてゐる。

「私は自分のことは云ふまいと思つてゐたが、私がどうしてあの時も、また常も君の所へ行かなかつたか、それを君に打明けなかつたのはよくないと、今になつて解つたよ。私は君に打明けた通り、此の家に居るのは地獄に居るやうに苦しい。で、何處か森の中へ逃げ出して行つて、番人小屋にでも住むか、田舍の貧しい百姓の許にでも行つて手傳ひでもしたいと、常々思ひもし希望もしてゐる。が、神は私に家族と斷然離別する勇氣を與へて呉れないのだ。私の弱みか、それとも罪であるかも知れないが、私には私一個の滿足のために、假令家族の者でも、他人を苦しめることは出來ない。……私は私一個のために家出せずに、十字架(苦痛)を忍んだ。家族は私を金錢に見積つて、その點から、私が家庭を破壞するのだと云つてゐる。實際―彼は泣き出さないばかりに云つた―愛人をでも取り扱ふやうに、御飯が冷めないやう、ルバーシュカが綺麗になつてゐるやう、此のズボン下(膝の邊を指で示しながら)が綺麗であるやうにと、家族は心配して呉れた。が、私の精神生活に關しては、サアシャ(末女アレキサンドラ・リヴォウナ)の外には誰一人理解して呉れなかつた

……私は靜かに死ぬ支度をしたかつた。だのに家族の者は私を金錢に見積つてゐた……家出をしよう、必ず家出をしよう――」と、殆んど私の方を見ないで、彼は微かな聲で云つた。

熱心に云ひ續けた後、一寸の間を置いてから―「許して吳れ給へ、私は餘り喋り過ぎた。併し、私を心から理解して貰ひ度い。私を誤解して貰ひ度くない。もう二た言云はして吳れ。私は君に、今閑暇だと言つたが、それは本當だ。私は決して冗談に云つてるのではない。必ず近くまた逢はふよ。君のお宅で、君のお家で。―トルストイは私が不審がつてゐるのを認めて急いで附け加へた。―私は今宣言こそしないが、心では全く家族から離れて居る。君達がやるやうに―と彼は一寸冗談を挿んで―私一人のためになら、私は之を爲もしなかつたし、出來もしなかつた。が、今は私のことで家族の間に論爭の起ることが少くなつたし、家族の者に取つても都合がよいと思はれる。」

それから三日を經た十月二十四日、トルストイはノウィコフに次のやうな手紙を寄越した。「先日お歸り際に話して置いた件に關連して、更に次のことをお願ひし度い。若し實際私が君の處へ出掛けるとしたら、御家族に長く迷惑をかけないやうに、どんなに小さいのでもよいから、獨立した暖かい家を君の村で探しては戴けないだらうか。なほ何かの都合で君宛に電報を打つ場合には、本



名でなく、テ、ニコラエフとするから承知して貰ひ度い。御返事を待つてゐます。レフ・トルストイ。」

「追申、此のことは一切君だけ御承知のことに御願ひします。エル・テ。」

然るに家出の直ぐ前に、トルストイはノウィコフの所に轉居する計畫を放棄した。それはヤスナヤ・ポリャーナからあまりに近過ぎたからである。その村はトゥーラ驛から鐵道で二十五露里の處に在つた。

トルストイがヤスナヤ・ポリャーナを拔け出す最後の決定をしたのは、一九一〇年十月二十八日午前四時であつた。家出の覺悟を定めて、トルストイは其の妻宛に次のやうな手紙を書いた。

「私の出發はお前を悲しませるであらう。氣の毒ではあるが、それより外に爲ようがなかつたことを理解して貰ひ度い、信じて貰ひ度い。家庭に於ける私の境遇は愈々堪えられなくなつた。私は、外のことは兎に角、今までのやうな贅澤な生活を續けることは出來ない。だから通常私の年配に達した年寄がよくやるやうに、世俗的生活を捨てゝ孤獨と靜寂の中に自分の餘生を送り度い。どうかこのことを理解して、私の居所が分つても、私の後を追つて來て吳れるな。お前が來て吳れた

ところで、それはお前と私の立場を惡くするだけで、それがために私は自分の決心を變へはしない。」

「私はお前が私と一緒に四十八年の間謹直な生活をして呉れたことに對して深く感謝する。どうか私がお前に對して行つた凡ての罪を宥して呉れ。私もお前が私に對して行つた過失を心から赦してゐる。……私の家出によつてお前に與へられる新らしい境遇に早く馴れるやうに努めて、私に惡い感情を持たない樣にして呉れ、若し何か私に傳へ度いことがあつたら、サアシャに云ひなさい。彼女は私の居所を承知して居るから、必要があれば私に云ふて寄越すであらう。併し私の居所に就いては、誰にも知らさないと云ふ固い約束がしてあるから、彼女はそれを明かすことは出來ない。

レフ・トルストイ。」

此の手紙を書いてから、トルストイは階下に降りて來て、ドゥシャン・マコウィーツキイ(此の人はトルストイに心服してゐた醫師であり、また彼の親友であつて、六年もヤスナヤ・ポリャーナに住み、土地の農民の醫療に從事してゐた人である)を搖り起した。これについてマコウィーツキイは恁う語つてゐる。



「十月二十八日の朝トルストイは私を起しに來た。見れば寢卷姿で、素足に上靴を突かけ、顏は苦惱に疲れ、興奮して、決心の色を何處かに浮べてゐた。私に向つて、『私は愈々家出を決行する。君は私と一緒に行きますか？　私は二階に居るから後から來なさい。唯妻を起さないやうに氣を附けて呉れ。荷物は要るものだけにして、澤山は持つて行きますまい。三日の後にはサアシャが後を追つて來ますから、必要な物があれば持つて來るでせう。』

それからトルストイは娘のサアシャ(アレクサンドラ・リヴォウナ)を起した。彼女は仲のよい友達、フェオクリトワと一緒に寢てゐた。後になつてサアシャは恁う云つた。

「父は手に蠟燭を持つて私の前に立つてゐた。私達二人は父の顏を見て驚いた。その顏は何だか非常に蹙かしく、同時に固い決意を表してゐた。私達は直ぐ二階へ駈け上つて、荷造りを手傳つた。父は人を起すのを恐ろしく氣づかつてゐた。その動作や言葉には嘗ならない決心が籠つてゐた。最後の瞬間まで、何ものも飜へさせることの出來ない、堅い決心を示してゐた。父が持つて行かうとした荷物は、必要缺くべからざるもので、成るべく粗末なものに限り、贅澤なものは何と云つても容れなかつた。懷中電燈を持つて行かせるのにもやつと承諾させた位で、殆んど無理にその

ポケツトに突込んだやうな始末であつた。父は、誰か眼を覺ましはしないかとそればかり氣遣つてゐた……」

「五時過ぎにやつと支度が出來たので—トルストイ自身その日記に書いてゐる—私は厩へ馬具の用意をさせる爲に外へ出た。マコウィーツキイとサアシャと其の友達のフェオクリトワの三人は荷造りをしてゐる。夜である。私は眼を見張つた。翌屋への道を間違へて森の中に入つた。擦過傷やら、樹木に突き當るやら、轉がるやら、帽子を落すやら、散々な目に逢つた。無理に其處から這ひ出して家へ引返し、帽子を取つた。今度はランプを持つて、漸く厩に着いて、馬具の用意を命じた。」

「荷造りが濟んだので—と、マコウィーツキイは物語る—私達(サアシャと其の仲良しのフェオクリトワと私)は荷物を厩に運んだ、厩で乘込んで直ぐ出立が出來るやうに。家からではソフィヤ夫人が眼を覺ます恐れがあつたからだ。あたりはじめ〳〵してゐた。途は泥濘つてゐた。私達はやつと重い荷物を運んで行つた。中程まで行つた時トルストイが燈火を持つて迎へに來た。トルストイは帽子を失くした話をした。私はポケツトに彼の別な帽子を持つてゐた。泥濘路を辛つと馬車の入れて



ある物置まで來て見ると、馭者はもう馬車の支度を終へてゐた。トルストイは自分で馭者の手傳ひをした。」

「物置の前で—とブルガーコフは書いてゐる—古い四輪馬車に二頭の馬を駕けてゐた馭者アドリアンの手は震へてゐた。顏からは汗が流れてゐた。トルストイは氣を揉みながら馭者に手傳つて、馬に手綱を附けたりした。兎に角トルストイは出立を非常に急いでゐた。まだ暗かつたので、郵便夫フィーリャは火把に火を點けて、自分も馬に乘つて見送りの支度をした。馬車は五時半、モスクワ・クウルスカヤ鐵道のシチェキノ驛へ向けて邸内を出た。ヤスナヤ・ポリャーナから七露里の處である。」

## 四五　修道院訪問

トルストイはシャモルディノ修道院を訪れて妹に逢ふことにした。それには汽車でコゼリスクと云ふ所まで行かねばならなかつた。彼の乘込んだ列車はゴルバチェフまで行く貨物列車で、僅かに二輛丈三等客車が連結してあつて、それが滿員であつた。客車の座席に着いてゐた者は殆んど全部煙

草を喫つてゐたので、トルストイは新鮮な空氣を呼吸するために、屢々昇降口に出た。此處で彼は風を引いたものと見える。

コゼリスク驛からシャモルディノまでは、十八露里の間馬に乘らなければならなかつた。時刻が遲かつたのでトルストイは、コゼリスク驛から五露里の所にあつたオプチナ修道院に行つて泊ることにした。此時のトルストイの修道院到着の狀況については、修道士ミハイルが恁う語つてゐる。

「伯爵が到着したのは二十八日木曜の午後六時で、其の晩泊まつて、翌日午後四時まで滯在され、それからシャモルディノ村に行かれた。お着きになると直ぐ私に恁う尋ねられた。『突然來まして御迷惑かも知れません、私はレフ・トルストイで、教會から破門された者です。今晩お世話を願つて、長老達にも御目に掛り、それから妹を訪ねたいと思ひます。』九時頃茶を召上つて、寢に就かれた……到着した時は何處か沈痛な樣子で、顏には悲壯な色が浮び、言葉など頗る謙遜で、命令するやうな調子は全くなかつた……臥床に這入つてからも、伯爵は机と蠟燭を要求して、何だかお書きになつてゐられた。お寢みの前に又茶を召上つた。」

此の地で彼は最後の論文—死刑に就いての手紙（『實際の手段』）を書き終へた。



夜中に壁一重隔たつた隣室で酷く婦人の泣いてゐるのを聞きつけた。で、彼はマコウィーツキイを二度もやつてその事情を訊かせた。此の婦人はモスクワで夫を失ひ、子供を連れて、此の修道院に修道士となつてゐる兄弟を訪ねて來た。然るに其の兄弟は此の婦人が着く數日前に死去したと云ふのである。トルストイは當時モスクワに居た長子セルゲイの妻に宛て、紹介の手紙を書いてやつた。

『伯爵はお立ちになる時に—と、ミハイル修道士は續けて話した—恁う私に尋ねられた。

「部屋代は如何程ですか？」

「此處はお思召で戴くのです。」

「三留で宜しいでせうか？」

「充分です。」

「本當に云ふて下さい。少くはありませんか？」

トルストイは徒歩で行かれた。川を渡つてから始めて馬に乘られた。御一行が出立の際渡船場の所へ修道士が大勢集まつて來て、有名なトルストイを見ようとした……私達の所にある宿帳には次のやうに書かれた。

「レフ・トルストイ、歡待を謝す。」』

オプチナ修道院から出て、トルストイはシャモルディノ修道院に行つた。其の間は十三露里ある。彼が到着したのは十月二十九日の晩方六時半であつた。

『兄は—とトルストイの妹マリヤ修道女は話した—全く突然に來ました。「久しく逢はなかつたね—彼は私に申しました—が、今度はゆつくりお前の側に居るよ。」さうして私の所に泊つて居た娘オボレンスカヤ公爵夫人に向つて、

「リザニカ、お前私を案内して、修道院の工場や活版所や僧房などを見せて呉れ……」

兄は總てに興味をもつて、なんでも見ようとしました。それから、私は後で氣が附いたのでしたが、シャモルディノ村へ行つて、土地の百姓アブラムに話しかけて、彼に大きな農家で空いてゐるのを一軒探して呉れと頼んださうです。アブラムは彼に尋ねた。

「百姓家なんぞを何になさるんです? お住居になさるのですか?」

「さうだ、其所へ轉居しようと思ふのだ。」と、トルストイは答へた。

オプチナ修道院に就いては私に恁う話してゐました。



「オプチナ修道院はなんて好い所だらう。教會へ行けとさへ云はなければ、喜んで住みたいね。どんな仕事でもするよ。」

「兄は此の修道院に居る間は非常に修道女達にやさしくしてゐましたので、彼の死を聞いた時には皆泣きました……」』

## 四六　發病と終焉

十月三十日の晩、父から電報で呼ばれた娘サアシャ(アレキサンドラ・リウォウナ)はシャモルディノに着いた。娘の話によると、家の者も父がシャモルディノに向つたことを察してゐるから、母のソフィヤが來るかも知れないといふことであつた。之がためにトルストイはシャモルディノに滯在することを斷念して、もつと遠方へ行くことを餘儀なくされた。で、一先づノヴォチェルカツスクに行つて、此所で彼の姪の夫デニセンコの許に落着かうとした。此の人は裁判所の判事をして居たから、此の人の手で何とか外國行きの旅券を得て、若し成功したら先づブルガリヤに行く考であつた。それはマコウィーツキイが同地に於けるトルストイの或同主義者を信頼してゐたからである。が、若

し外國行きの旅券が手に入らない時は、高架索に出て、其處で一寸した停車場のある村に小さな家を借り受けて、住まうと決心した。

十月三十一日午前四時シャモルディノを出て、コゼリスク停車場まで十八露里を馬で行き、午前八時漸く汽車に乘つた。最初のうちは誠に工合が良かつたが、午後の三時を過ぎると、トルストイは酷い惡寒を感じて、いくら何を着せても暖まらない。五時體溫を計つて見ると三十八度一分もあつて、まだ益々昇る模樣であつた。已むを得ず一行は次の大きい停車場に着いたら下車することにした。それがアスターポヴォと云ふ、リャザン・ウラル鐵道の一驛で、此處へ著いたのが午後の六時三十五分であつた。マコウィーツキイは下車して、驛長のオゾリンに事情を告げて援助を請ふた。驛長は、トルストイが列車中で發病し、重態であると云ふことを聞いて、取敢へず最初は自宅の一室を、後には更にもう一つの部屋も明けて、トルストイと其の同行者のために提供した。

トルストイは衰弱が酷いので、マコウィーツキイと驛長とが支へて、やつと部屋まで連れ込んだ始末である。部屋に還入ると、早速旅裝を解いて臥床に就かせた。晩遲くなつて體溫は三十九度八分に昇り、咳が加はり、鼻が詰り、足に疼痛を感じ、脈搏が不齊になつた。其の夜は勿論彼は熟睡



出來なかつた。明け方體溫は三十六度二分に下つたが、衰弱が激しいので、終日臥床に就いて居た。併し意識は明瞭であつたので、娘に神についての思想を筆記させ、其の後で年長の子供達宛の手紙を筆記させた。夕方又々惡寒が起り、體溫は三十九度一分に達し、呼吸の際左脇の痛みを訴へ出した。マコウィーツキイは肺炎だと診斷した。その翌日更に診斷の結果左肺下端の炎症と決定した。

十一月二日の朝、トルストイが逢ひ度いと云ふてゐたチュルトコフが、助手セルゲエンコを伴れて到着した。彼も勿論驛長オゾリンの宅に泊つた。

此の日トルストイの長子セルゲイも來著し、更に臨時列車で夫人ソフィヤ・アンドレエウナも其他の家族も著いた。併し相談の結果長子のセルゲイと長女のタチヤナ二名の外は、病人を興奮させると良くないと云ふので、トルストイに逢はせないことにした。で、他の人達は停車場に在つた一等客車に留まつてゐた。

十一月三日、娘サアシャの懇請によつて、ドクトル、ニキイチンとトルストイの友人數名が來た。驛長オゾリンはトルストイの所へ人數が益々殖へるので、遂に家全部を提供することにして、

自分達は番人小屋に引移つた。此の小屋が小さくて、家族の者が辛つと這入ると云ふ始末なので、驛長自身は夜になると、行き當りばつたりに何處へでも這入つた。（此の篤志家も其の後神經病に罹り、一九一三年遂に永眠した。）

十一月三日は可なり平靜に過ぎた。此の日トルストイは最後の日記を書いた。「これが私のブラヾである」—トルストイはその死の近づいたのを感じたものらしい—「一切は他人と、特に自分の幸福のためである。」其の震へた手でかゝれた此の嚴肅な莊重な言葉でトルストイの偉大なる宗教的著述（日記）は終つてゐる。

近しい人達の行屆いた看護を受けながら、トルストイはなほ、人類の大多數である勞農民衆が受け得ない生活の恩惠を自分が受けてゐると云ふ意識のために苦悶してゐた。チョルトコフは語つてゐる—「ある時トルストイは臥床の上に仰向きになつて、力のない悲しい聲をあげて、『百姓は、百姓の死に際は斯うではない！』と云つた。その時私は聞いて見た。どうなすつたのですか？ 大方先日訪問した村の病人で、死に頻してゐた百姓のことでも想ひ出したのですか？『さうださうだ—彼は涙の中から答へた—斯うして私は 惡いことを爲ながら死なゝければならないらしい。』否、否—私



は打消した—これは決して惡いことではありません。貴方の周圍に居る者の心づくしなのです。貴方は罪から逃れようとして、貴方の出來得る丈のことを十分なさつたのです。」

「十一月三日の晩方トルストイの樣子は惡くなつた—とニキイチン博士は話した—體溫は高まつて、譫語が始まつた。彼は熱に浮かされてゐた時、硝子戸の外から夫人が覗いてゐるやうに見えたのか、『あすこから彼女が覗いてゐる』と叫んだ。私達が硝子戸に布を掛けたら、やつと落着いた。譫語は宵の中一杯間を置いては續いた。が、夜になつて益々酷くなつた。譫語を言ひながら、何やら筆記させ度いやうな樣子であつたが、舌が廻はらないので、言葉が切れ〴〵で連絡がなかつた。それでもセルゲエンコはペンを取つて書いて見た。トルストイは之を知つたのか、書いたものを讀めと要求した。間違つたことを書取られはしないかと氣遣つたらしい。結局私達は彼がチョルトコフに賴んで『讀書の輪』を聲高く讀み聞かせてくれと要求してゐることに氣が附いた。トルストイはこれを聞いて、落着いたのかすやすやと眠つた。」

「四日の朝トルストイは眼を醒ましたが、衰弱がなか〳〵酷い。心臟の働きも惡くなつて、唇、鼻、爪など青味を帶びて來た。脈搏は恐ろしく不齊になつた……トルストイはしばしば自ら死のこ

とを口にした。『死ぬ時が來た。死は誠に結構である！』然し其の間にも周圍の者に氣を留めて、體溫はどの位あるか、炎衝は何うか、などと聞いた。日中はちよい〳〵眠つた。譫語も云つた。話しは少なかつた。」

「トルストイは患つてゐる間何遍も酷い苦痛に襲はれた。—とチョルトコフは書いてゐる—その都度彼は痙攣的に起き上つて坐り込み、兩足を寢臺からぶら下げて見たり、悶掻いたり、苦痛を訴へたりした。が、その中にまた枕の上に俯伏して、逃れ難い試練をぢつと從順にしのんだ。想ふに、彼は漸次甚しくなつてゆく肉體の苦痛を、我慢强く不平も云はずに堪へるのが、今の場合彼の義務であると意識したのであらう。彼が自分を常によく統御して來た人であることから考へると、前述の義務に對しても矢張り誠實な、統制のある底力を以て臨んだに相違ない。それは彼の全生涯を通じて、一旦自分の義務と認めたことの實行に際して、何時でも心がけてゐたことである。十一月四日の朝、眼を覺まして、側に私の居るのに氣がついて、苦惱に堪へられないやうな樣子をしながら、何故か大層やさしく恁う云つた。『私は多分死ぬかも知れぬ!? が、ことによると、いや、さうぢやない。もう少し努力しなければならない。』さうして後は涙に咽んだ。」



十一月四日から五日にかけての夜、トルストイは全く熱に浮かされ通しで、半意識狀態を續けた。「幾度か私を側へ呼び寄せて—と、ニキイチン博士は追想してゐる—自分の言ふことを書取つて呉れと云ふのである。併し私は、彼の舌が拘攣つて、言葉がさつぱり解らないのが、氣の毒で聞いてゐられなかつた。聞き取れるのは最初の言葉丈で、後は舌がつれるので、言葉は切れ〴〵になつて、少しも連絡がなかつた。」

「五日の朝私が日向で彼の顏を見ると、全く變つてゐた。頰がこけて兩眼は落凹み、青味が多くなり、舌や唇が渴き、脈搏は惡くなり、吃逆と呼吸とがだん〳〵酷くなつた。心臟の伸縮が不規則になり始めた。要するに各部の機能が著しく衰弱した樣に見えた……此の日彼は長女タチヤナに云ふた、『もうこれが最後だ。何も……』

そのうちにアスターポヴォ停車場には彼に關係のない人が大變に殖えた。各新聞社の通信員が三十人以上に上り、それからリャザン縣知事、土地の警察署長と其の護衛、リャザン・ウラル鐵道線憲兵司令官、同鐵道長官等が來た。鐵道長官は機關車を病人の居る家の近くに通さないこと、列車は發着共に汽笛を微かに鳴らすこと、などいろ〳〵病人に障りのない樣に指圖をした。

十一月五日夜、宗務院の依頼によつて、オプチナ修道院の老僧ワルソノフィが到著し、トルストイを再び「教會の懐に歸らせるため」、頻りに面會を求めた。併しトルストイの親近者は老僧を病人に近づかせなかつた。その前日、十一月四日、ペテルブルグの大僧正アントニイからトルストイに宛てゝ次のやうな電報が屆いた。

「私は、貴方が教會と關係を絶たれた最初から、どうか神が貴方を教會に歸さるゝやう絶えず祈り、現在も祈つてゐる。事によると神は近く貴方を自分の裁判（死）に召さるゝかも知れない。それ故私は此の際特に、貴方が教會と和睦して、ロシヤの正教徒となられるやう祈つて止まない。願はくは神は貴方に祝福と保護とを賜はんことを。」

此の電報は、病人に無益な苦惱をさせまい、と云ふ心遣ひから、トルストイには傳へられなかつた。たとへ此の電報をトルストイに讀ませたとしても、恐らく何の効果もなかつたに相違ない。彼の現在の宗教的信念と正教會との絶縁は、頑強な、さうして苦しい努力を何年か續けた結果である。だからその精神生活と全く沒交渉な人々の勸告位で彼を動かすことは不可能であつた。

トルストイは其の最後まで正教會との關係を變へないで、「教會の懐」にはたうとう歸らなかつ



た。それと同樣に眼の前に死を控へて居ながら、醫學に對する平素の考へを變へなかつた。平常彼は醫學を少しも信用しないで、人體の機能について人に知れてゐることは、まだ知れない部分に比ぶれば、實に何百分の一にも當らない、だから病人が重態に陷つて了へば、醫學は之を癒す力はない、と云つてゐた。實際醫學なんて要のないものである。何故なれば人間の眞の生活は肉體の生活に關係のない精神の生活であるから。故に死は消滅ではなく、新生活への轉換に外ならない。トルストイは醫學に對する斯うした見解を死に至るまで固持してゐたから、表面醫者のすることには（親近者の心遣ひを辱しめないやうに）反對はしなかつたが、心の中ではこれを「愚なこと」、「全く無益なこと」と考へてゐた。

大勢の醫者の診察や處置を彼は煩しく思つた。それは死に對する心の準備の妨害となるからであつた。彼はもう死を覺悟してゐたから、此の場合彼の最大の本分は死の準備であつた。トルストイは生命に對する宗教的な考へから、寧ろ病氣はその自然の經過に委して置く方がよいと思つてゐたので、時々はこれを周圍の人達にも述べた。例へば醫者のニキイチンが、此の當時トルストイを苦しめてゐた吃逆を鎮めるために、彼にクリズマ液を勸めると、トルストイは何時も斯う答へた。

「何事も神のお思召だ。」

トルストイは全く平氣に死を待つてゐた。「死ぬ數日前—チョルトコフは書いてゐる—私一人彼の側に居た時、彼は私に、此の病氣で死ぬかも知れない、と云つたが、その態度は全く平然たるものであつた。却つて滿足した調子を言葉に表してゐた。眼には涙が泌んではゐたが、苦惱や恐怖の涙ではなく、平和な感激の涙であつた。又ある夜中に私一人彼の側に居た時、彼は大變長い間注意深い、やさしみのある視線を私に注いで居た。私は『如何ですか？　今日はいくらかお樂のやうですが』と彼に聞いた。」

「彼は何かムニヤ〳〵口籠つたやうだつたが、私には何だかさつぱり解らなかつた。けれどもその聲の感動すべき、子供らしい表現や、その眼に溢れた感激の涙から察するに、彼は丈夫になることではなく、寧ろその死にだん〴〵近づいてゐることを、晴々しい、明るい感じを以て述べてゐるものゝやうであつた。」

「トルストイはその最後に臨んで—とチョルトコフは續けていつて居る—私達から見れば、その肉體の苦痛が可なり酷かつたやうであるが、矢張り內的、精神的生活を續けてゐたと云ふことが、



時々彼の發する切れ〴〵の言葉から察せられる。例へば最終の一晝夜次のやうなことを囁いてゐた。『さあ、これでよし。』『何も彼も單純だ、結構だ。』『結構だ……え、え……』彼の苦しさうな息づかひ、それに伴ふ吃逆や、惱ましい呻吟などから考へて見ると、彼の肉體は衰弱し過ぎてゐて、その意識を十分活動させて滿足や幸福を味はせる力がもう失せてゐる時に、彼はこんなことを云つたのである。」

「彼が息を引取る前晩、私は一人彼の傍に居た。彼は仰向になつてゐて、呼吸は困難であつた。想ふに彼は此の時にも未だ考へ續けて居たと見える—突然聲高く次のやうに叫んだ。

『私は絕えず……自己の表現を……表現はもう澤山だ……これで全部だ。』

（トルストイは人生を肉體で制限された神性の表現だと見てゐた。故に人が死ぬ時は肉體の中に縛られたる精神が其の制限を脫するのだと敎へてゐた。）

十一月六日午後二時頃、トルストイの側に其の娘達丈が居た時、彼は突然寢臺の上に起上つて、大きな、而かもはつきりした聲で次のやうに云つた。

「只一つお前達に覺えて置いて貰ひ度いことがある。世の中には、此のレフ・トルストイの外にど

れ丈の人が有るか知れない。然るにお前達は只レフ一人のこと丈を騒いでゐる。」

「それから彼は—とニキイチンは語つてゐる—精力激發のために全く力を失つて、ぱつたり床の上に倒れた。と同時に全身蒼白めて、體溫は冷却し、脈搏は絶えた。勿論周圍の者は、彼が死ぬのだと思つた。ところが興奮劑と酸素吸入のために失神狀態を脱して、トルストイは眼を開いた。してまたすや〳〵眠りに入つた。」

「十一月七日午前二時頃脈搏衰へ、呼吸微弱となつた。心臓が著しく衰へたので、まわりの者はソフィヤ夫人を呼んだ。夫人はウソフに支へられて入つて來て、病人の側に近寄つて、其の額に接吻し、十字を切つて何ごとか囁き始めた。だん〳〵彼女の聲が興奮して來るので、我々は夫人を隣室へ連れ出した。」

「其のうちに病人の心臓の作用はだん〳〵と弱まり、呼吸の回數が減り、益々微弱になつた。附添の者は、未だ彼に意識があるかどうかを試めさうと云ふので、マコウィーツキイが水と葡萄酒を入れたコツプをトルストイの口に附けて、『レフ・ニコラーエウィチ、御口を潤しなさい！』と力を入れて叫んだ。トルストイは兩眼を開けて、ゴクリと一呑み飲んだ。私達は只默つてその枕頭に立



ち並んで、其の微かな呼吸に注意の耳を傾けた……」

「この日(十一月七日新暦二十日)朝五時を過ぎると脈が全く微弱となつたので、家に居た者を全部呼び集めた。脈は殆んど感じなくなり、呼吸は益〻回數が減つた。ソフィヤ夫人は枕頭に廻つて十字を切り、祈禱を耳語いた。此の時トルストイは最後の吐息を一つ大きくして、其まゝ息絶えた。」

「トルストイの死は—とチョルトコフは書いてゐる—實に安らかで靜かであつた。側に居た私など安和な感じに打たれた位である。重苦しい息づかひの幾時間かの後に、呼吸は急に弱く輕くなつた。數分經つとその輕い呼吸も絶えて了つた。次いで全き靜肅の瞬間が來た。何の努力も、何の鬪爭もない。と、やがて深い、長い、最後の吐息が辛つと聞へた……」

## 四七　「綠の杖」宿願成就

遺族の者は葬儀については、トルストイが存命中云つてゐた通り、教會の式によらないことに定めた。そのことに就いては、彼は度々其の日記に書いてゐる。例へば一九〇八年八月十一日、彼は非常に衰弱を感じて死ぬかも知れないと思つて、次のやうに口述を筆記させた。

「くだらない事ではあるが、私の死後に實行して貰ひ度いことについて、玆に一つ二つ述べて置きたい……これは極くつまらない事であるが、私の遺骸を地下に埋葬するに當つては儀式と名のつくことは全然廢されたい。木製の棺に納めて、誰でも希望の者が擔ぐなり運般するなりして、谷の向ふ側、「綠の杖」の埋まつてゐるザカズ（禁制の意）に葬つて貰ひたい。」

ザカズと云ふのはヤスナヤ・ポリャーナの森の一部で、トルストイの家から餘り遠くはない。「綠の杖」と云ふのはトルストイ始め其の兄弟達が未だ子供だつた時分に、トルストイよりも五つ年上で、非常な天才だつた長兄ニコレンカが、その兄弟達に話したお伽噺である。此の噺についてトルストイは次のやうに物語つた。

「私達がみんな未だ小さくて、私が五才、ミイーテンカが六才、セリョジャが七才であつた時に、ニコレンカが俺はある祕密を握つてゐると云ひ出した。若し此の祕密を解くならば凡ての人を幸福にすることが出來る。其の時人々は何の病もなく、何の不幸もなく、人々互に憤りを抱かず、相愛して「蟻の同志」となることが出來ると云ふのである。此の蟻の同志と云ふのは、ニコレンカが聞いて覺えたのか、それとも本で讀んだのか、何れにしてもモラヴィアの同志（この宗教的結社をムラヴェ



イ（蟻）と間違へて蟻の同志と云つたのであらう。）のことらしい。が、私達の言葉では蟻の同志と云ふのであつた。私は蟻塚の蟻を聯想して、このムラヴェイ（蟻）といふ言葉が特に氣に入つたのを記憶してゐる。私達は「蟻ごつこ」と云ふ遊戯をさへ考へ出した。此の遊戯は椅子を何脚か箱のやうに並べて、上から布を垂らして、其の下の暗い所に、ぴたりと堅くくつつき合つて坐るのである。私は此の遊戯で愛とか同情とかの心持がよく解るやうな氣がして、此の遊戯が好きであつた。」

「蟻の同志は私達には明白であつたが、その奥義は、人々が不幸を知らず、決して爭ひをせず、人を怒らず、常に幸福であるやうにするのには、どうしたらよいかと云ふことについての祕密なのである。此の祕密は、ニコレンカの説明するところによれば、「綠の杖」に書き附けられてあるといふのである。そして此の杖は古くからザカズの谷間のはづれの道端に埋められてあるといふ。で、私はもし私の死骸も何處かに埋める必要があつたら、ニコレンカの記念のために、その「綠の杖」の場所に私を埋めるやうに願つた。」

「上から布を垂らした二脚の椅子の下だけではなく、天の大空の下で、全世界の人類を、睦じく、ぴつたりと相寄らしめようと云ふ、大規模な蟻の同志の理想が、其の時私の念頭に刻まれた。あの

當時私は、人々の間の邪惡は悉く滅ばされて、人々には大なる幸福が與へられると云ふことの書いてあるといふ綠の杖は實際在るものと信じてゐた。それと同樣に現在も、此の眞理は必ず實在する。此の眞理が人々に明かされたら、その約束するところのものは必ず人々に與へられると堅く信じてゐる。」

遺骸を載せた特別仕立の汽車がザセカ(ヤスナヤ・ポリャーナに一番近い停車場)に到着したのは、十一月九日の朝八時頃であつた。ザセカ驛からヤスナヤ・ポリャーナまでは四露里(凡そ我が一里)ある。此の間をヤスナヤ・ポリャーナの百姓達が綠の樅の葉で敷詰めてあつた。トルストイに最後の義務を盡さうとする人々が、モスクワやトゥーラや其の他の地方から、續々ザセカに詰めかけて來た。就中最も多かつたのは若い學生達であつた。

遺骸をおさめた棺は、停車場からヤスナヤ・ポリャーナまで、故人の親友、土地の百姓、遠くから來た人達によつて運ばれた。棺が汽車から下ろされると、群集は脫帽した。「永遠の記憶」と云ふ告別の歌がどこからともなく響き出して、行列は動き出した。先頭にはヤスナヤ・ポリャーナの百姓達が、「敬愛するレフ・ニコラーエヴィチよ、汝の善行についての記憶は我々孤兒となつたヤスナヤ



ポリャーナの農民の間に、堅く記憶されて永久に殘るであらう。」と銘記した白い布を、二本の竿に結び附けたのを押し立てゝ進んだ。其の後からは、隣接二ケ村の農民達が花輪を持つて續いた。

墓地は故人の遺言した場所にヤスナヤ・ポリャーナの農民達によつて用意されてあつた。「永遠の記憶」に送られて、棺が墓地に著いた時、故人の友人スルレルジーツキイの提議によつて、一同跪づいてゐる間に、棺は靜かに墓穴に下ろされた。深い靜肅の瞬間が續いた。故人の遺志を尊重して誰も此の場で弔辭を述べる者はなかつた。只棺が地下深く下ろされる時に、青年達の組織してゐた二つのコーラスによつて、一段と嚴かに「永遠の記憶」が唱ひ出された。

愈々棺が埋められて了つた時、ある背の高い痩せ顏の一老人が、小高い丘上に立つて恁う叫んだ。

「偉大なるレフは死んだ！　彼の基督教的愛の約束は必ず實行される！　我々の偉大なるレフに取つて大地は輕くあるであらう。」

ロシヤの國民議會はトルストイの死去に際して一日間議事を廢し、又內閣會議は全員起立して弔意を表した。皇帝ニコライ二世でさへ內務大臣の奉呈したトルストイ死去の報告書に、次の如く弔

文を認めた。「ロシヤの最も隆盛な時代の姿を其の天才的藝術の中に描寫した、偉大なる文豪の死去に對して、衷心より哀悼の意を表す。」

トルストイの死は、多くの人々をして、彼が彼等にとつて及び全人類にとつて何であつたかを今更の如く理解させた。數千の感動すべき弔辭と弔電が、其の家族と友人に寄せられ、幾千の弔文が新聞雜誌に載せられて、偉大なる義人、人生の偉大なる教師としての功績が數へ上げられた。トルストイは其の生存中、實際生活に於ても、著書に於ても、博愛と平等の二大精神に基いて全人類を結合させようとした。而して今亦彼の死も全人類の結合に貢献するところが極めて多かつた。各民族、各種の社會的地位の人々（その上流より下層に至るまで）、各種の人生觀を抱懷する人々が、嘗て世に生きて居つた偉大なる人物の一人を失つたと云ふ哀悼の情に於て、全く合致してゐる。

トルストイは其の死去の數ケ月前に、愛孃サアシャ（アレクサンドラ・リヴォウナ）に、當時未だ出版されてない彼の作品を讓渡して、其の金錢でトルストイの家族からヤスナヤ・ポリャーナを買收し、之を土地の百姓に分配するやうに命じた。



トルストイの死後サアシャは、父の未發表の藝術作品を出版して、純益十二萬留を得た。併し是では未だヤスナヤ・ポリャーナ全部を買ひ占めるのには不足なので、チョルトコフの斡旋でスイチン書店に、トルストイの初期の藝術作品全部に對して二年間の發行權を賣り渡すことにした。そして之によつて得た金錢の中から二十八萬留をヤスナヤ・ポリャーナの買收に補充した。

斯樣にして都合四十萬留でトルストイの家族から買ひ上げた土地は七百デシャチーナであつた（ヤスナヤ・ポリャーナの一部、邸宅と庭園の一部、合計二百デシャチーナの土地はソフィヤ未亡人に殘すことになつた）。此の内三百デシャチーナは山林で、其の中から百七十五デシャチーナは伐採のために賣却され、殘りの百二十五デシャチーナは農民の利用に殘した。耕地と草原を合したものが四百デシャチーナあつたが、その内前々からグレツォフカ村、テリャチンカ村の百姓に貸附けられて居た地所は、そのまゝ其等の百姓に與へ、殘部をヤスナヤ・ポリャーナの百姓に與へた。

アレキサンドラ・リヴォウナの定めた條件によると、土地を與へられた農夫はトルストイの主義に從つて、必ず土地を賣却しないこと、個人所有でなく共同所有とすることの二ケ條を嚴守することにした。ヤスナヤ・ポリャーナの農民は贈與された土地を、ヤスナヤ・ポリャーナに屬する人數に應じ

て之を按分し、十年以内に耕地や草原の全部を開拓することにした。以上の如くにしてトルストイの宿望は實現され、かつてトルストイと其の祖先の所有してゐた土地が、之を耕作してゐた農民の使用に移つたのである。

## 四八　結論　悲劇の意義

ロシヤの藝術的創造は、凡てその圓熟しきつた最後の緊張に於て、純然たる宗教的悲劇に終つて居る。ミューズはドストエーフスキイに取つても、ゴーゴリに取つても、トルストイに取つても等しく懷かしい生國であつた。が、彼等の最後は何れも宗教的悲劇に終つて居る。單にトルストイの隱遁に就いて見ても、この事實が既にロシヤ藝術の未來を象つて居るやうに思はれる。曾てビョルンソンが「レフ・トルストイは未來に於ける光明なるロシヤの豫象である。」と云つた言葉も同じ意味で味はふことが出來る。殆んど神聖なる後光に包まれてゐた老順禮の隱遁は、沈滯せる空氣を一掃する夕立の如く、または恐るべきアンチ・クリストの誘惑の如く、全世界を驚かした。凡そ如何なる偉人の行動でも、トルストイの隱遁ぐらゐ世界の視聽を惹いたものはあるまい。長い間重たい



石塊のやうに、歐羅巴の空を壓してゐたトルストイは、全世界の人に取つて一種の謎であつた。多くの者は怪訝の眼を睜つて彼を見てゐた。彼の生涯が萬人の注意の焦點となつてゐたことは今更云ふまでもないことである。然るに一九一〇年十月二十八日の早朝、この石塊は不意に動き出して、廣い曠野の中を轉がり出した。トルストイの隱遁は實に靑天の霹靂であつた。而もこの謎は大いなる悲劇となつて終つた。石塊は遂に破裂して、雨となり、雪となり、崩雪となつて擴がつた。それが或者に取つては戰慄であり、他の者に取つては喜悅であつた。

トルストイは恰度ロシヤの國民傳說中の勇士イリヤ・ムウロメツのやうに、最後の三十年間を一歩も外へ出ずに、一つ所に坐り通した。この三十年の間彼は絕えず創造の悲劇を體驗した。さうして最後に蹶然起つて、人知れぬ世界に動き出したのである。この點に於てトルストイの一生には、ロシヤといふものがそつくり象られてゐるやうに思はれる。大なる悲劇的過去を有するロシヤは、何時までもぢつと動かずに居られる國ではない。矢張りトルストイのやうに、悲劇的カタストローフに達すべき運命を持つて居た。

「トルストイはロシヤ藝術界の森林中に最も高く秀でた一本松であつて、而もロシヤの土地に於

て始めて生長し得べき唯一の喬木である。その梢にはロシヤの歴史的乃至社會的生活の各時代が鮮やかに印せられて居る。何れの國に於ても文學は實生活の花であるが、ロシヤではそれが實生活の雄叫びである。殊にトルストイの呼號には國家を震動させるやうな反抗の聲が響く……。彼はフランスのルソーにスラヴ種族の神祕主義を加味したやうな型の人である。彼は偉大なる藝術家たるの可能を有しながら、自分では寧ろ人道の使徒たらんことを望んで居る」とセンケーウィチは云つた。實際トルストイの行動には實生活の雄叫びが響いて居る。そこに歐羅巴を驚かすべき何物かゞあらねばならぬ。東洋哲學と西歐哲學とが彼に於て對峙して居るといふよりも、寧ろまだ云ひ盡されない未來のロシヤ文明と、既に云ひ盡されて了つた西歐文明とが、彼に於て對峙して居ると云つた方が適切であらう。

八十歳の偉大なる老翁は藝術的悲劇のあらゆる段階を通り越して、最後までも此の悲劇に堪ゆることが出來た。ドストエーフスキイのやうに癲癇にも陷らず、ゴーゴリのやうに發狂もしなかつた。斯くてロシヤ文學はトルストイと共に永遠の旅路に上つた。さうして新らしい見知らぬ境界へ入つた。詩人ネクラーソフの象徴的順禮僧ヴラスは、遂に現實のヴラスとなつた。トルストイの行動に



はあるヒロイツクな所がある。彼こそ本當の意味に於ける英雄ではあるまいか。彼の隱遁は、是迄ぢつと動かずにゐたロシヤ文學のヒロイツクな要素を解放したものである。それによつて文壇の頽廢的空氣は一掃され、天は拭ふが如く晴れ渡り、來らんとするロシヤのヒロイツク時代に對する道が開かれた。

トルストイ、ドストエーフスキイ、ゴーゴリー何といふ偉大な名であらう。この三人は等しく藝術家なるものゝ悲劇を體驗した。藝術家のうちに新らしい人間を見た。さうして新らしい生活を、彼等が夢に描いてゐた新らしいロシヤと結び付けた。そればかりではない、三人は祖國に對する各自の關係を宗教的に意識した天才である。それ故に、藝術の悲劇も三人に於ては共通である。

我々が偉大なる藝術家の創造的生活に深い注意を拂ふ時、我々は彼等の藝術の最後の意義が、神祕の中に閉されて居ることを發見するであらう。現にゴーゴリにしても、トルストイにしても、ドストエーフスキイにしても、その藝術的生活は我々の意表に出て居る。ゴーゴリはその『書簡集』を發表した後、不可思議な煩悶に斃れて、彼を藝術家として崇拜してゐた同胞を吃驚させた。ドストエーフスキイは現實生活の『默示錄』ともいふべき『カラマーゾフ兄弟』を書いて、その讀者を

してロシヤの將來を象つたアリョーシヤ・カラマーゾフの異象に跪拜させた。それよりも猶不可思議なのはトルストイの最後の行爲であつた。之に比べてはゴーゴリの奇も、ドストエーフスキイの異も殆んど不思議とするに足りない。ゴーゴリは要するに偏執として見るべく、ドストエーフスキイは癲癇として解すべく、トルストイに至つては聖人か狂人かの何れかである。

藝術的創造力は、ロマンチシズム、クラツシシズムの時期に於てはまだ實生活との戰鬪に過ぎないが、それが最後の宗教的時期に移ると、直接自己との戰鬪が始まる。單なる美しい形式を造る活動としての自己を否定する。或はトルストイの如く藝術家として破滅する者もあり、ドストエーフスキイの如く人間として破滅する者もある。又はゴーゴリの如く、藝術家としても人間としても破滅する者がある。

藝術家に在つてはその人自身が自己の藝術の形式である。自己を鑄造するのが彼の使命である。彼は自己の中にも、他人の中にも、まだ實現されない別な現實の姿を見て居る。彼は此の別な現實の實現を祈つて止まない。けれども彼の中には未來の眞實と現在の眞實とがこんがらかつて居る。過去の行動が、人間としての彼の行動を決定してゐる。だから彼は先見者としては混亂する恐れが



あり、藝術家としては衰頽する危險に伴はれて居る。要するに藝術的創造力は二つの眞實の決鬪である。過去と未來、全人と超人、神と惡魔の決鬪である。我々はこの事をトルストイ自身が了解したやうに了解しなければならぬ。けれどもトルストイを了解するといふことは、恐るべき悲劇を承認すると同一である。何故ならば、トルストイの藝術は彼が體驗した悲劇の生きた記錄であるからだ。トルストイはゴーゴリ及びドストエーフスキイと共に創作力の破滅を體驗して居る作家である。この三人はロシヤ藝術の悲劇が、安價なロシヤ生活の終らんとする前兆であることを暗示して居る。

藝術家にも二つの型がある。單なる言葉の藝術家と實生活の藝術家とである。言葉の藝術家は一種の技巧家として、文章や文體や律動や描寫によつて、自己の思想を傳へ得る特殊の技能を發揮しようとする。が、實生活の藝術家は、沈默のうちに深く內面生活に沈潛して行く。單に藝術上の關係から云へば、前者の方が遙かに後者よりも進んで居る。けれども何時か彼等に於て、言葉と沈默とが逢着する時が來る。この時が藝術家の生涯に於ける運命の分岐點である。その時彼等の心には自分自身との戰鬪が始まる。その結果言葉の藝術家は今迄の技巧や約束が却つて生活の向上を妨ぐ

る重荷であることを自覺するやうになり、之に反して實生活の藝術家は自己の豐富なる內的經驗を全世界に傳へんとして、始めて言葉を求むるやうになる。玆に於てか言葉の藝術家は默し、沈默の藝術家が物云ふことになる。さうして前者の藝術は跡方もなく消え失せて、獨り實生活の藝術家の沈默が全世界を靡かすやうな言葉となつて發する。トルストイが死する數ケ月前、或訪問客に語つた言葉は、單なる言葉の藝術と實生活の藝術との關係を、最も具體的に表明した名言であると思ふ。彼は云ふ、「本來は事物も藝術もみな空なものである。不要なものである。何の爲に書物ばかりが必要であらう。口から口に傳へらるゝ傳說は却つて他のものより遙かに人を感動させる。實生活其物は書物よりも遙かに强く、深く我々を感化する。私は或時百姓小屋の小さな窓を覗いたことがある。その時恰度一人の墮落した女が、一心に祈禱して居るのを見た。その痛恨の涙と神聖な祈禱とは書物よりも遙かに强く私を動かした。私の『戰爭と平和』などは、人が最高の藝術として譽め囃してゐるが、決してそんなものぢやない。あれは下らんものぢや。何にも用のない退屈な書物だ。實生活の方があの書物よりも遙かに高尙である。それ故に我々は藝術上寫實主義を悅ぶものである。何故といふに、寫實主義は現實に最も近いからだ。」



由來天才には其天才以上の段階に達せんとして、天才としての自己を壓倒せんとする神祕的作用が働いて居る。この作用の過程が卽ち沈默である。沈默とは要するに言葉と言葉以上の生活とを結合しようとする內的希求である。この場合沈默は天才の內面生活を支配して、言葉は單なる符牒に過ぎないものとなる。この境地が卽ち天才の絕對境である。この程度に近づいて而も到達し得なかつた天才にニイチェがあり、ゴーゴリがあり、ドストエーフスキイがある。唯一人晩年のトルストイだけは世界の面前に於て此の絕對境に立つて居る。

トルストイの藝術的天才は彼をして其生涯の前半期に於て、彼以前旣に少數の人が云つたやうなことを云はしめた。けれども彼の實生活の叡智はやがて彼の藝術的天才を壓倒して了つた。その生涯の後半期に於て、彼は最早以前『戰爭と平和』や、『アンナ・カレニナ』に於て云つたことを云はなくなつた。彼は全然沈默した。勿論後半期にも多くの作品はある。けれども其等の作品にはトルストイの沈默の眞髓は現はれてゐない。其等の作品が晩年に於けるトルストイの幽玄なる哲學と道德的理想とを證明して居ることは私も疑はないが、藝術的天才は全然默して居る。けれどもその沈默は言葉以上の力を以て我々を壓じて居る。之に反して、この期間に彼が言つたところのことは、

斯種のことに就いて彼以前に言はれたことに比べて別に優れたところはない。彼が晩年『讀書の輪』の選輯に從事したのも道理である。けれども自己の內面生活に沈潛するに從つて、彼は益〻默するやうになり、彼の言葉は吃音のやうに重く、拙くなつた。さうして此の沈默の偉大なる力が刻々に近づく噴火山の爆發の如く、我々を支配した。「彼は幸福と不幸とに同時に醉つた。死と不滅とを同時に飲んだ。彼の自己生活の否定は、やがて、ヨリ高い外面生活に對する叫びである。彼の發見した平和、彼の欲求した心の平和は死の平和ではなかつた。それは寧ろ無窮の空間を重力の法則に據つて航進する、かの焦熱世界の靜寂である。彼に在つては憤怒は靜寂であり、靜寂は火焰であつた」と、ロマン・ローランは云つてゐる。

トルストイは誰も知る如く、單純に向ひ、明瞭を欲し、質朴を求めた。けれども此の明瞭と單純と質朴とは、彼に在つては大なる非單純であり、非明瞭であり、非質朴であつた。簡明に發表された言葉と、深く沈潛して容易に發表されない內的經驗との結合—これがトルストイの偉大なる悲劇であつた。自己の人間的天才を壓倒して、更に別な、凡人の窺知し難い境地に達せんとした天才の悲劇であつた。その生涯の後半期に於ける此の偉大なる沈默家の教說は、その沈默の內容の萬分の一





をも傳へてゐない。之を傳ふべき言葉が最早彼に無かつたのである。彼の明瞭と單純と質朴とは、その中にいろ〳〵な多くの意味を含んでゐた。そこに彼は人間の創造力の生きた謎として現はれて居る。多くの者はトルストイと爭ひ、トルストイの教義を反駁し、その說の不成立を證明した。けれども結局凡ての者はトルストイに惹付けられて了つた。この魅力は彼の言葉に在つたのではなく、彼自身に在つたのである。互ひに鬪つて居る智的、道德的、藝術的思想を一身に包容しながら、何所か曠野の一角に『讀書の輪』を手にして、ぢつと默して居るトルストイの姿を思ひ浮べる時、私は一種の崇高と偉大とを感ぜずには居られない。ヤスナヤ・ポリャーナから發して幾多の思潮を動かした、その絕大な潛勢力は彼の言說や行動に在つたのではなく、正しく彼自身に、彼の人格に含まれてゐた。彼の偉大なる沈默に含まれてゐた。

沈默はトルストイに於ては雄辯であつた。彼の沈默は死の沈默でなく、生の沈默であつた。この戰鬪は暫らく續いた。沈默の戰鬪—それが多くの者をトルストイに惹付けたのである。彼はヤスナヤ・ポリャーナに坐してゐながら、その沈默は全世界を動かした。多くの者はトルストイの偉力を直覺し、彼より發する光を感じた。けれども彼は安價な勝利を欲しなかつた。彼は最後の勝利、最

後の光明を欲した。彼が光明を語つてゐた時代には、自身まだ光明を得てゐなかつた。淋しい地上の面影はまだ何所となく彼に殘つてゐた。然るに晩年のトルストイを訪問したアンドレーエフはその印象を次の如く語つて居る。「今のトルストイ伯は作家でもなければ批評家でもなく、また哲學者でもない。彼は全く聖人である。醒めた賢人である。その身邊には一種の軟かな光が輝いてゐる。凡て安靜と調和の象である。それでトルストイ伯に對した時の氣持は、溫かく、軟かな、ふうはりとした、夢のやうな氣持である。その頰や顎の軟かな髯、そのお粗末な外套、その蒼く輝く雙の眼—凡てがしんみりとした靜かな印象を與へる」と。老文豪の晩年の俤が偲ばれるではないか。

トルストイが世界に向つて絕叫した簡明卒直な教義の蔭には、大なる沈默が横はつてゐた。彼の說く單純には非單純が響いてゐた。偉大なる老翁は子供を集めては、彼等と單純に明瞭に物語つた。けれども彼の唇は此の單純と明瞭とを通して、ある底知れぬ深い沈默を語つてゐるやうに思はれた。單純であるだけ幽玄であつた。明瞭であるだけ底深かつた。たゞ深みの明るさであつた。晩年に於けるトルストイのあらゆる判斷思索は、トルストイの心底からの深みでなく、表面の輝きに過ぎなかつた。だからトルストイの教義は明瞭であるだけ、之を否定するにも容易である。唯不思議



なことには之を否定した後に、その教義が却つて我々を惹付ける一事である。この魅力の根源がその教義に在るのでなく、トルストイ自身に在るといふことは、この一事でも明白であると思ふ。トルストイに於て天才の藝術家は故意に沈默して、說教家哲學者が代つてその地位を占めて居る。けれどもトルストイの眞の說教は、その言說に現はれずに、沈默に現はれた。我々は曾てトルストイに於て言葉の藝術家が自滅したことを惜んだ。が、その自滅した理由を質して見るに、それは言葉よりも最つと多くを語る表情が必要であつたからだ。それを知らずに、我々はトルストイに於て此の表情をも否定した。ところが今や我々はトルストイの沈默の意義を十分に了解することが出來る。彼の藝術的天才の沈默は、その天才を更に深めようとする內的努力であつた。最後の高尙な程度に達せんとする一種の苦行であつた。それ故にトルストイの創造力は言葉の上にも隨分現はれて居るが、沈默に於て一層雄辯に現はれてゐる。沈默を蔽うてゐた言葉は畢竟禁慾的苦行の手段に過ぎなかつたのである。

やがて此の沈默が不意に爆發する時が來た。トルストイ敎の蔽ひはすつかり取れて了つた。天才の藝術家は此の長い沈默の間に、自己の實生活の創造者となつて現はれた。斯くて言葉は肉となつ

た。實生活の天才と藝術の天才とは最高の調和に於て結合された。創造力の二面は互ひに接觸した。ヤスナヤ・ポリャーナは最後の接觸の電光に輝いた。トルストイは起つて見知らぬ世界に行つた。さうして死んだ。彼はその隱遁と死とによつて、ロシヤの單調な曠野を照らした。それまで此の曠野にはゴーゴリの「トロイカ」（三頭曳の橇）が駈廻り、吹雪が暴れ、哀愁がさ迷うてゐた。それがトルストイによつて、たとへ一時であつたとはいへ、明るい曠野となつた。

斯くてロシヤの偉大なる藝術家は、我々に神聖の理想を示した。民衆への橋渡しをした。宗教と無宗教、沈默と言葉、實生活の創造と藝術的創造、知識階級と農民—それが臨終間際のトルストイの最も雄辯的な最後の行動に於て結合された。今の知識階級は死の床を四壁の中に求めようとする。然しトルストイの最後の床は廣い曠野であつた。農民の世界であつた。トルストイの隱遁と死とはそれ自身が既に偉大なる說教であり、偉大なる藝術であり、偉大なる生活行動である。生活と說教と藝術とが一つの刹那、一つの行動に結合された。この天才の沈默の行動が、卽ち天才の神祕的境地である。この藝術的創造力の最後の神祕に近づかんとして、ニイチェは發狂し、ゴーゴリは斃れ、ドストエーフスキイは破滅した。たゞ獨りトルストイに於てのみ、この天才の神祕は明るい



光を放つた。

トルストイの人格の光によつて貫かれた藝術的活動の中心點は、愈々その最後に至つて、それが宗教的創造の外廓であることを我々に示した。彼に於て藝術的終焉は宗教的發端であつた。彼が最後の藝術的行動は彼が最初の宗教的行動であつた。やがてはロシヤを照らすべき生の太陽の第一の光であつた。

# トルストイ（終）



## 附錄　トルストイ年譜

一八二八年　八月二八日、トゥーラ縣ヤスナヤ・ポリャーナの村莊に生る。ロシヤ名門の出、姓はトルストイ、名はレフ、父稱ニコラーエウィチ。

一八二九年（一歲）　母マリヤ死す。

一八三六年（八歲）　父ニコライ死す。五人の兄弟と共に叔母オステン・サーケン夫人に養はる。

一八四一年（十三歲）　オステン・サーケン夫人死す。他の叔母ユーシコフ夫人に養はるべくカザンに移る。

一八四三年（十五歲）　カザン大學に入る。最初東洋語學部を選びたるが、落第して法科に轉ぜり。この頃ルソーの書に讀み耽り、その感化を受く。

一八四七年（十九歲）　學業を廢して兄ニコライと共にヤスナヤ・ポリャーナに歸る。寬仁なる地主として農奴の爲に盡さんとせしが、失敗に終る。『地主の朝』はこの間の消息を描く。

一八五一年（二十三歲）　これより先ペテルブルグに赴き、自由放縱の日を送る。この年四月兄ニ

コライが高架索の砲兵隊にあるを追うて、その地に至り、止まること三年、青春の危機は去り、藝術的創造の意圖盛んに動き來る。

一八五二年(二十四歳)『幼年時代』、『地主の朝』、『コザック』、『襲撃』等を書く。『幼年時代』は處女作にして、この年九月、雜誌『現代人』(ソヴレメンニク)にLNTの匿名を以て發表す。

一八五三年(二十五歳)クリミヤ戰爭起る。砲兵士官として從軍す。

一八五四年(二十六歳)セバストーポリ防禦軍に加はる。陣中にて『少年時代』を書く。

一八五五年(二十七歳)『伐木』、『セバストーポリ物語』の作あり。この年八月セバストーポリ開城。兵役を棄つ。ペテルブルグに上京し、『現代人』を中心とする中央文壇の人々に迎へらる。

一八五六年(二十八歳)ヤスナヤ・ポリャーナに歸る。『戰場にてモスクワの知人と逢ふ』、『吹雪』、『二人の驃騎兵』、『玉突數取の備忘錄』等の作あり。

一八五七年(二十九歳)一月歐洲漫遊の途に就く。パリーにて死刑を見、强き印象を受く。八月、ドイツを經て歸國す。『青年時代』、『リュセルン』、『アルバート』等の作あり。

一八五九年(三十一歳)『三つの死』、『結婚の幸福』を書く。



一八六〇年(三十二歳)兄ニコライ死す。その死に深き印象を受けて思想の一轉化を來せり。この年『ポリクーシュカ』の作あり。外國を漫遊して、獨、佛、英等に於ける初等教育の制度を研究す。

一八六一年(三十三歳)農奴解放令下る。トルストイは鄕里の農民貴族間の仲裁者に任ぜられ、村莊に歸る。ツルゲーネフと激しく爭ひ、絶交す。ヤスナヤ・ポリャーナに學校を開き、教育雜誌を發行し、『模範國民讀本』を出版す。又『國民教育を論ず』以下數篇の論文を發表す。

一八六二年(三十四歳)・肺部の疾患を感じ、草原地方に遊びて馬乳療法を試む。この頃より政府の彼に對する警戒漸く甚しく、留守宅は官憲の搜索するところとなる。この年九月宮廷醫ベルスの二女ソフィヤ・アンドレーエウナと婚す。この時ソフィヤ十八歳。

一八六四年(三十六歳)『戰爭と平和』の著に着手す。

一八六九年(四十一歳)『戰爭と平和』を完結す。この年ショーペンハウエルを讀んで大に感激す。

一八七三年(四十五歳)『入門讀本』を書く。この年『アンナ・カレーニナ』の稿を起す。同年サマラ州の飢民救助に盡力し、救恤金二百萬ルーブルを得て之を施す。

一八七七年(四十九歳)『アンナ・カレーニナ』を完成す。生涯の危機漸く迫る。
一八七八年(五十歳)『十二月黨』の作あり。斷片なり。この年ツルゲーネフと和解す。
一八八一年(五十三歳) 民話『人は何によつて生くるか』、論文『教條的神學の批判』の著あり。『四福音書の統一と飜譯』の著に着手す。この年アレキサンドル二世の暗殺は、彼に深刻なる印象を與ふ。
一八八二年(五十四歳)『我が懺悔』を公にす。所謂「轉機」を告白せる書なり。この年の冬モスクワに民勢調査の企てあり。彼は窮民の慘狀を眼前に見、以後數ケ月間全く絶望狀態に沈む。
一八八三年(五十五歳)『我が宗教』を公にす。この年ツルゲーネフ死す。死に臨み、トルストイに再び文藝に歸らんことを勸告す。
一八八四年(五十六歳)『我等何を爲すべきか』を公にす。これ第二の危機の表現なり。この年より年來の嗜好たる狩獵を廢す。
一八八五年(五十七歳)『二老人』、『愛する所に神あり』、『火を等閑にせば』等の通俗物語を書く。



一八八六年(五十八歳)『イワンの馬鹿』、『人はどれだけの土地を要するか』、『三老人』、『疾い脚』、『馬の話』、『蠟燭』、『教子』、『イリアス』等を書く。何れも通俗物語にして、ロマン・ローランが「藝術以上の藝術」と推賞せるもの。この年戯曲『闇の力』、小說『イワン・イリイチの死』を書く。
一八八七年(五十九歳) 通俗劇『最初の釀造者』、論文『人生論』を公にす。十月銀婚式を擧ぐ。
一八八八年(六十歳) 『あるうち光の中を歩め』を書く。
一八八九年(六十一歳) 論文『手の勞働と智的勞働』を公にす。
一八九〇年(六十二歳) 小說『クロイツェル・ソナタ』を公にす。
一八九一年(六十三歳) ロシヤ全土に大饑饉あり。大規模の救恤をなす。
一八九三年(六十五歳)『神の國は爾等の衷にあり』、『兩性論』、『汝の本心に歸れ』等を公にす。
一八九五年(六十七歳)『愛國心と基督教』、小說『主人と下男』を公にす。この年七月高架索にツホボル教徒事件あり。
一八九六年(六十八歳) 小說『ハヂ・ムラート』を起稿す。

一八九八年(七十歳)『藝術論』の著あり。
一八九九年(七十一歳)『復活』を公にす。
一九〇〇年(七十二歳)『現代の奴隷制度』を書く。
一九〇一年(七十三歳)正教會より破門せらる。内外に非常なる反響を喚起せり。『破門の命令に對する宗務院への答』、『愛國と政府』、『唯一の手段』、『皇帝及びその輔弼者』等の諸論文を公にす。この年危險なる疾患あり、クリミヤに轉地す。
一九〇二年(七十四歳)『宗教とは何ぞや』、『勞働者へ』等を公にす。
一九〇三年(七十五歳)『シェクスピヤ論』を發表す。『舞踏會の後』、『贋造手形』等の作あり。
一九〇四年(七十六歳)時恰も日露戰爭に際し、『汝自らを思へ』の一文を發表す。
一九〇六年(七十八歳)『讀書の輪』を公にす。一年三百六十五日に配したる賢哲の語錄なり。
一九〇九年(八十一歳)トルストイ博物館ペテルブルグに開かる。『平和會議に與ふ』を公にす。
一九一〇年(八十二歳)十月二十八日(新曆十一月十日)家出す。途中肺炎に罹り、十一月七日(新曆廿日)アスターポウォ驛に死す。(年譜了)



トルストイ

定價壹圓五拾錢

昭和六年六月十一日印刷
昭和六年六月十五日發行

著者　昇直隆

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町一番地　株式會社三省堂　右代表者　龜井寅雄

印刷所　東京市外蒲田町　株式會社三省堂蒲田工場

【本製蒲田】

發行所　(東京市神田區通神保町一番地)株式會社三省堂
(大阪市西區阿波座下通二丁目六番地)株式會社三省堂大阪支店

偉人の姿、生けるがまゝの姿を見よ!!!

トルストイ　昇曙夢著　四六判・美裝　三五〇頁　定價一圓五十錢　送料十二錢

ハイネ　高橋健二著　四六判・美裝　四〇〇頁　定價一圓五十錢　送料十二錢

フォード　清澤洌著　四六判・美裝　四〇〇頁　定價一圓五十錢　送料十二錢

法然　中里介山著　四六判・美裝　三二〇頁　定價一圓五十錢　送料十二錢

發行所　株式會社　三省堂

三省堂の歴史年表といへば、正確と詳細とのシノニムである。歴史を繙き、偉人の業蹟を知らんとせば、まづ本書を!!!

三省堂編輯所編（改訂增補）

模範　最新世界年表　三六判・美裝・五六〇頁　定價一圓五十錢　送料八錢

大森金五郎・高橋昇造共編

最新日本歴史年表　三六判・布裝・七〇〇頁　定價三圓八十錢　送料十二錢

發行所　株式會社　三省堂

清澤洌著

# 巨人を語る

四六判・美本・三五〇頁
定價一圓二十錢
送料八錢

世界の活舞臺に雄飛する巨人群を、著者のメスは如何に明快に解剖するか。まづ讀み給へ。面白く、味はひ盡きぬものがある。

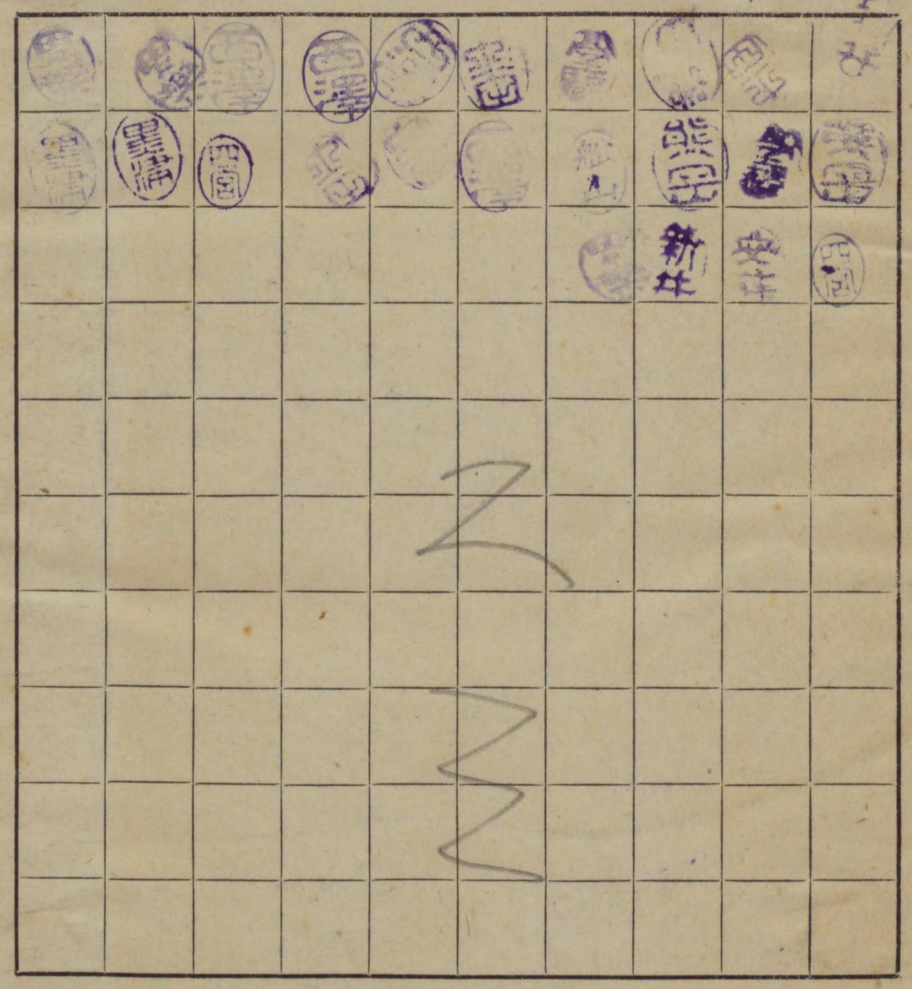
**内容**

マクドナルド　ムッソリニ　フウヴァー　ヒンデンブルグ
ブリアン　スタールリン　クーリッヂ　ボールドウイン
ヒューズ　アル・スミス　リンドバーク　ベーブ・ルース
エヂソン　ライト　フォード　バード
マルコニ　ソクラテス　リンカーン　キャプテン・クツク
カーネギー　カイゼルとビスマルク

發行所　株式會社　三省堂

603
269

6年 7月17日 140



三省堂版

**Kodak** Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

**Kodak** Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black